




下味野古墳群 I

姫鳥線整備促進関連事業に係る
下味野40～44号墳の発掘調査報告書

 鳥取大学附属図書館



0050277748

2002.3

財団法人 鳥取市文化財団

下味野古墳群 I

姫鳥線整備促進関連事業に係る
下味野40～44号墳の発掘調査報告書

2002.3

財団法人 鳥取市文化財団

鳥取市文化財団氏寄贈

序 文

鳥取市は、鳥取県の県庁所在地として、また、山陰地方の中核都市として発展してきた、人口15万人あまりを擁する地方都市です。

鳥取市内には、鳥取平野をはじめその周辺丘陵に、数多くの遺跡が存在しています。これらの埋蔵文化財は地域の先人たちの生活を語る歴史資料であり、後世に継承していくべき市民の貴重な財産です。このような認識のもと、財団法人鳥取市文化財団では、開発と文化財の共存をはかるべく、各関係機関の協力を得ながら埋蔵文化財発掘調査事業を進めています。

さて、今回実施した下味野古墳群の調査は、姫鳥線整備促進関連事業に係る発掘調査として、平成12年度から調査を行ってきました。調査の結果、古墳時代中期から後期にかけての古墳、埋葬施設とともに各種副葬品など貴重な遺物が検出され、当地域の古代文化の一端を明らかにする資料を提供することができました。ささやかな冊子ではありますが、市民各位ならびに関係各位の埋蔵文化財の理解に供していただければ幸いです。

おわりに、今回の発掘調査にあたり、ご理解とご協力をいただきました地元の皆様をはじめ関係各位の方々に、心から感謝申し上げます。

平成14年 3 月

財団法人 鳥取市文化財団
理事長 西 尾 迢 富

氏
寄
贈

例 言

1. 本書は、中国横断自動車道 姫路鳥取線整備促進関連事業の事前調査として実施した^{しもあじのこふんぐん}下味野古墳群の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、財団法人 鳥取開発公社の委託を受けて、財団法人 鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財調査センターが、平成12年度に現地調査を実施し13年度に報告書を作成した。
3. 発掘調査を実施した古墳群の所在地は、鳥取市 下味野 字童子山、小山谷である。
4. 発掘調査によって作成された記録類および出土遺物は、鳥取市教育委員会に保管されている。
5. 現地実測、図面の作成は、調査員、補助員を中心に調査参加者全員の協力のもとに行い、出土遺物の整理および遺物実測は、杉谷 美恵子を中心として行い、下多 みゆきがこれを補佐した。
6. 本書の編集は、藤本 隆之が行い、小杉 雄貴がこれを補佐した。本文の執筆は藤本、出土遺物観察表は杉谷、図面の浄書は下多が行った。
7. 現地調査から報告書作成にいたるまで、次に列記している多くの方々からの指導、助言ならびに協力をいただき、厚く感謝いたします。

鳥取県土木部道路課、姫路鳥取線用地事務所、財団法人 鳥取開発公社、鳥取市建設部土木建設課
鳥取刑務所、中野 知照、高尾 浩司、山内 清(順不同、敬称略)

凡 例

1. 本報告書における方位はすべて磁北を示し、レベルは海拔標高である。
2. 今回の調査によって出土した遺物は、調査年度、古墳番号、主体部番号、取上げ順による遺物番号(遺物台帳登録番号)、取上げ年月日を基本的に注記し、写真や図面などの記録類も同様である。

本文目次

序文	
例言	
凡例	
第1章 発掘調査の経緯	
1. 発掘調査に至る経緯	1
2. 発掘調査の経過	1
3. 調査の組織・体制	2
第2章 遺跡の位置と歴史的環境	3
第3章 調査の結果	
第1節 下味野古墳群の立地と構成	10
第2節 古墳の調査	10
1. 下味野40号墳	15
2. 下味野41号墳	24
3. 下味野42号墳	27
4. 下味野43号墳	33
5. 下味野44号墳	39
6. その他の埋葬施設	47
第3節 まとめにかえて	48
出土遺物観察表	51
写真図版	
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図	下味野古墳群周辺遺跡分布図……………7	第16図	42号墳 墳丘外出土遺物実測図……………28
第2図	下味野古墳群分布図……………8	第17図	42号墳 墳丘遺存図・断面図……………29・30
第3図	下味野古墳群 調査地地形図……………11・12	第18図	42号墳 主体部実測図……………31・32
第4図	下味野古墳群 墳丘遺存図……………13・14	第19図	43号墳 主体部出土遺物実測図……………34
第5図	40号墳 主体部出土遺物実測図(1)……………15	第20図	43号墳 墳丘遺存図・断面図……………35・36
第6図	40号墳 主体部出土遺物実測図(2)……………16	第21図	43号墳 主体部実測図……………37・38
第7図	40号墳 墳丘遺存図・断面図……………17・18	第22図	43号墳 周溝出土遺物実測図……………39
第8図	40号墳 主体部実測図……………19・20	第23図	43号墳 墳丘肩部出土遺物実測図……………39
第9図	40号墳 主体部出土遺物実測図(3)……………21	第24図	44号墳 主体部出土遺物実測図……………40
第10図	40号墳 主体部出土遺物実測図(4)……………22	第25図	44号墳 墳丘・周溝出土遺物実測図……………40
第11図	40号墳 墳丘外出土遺物実測図(1)……………23	第26図	44号墳 墳丘遺存図・断面図……………41・42
第12図	40号墳 墳丘外出土遺物実測図(2)……………23	第27図	44号墳 主体部実測図……………43・44
第13図	41号墳 表土・盛土・墳丘外出土遺物実測図……………24	第28図	SX-01 実測図……………45・46
第14図	41号墳 墳丘遺存図・断面図……………25・26	第29図	SX-01 出土遺物実測図……………47
第15図	42号墳 表土・墳丘・周溝出土遺物実測図……………28		

写真図版目次

図版1	調査地遠景(南西上空から)平成12年9月撮影 調査地全景(北西から)	図版14	42～44号墳 調査前(北西から) 43号墳 墳丘検出状況(南東から) 43号墳 墳丘検出状況(南西から)
図版2	40号墳 墳丘検出状況(南西から) 40号墳 主体部内遺物出土状況(北東から) 40号墳 主体部内遺物出土状況(東から)	図版15	43号墳 主体部検出状況(北東から) 43号墳 主体部内遺物出土状況(北西から)
図版3	44・43号墳 周溝検出状況(北西から) 44号墳 主体部木棺痕跡検出状況(北西から) 44号墳 主体部断面(北西から)	図版16	43号墳 主体部内遺物出土状況(北西から) 43号墳 主体部内遺物出土状況(北西から)
図版4	43号墳 主体部内遺物出土状況(北西から) 43号墳 主体部断面(北西から)	図版17	43号墳 主体部断面(北西から) 43号墳 完掘状況(南東から) 43号墳 主体部完掘状況(北東から)
図版5	43号墳 主体部検出状況(北西から) 43号墳 主体部断面(北西から)	図版18	41～44号墳 調査前(北西から) 44～42号墳 周溝検出状況(北西から) 44号墳 西裾断面(南西から)
図版6	40号墳 主体部出土遺物(1) 40号墳 墳丘外出土遺物(1) 43号墳 主体部出土遺物(1) 40号墳 主体部出土遺物(2)	図版19	44号墳 東裾断面(南西から) 44号墳 墳丘検出状況(南西から) 44号墳 完掘状況(南東から)
図版7	40号墳 調査前(北西から) 40号墳 北東裾断面(南東から) 40号墳 北西裾断面(北東から)	図版20	44号墳 主体部内遺物出土状況(南東から) 44号墳 主体部検出状況(北西から)
図版8	40号墳 墳丘検出状況(北西から) 40号墳 主体部断面(北西から) 40号墳 主体部断面(北東から)	図版21	44号墳 南側墳丘断面(南から) 44号墳 北側墳丘断面(北東から) SX-01 検出状況(北東から)
図版9	40号墳 主体部検出状況(北西から) 40号墳 主体部内遺物出土状況(北東から) 40号墳 完掘状況(北西から)	図版22	SX-01内 遺物出土状況(北西から) SX-01内 遺物出土状況(北西から) SX-01 完掘状況(南東から)
図版10	41・42号墳 調査前(北西から) 41号墳 北裾断面(北東から) 41号墳 西裾断面(北から)	図版23	40号墳 主体部出土遺物(3)
図版11	41号墳 墳丘検出状況(西から) 41号墳 墳丘検出状況(北から) 41号墳 東西墳丘断面(北から)	図版24	40号墳 墳丘外出土遺物(2) 41号墳 表土・盛土・墳丘外出土遺物
図版12	42～44号墳 調査前(東から) 41・42号墳 墳丘検出状況(北西から) 42号墳 東裾断面(南西から)	図版25	42号墳 表土・墳丘・周溝出土遺物 42号墳 墳丘外出土遺物 43号墳 主体部出土遺物(2)
図版13	42号墳 主体部断面(北東から) 42号墳 主体部検出状況(北東から) 42号墳 周溝内遺物出土状況(北西から)	図版26	43号墳 周溝・墳丘肩部出土遺物 44号墳 主体部出土遺物 44号墳 墳丘・周溝出土遺物(1)
		図版27	44号墳 墳丘・周溝出土遺物(2) SX-01 出土遺物(1)
		図版28	SX-01 出土遺物(2) 生痕化石

第1章 発掘調査の経緯

1. 発掘調査に至る経過

下味野古墳群は、中国山地から派生する丘陵の末端に営まれている鳥取市下味野地内を中心とする古墳群である。標高は概ね50～160m付近に位置する。過去に行われた遺跡の踏査により、この丘陵上に大小様々な古墳が40数基余り分布していることが明らかとなっている。平成11、12年度には丘陵の末端に位置する服部墳墓群の一部が発掘調査され、弥生時代後期から古墳時代の墳墓、古墳から構成される墳墓群であることが明らかとなってきている。また、本古墳群の北東に昭和44年(1969年)、丘陵と服部集落との間の水田から圃場整備工事によって弥生時代中～後期の土器とともに田下駄、大足が出土している。古来、丘陵の北東側に広がる菖蒲集落を中心とする平野部一帯は、律令体制下では因幡国高草郡に含まれ、白鳳時代の菖蒲廃寺の建立や、郡衙の推定地など歴史ある地域として知られている。本格的な発掘調査例としては、昭和62年に北村恵儀谷遺跡、平成3年に釣山古墳群、平成4年に古海古墳群、翌5年に菖蒲遺跡、平成6、7年度に山ヶ鼻遺跡などがあり、古くは縄文時代後期から人の足跡がたどれる地域となってきている。

今回の発掘調査の契機となった姫鳥線整備促進関連事業は、下味野古墳群が所在する丘陵に建設予定地が計画されているものである。工事範囲内には複数の古墳が分布し、事前の踏査の結果、明らかに古墳の存在が確認されたことにより、鳥取市教育委員会と関係機関との路線変更等を含め種々の協議を行ったが、現状での保護、保存は難しく記録保存で対応することとなった。

2. 掘調査の経過

下味野古墳群の発掘調査は、財団法人 鳥取開発公社の委託を受け、財団法人 鳥取市文化財団埋蔵文化財調査センターが調査を行なった。

平成12年度は、進入路の整備や資材搬入などの調査準備の後、平成12年11月から開始した。立ち木の伐採整理の後、44号墳から42号墳を結ぶほぼ尾根主稜線上に基準ライン(44A～42A杭)を設け、42A杭から北に10°角度を振って41A杭を、南へ35°振って40A杭を設置し、各古墳について測量杭を設定した。その後、現況の地形測量を行った。表土除去作業は尾根高位の44号墳から順次進め、合わせて墳丘の検出を行った。墳丘検出の後、墳丘遺存実測を行い、続いて埋葬施設の検出に着手した。44～42号墳は各1基の埋葬施設を有し、いずれも古墳時代中期から後期にかけての築造であることが明らかとなった。なかでも43号墳からは石棺内から鉄鉾、鉄剣が出土している。41号墳南半は流失しており、埋葬施設を検出することはできなかった。40号墳は墳頂部の削平が著しいものの、埋葬施設から鉄剣、刀子、鉄鏃、勾玉、ガラス小玉などが出土した。また、この他に42号墳の南西部で埋葬施設とみられる土坑などを検出した。埋葬施設の調査の後、盛土除去、断割などの墳丘の調査を行った。調査面積は1,525m²である。

こうして、平成12年3月末で現地調査を完了した。検出した各遺構、遺物については適宜写真撮影や実測して記録をとり、各古墳単位や調査区全体の写真撮影を行なった。出土した遺物と写真や図面などの記録類の整理は現地調査と並行して進め、土器については、水洗い、バインダー処理の後注記、復元作業を行なった。また、報告書作成作業は平成13年度に行い、平成14年3月末に終了した。

3. 調査の組織・体制

発掘調査の組織、体制は以下のとおりである。

平成12年度

調査主体	財団法人	鳥取市文化財団
		理事長 西尾 迺 富(鳥取市長)
		副理事長 本多 達 郎
		米澤 秀 介
		常務理事 田中 哲 夫
		事務局長 小杉 宗 雄
調査指導	鳥取市教育委員会事務局	文化課
事務局	財団法人	鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財調査センター
		所 長 藤 井 博
		副 所 長 加 藤 卓 美
		前 田 均
		調査事務 秋 田 澄 世
		水戸口 直 美
調査担当	財団法人	鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財調査センター
		調 査 員 藤 本 隆 之
		谷 口 恭 子
		調査補助員 木 原 美 和
		小 杉 雄 貴
		白 岩 千 足
		森 克 之
		矢 芝 泰 伸

平成13年度

調査主体	財団法人	鳥取市文化財団
		理事長 西尾 迺 富(鳥取市長)
		副理事長 伊藤 憲 男
		米澤 秀 介
		常務理事 田中 哲 夫
		事務局長 小谷 荘太郎
調査指導	鳥取市教育委員会事務局	文化課
事務局	財団法人	鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財調査センター
		所 長 藤 井 博
		副 所 長 加 藤 卓 美
		前 田 均
		主 幹 山 田 真 宏
		調査事務 秋 田 澄 世
		水戸口 直 美
		白 岩 千 足
調査担当	財団法人	鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財調査センター
		調 査 員 藤 本 隆 之
		調査補助員 杉 谷 美 恵 子
		小 杉 雄 貴
		下 多 みゆき

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

鳥取市は県東部に位置し、面積237.25㎢、人口15万人余りを擁する県庁所在地である。市域のの三方は山に囲まれ、北は日本海を臨む鳥取砂丘が広がる。市の中央には中国山地を源とする千代川が流れ、この下流域に広がる鳥取平野は、縄文時代前期の縄文海進時には複雑に入り組んだ内湾状を呈していたとみられ、海退に伴う湖沼化と海岸部の砂洲の発達、千代川が運ぶ膨大な土砂の堆積によって形成された沖積平野である。

今回調査した下味野古墳群は、鳥取市下味野地内に所在する標高70m余りの丘陵に立地する。JR鳥取駅から直線にして南西約4.5kmの位置である。この丘陵は東に千代川を望みながら中国山地から鳥取平野へと延びる丘陵の、標高294mの八町山を頂として更に北東へと延びる丘陵北端部に位置し、最北端は有富川を隔てた釣山(標高105m)である。1985年(昭和60)の鳥取国体を一つの契機として、国道29号線(旧国道53号線鳥取南バイパス)が菖蒲と服部集落の間を通過して南吉成へと開通し、その沿線に店舗や各種事業所が、墳墓群の所在する丘陵の北西側には東郷工業団地が進出するなど、調査地以北では開発が著しい地帯となっている。ただ、南側の丘陵縁辺部においては、のどかな田園風景が広がる地域でもあるが、今後の開発によってその様相は一変するものと思われる。

縄文時代

鳥取平野において最初に人の足跡がたどれるのは、千代川東岸の浜坂地内の砂丘で採集された黒曜石製の有舌尖頭器である。詳細は不明ながら旧石器時代まで遡る可能性をもつ遺物である。続く縄文時代前期の遺跡として、砂丘後背地の低湿地に立地する福部村栗谷遺跡が中期から始まる直浪遺跡とともに、後・晩期まで続く遺跡として知られている。やや遅れ、前期末の大歳山式土器が千代川東岸の丘陵上に立地する美和古墳群下層遺跡から微量ながら出土している。また、下味野古墳群から北西へ4km、湖山池南東岸の低湿地に立地する桂見遺跡は現在のところ前期末を初源とし、東桂見遺跡、布勢第1遺跡とともに後期を中心とした湖山池南東岸の低湿地遺跡群として知られる。桂見遺跡ではこれまで数度にわたる調査が行われているが、平成6、7年度に全長7.2、6.4mの丸木舟が相次いで出土し話題となった。桂見遺跡の東側に位置する布勢第1遺跡では木組みをもった水路や漆塗で木製の広口壺や腕輪が出土し、高度な漆技術が示された。また、湖山池に浮かぶ青島遺跡では、磨消縄文の浅鉢など多くの遺物が出土している。中期の遺跡としては砂丘地に立地する栃木山遺跡、追後遺跡、天神山遺跡があげられるが、中期の断片的な土器の出土にとどまる。下味野古墳群調査地から1.5km北の山裾に位置する本高段木遺跡では二次堆積とみられるものの晩期の突帯文土器が出土している。また、そのさらに北側、釣山の北東に広がる山ヶ鼻遺跡で、縄文時代後期後葉から晩期前葉に比定される土器群が出土している。さらに千代川の自然堤防上に立地する古海遺跡では突帯文土器の良好な資料が出土しており、中期から晩期へかけて遺跡の立地場所が推移していく状況が窺える。布勢第1遺跡では晩期後半になると平野中心部の微高地上に遺跡が進出するようになる。このように後期も後半を過ぎると遺跡は自然堤防上へ進出するようになり、晩期後半になると平野中心部の微高地へ進出するようになる。また、千代川左岸では、岩本第2遺跡、帆城遺跡、湖山第2遺跡、岩吉遺跡、大柵遺跡、里仁遺跡(仮称)等で少量の土器片が出土している。千代川東岸では、平野部に位置する大路川遺跡でトチ・アラカシなどの堅果類の詰まった貯蔵穴5基、土製耳飾、後期～晩期前半の土器等が検出され、この他晩期の土器が断片的ながら、西大路土居遺跡、古市遺跡などで出土している。

弥生時代

弥生時代に入り、縄文時代晩期からの遺跡が引き続き営まれるが、前期の遺物を断片的に出土するだけで中期へ継続しない傾向がみられ、前期の実態は不透明な部分が多い。前期の遺物を出土する遺跡として、青島遺跡、湖山第1・2遺跡、布勢第1遺跡、桂見遺跡、帆城遺跡、天神山遺跡、身千山遺跡な

どが挙げられる。そんな中、鳥取平野の拠点集落と考えられている岩吉遺跡では、千代水平野の自然堤防上の砂州を中心とした微高地に立地し、これまで数度の調査が行われている。遺跡の範囲は南北1,300m、東西800mに及び、鳥取平野で最初に稲作を導入した遺跡と考えられる。ただ前期の資料は数少なく、中期の遺物も今のところ断片的な出土にとどまり、昭和63～平成2年度の調査では、弥生中期中葉末から後期にかけて掘立柱建物、土坑、溝状遺構等の遺構が検出されている。この他、千代川東岸では西大路土居遺跡、富安遺跡が前期の遺物を出土する遺跡として知られる。中期中頃には自然堤防上に出現する古海、菖蒲、山ヶ鼻、服部、秋里遺跡などがあり、一部岩吉遺跡の分村的な遺跡と考えられている。中期後葉になると段丘状の微高地に立地する遺跡が目立ち始め、帆城、湖山第2、布勢第2、大柵、北村恵儀谷遺跡などがその例である。こうして後期に入ると松原谷田、桂見遺跡をはじめ数は飛躍的に増加するとともに遺跡内の住居も増加傾向がみられ、それぞれ古墳時代へと営まれていく。

この地域の弥生集落の一つの特徴として、玉作り関連の遺物が帆城、岩吉、秋里遺跡で出土している他、布勢第2遺跡で玉作り工房とみられる堅穴住居が検出されている。この他に、祭祀遺跡として湖山池に浮かぶ青島遺跡、湧泉に展開した塞ノ谷遺跡、弥生中期を初現とした秋里遺跡があり、高住字宮ノ谷では、扁平鈕式の流水文銅鐸が出土している。

下味野古墳群周辺の弥生時代の遺跡としては、千代川水系の氾濫原にあたる平野部にあたり、服部集落西側の標高7～8m程度の微高地に服部遺跡が内包している。昭和44年、圃場整備に伴う工事によって弥生時代後期の土器とともに田下駄、大足などの木製品が出土している他、服部遺跡出土とされる弥生時代中期の土器が鳥取県立博物館で所蔵されている。また、北西側1.7kmの丘陵裾部の微高地には北村恵儀谷遺跡が位置しており、後期を主体とする堅穴住居や土坑、掘立柱建物などが検出されている。また、北側の独立丘陵の釣山では、弥生時代後期の住居跡が検出されている。調査地から2.3～3.0km北の自然堤防上の微高地には、山ヶ鼻遺跡、菖蒲遺跡が位置しており、中期中葉～後期の土坑や重複する溝状遺構が検出されている他、山ヶ鼻丘陵では、中期の堅穴住居、貯蔵穴が調査されている。

こうして弥生時代も後期に入ると、諸集団の統合がすすみ、千代川東岸の南部地域の勢力に対するかのように地域勢力として目覚ましい台頭がみられる。その構造を具体的に示すものとして挙げられるのが、布勢鶴指奥1号墓、第1土壙墓を中心とした桂見土壙墓群である。これらは、湖山池を望む丘陵上に突如造営され、この中で最も古い布勢鶴指奥1号墳丘墓は後期中葉の造営で、次の時期となる西桂見墳丘墓は四隅突出型墳丘墓であるか否かは分かれるところではあるが、突出部を含め一辺64×高さ5mと傑出した規模である。続く桂見土壙墓群では調査前重機の削平・攪乱を受けてた後の調査であったが、丘陵頂部に位置し、石列と地山の浅い掘削によって12mの方形状に墓域を区画し、中心主体とみられる第1土壙墓でのガラス製勾玉、水銀朱の出土などから墳丘墓であった可能性があるとされる。この他に、千代川東岸では、桂見周辺の勢力に対峙すると考えられている郡家町下坂1号墓、紙子谷遺跡門上谷1・2号墓がある。このうち1号墓は長辺24mの規模で26基の埋葬施設をもち、ガラス製管玉や鉄刀などが出土している。この他、これまで調査事例の少なかった弥生時代の墳墓は、後期前葉に位置付けられる滝山猿懸平2号墓をはじめ、土壙墓については古墳築造以前の遺構として検出される例(六部山古墳群など)もあり、弥生時代の墳墓の調査例は今後増加していくものとみられる。

古墳時代

古墳時代になると、平野周辺部の丘陵上に大小さまざまな古墳が造られるようになる。引き続き千代川西岸では湖山池南東岸の桂見古墳群、倉見古墳群などを中心として展開されるが、これらは弥生時代からの系譜を引く方墳である。桂見1号墳は長辺22m×高さ2.5m、続いて作られた2号墳は長辺28m×高さ4.5mの規模で長大な木棺から舶載鏡を出土している。これらに続く主体部や副葬品等卓越した内容の古墳は今のところ明らかになっていない。10m前後の小規模古墳として倉見2～7号墳、桂見10・16号墳が調査されており、前期後半～中期初頭とやや遅れて丘陵上に造営されている。土器転用枕

や弥生時代からの系譜とみられる湾曲する小口を有する木棺、舟形木棺の採用が特徴的であり但馬～丹後地方との同期の交流を窺う上で興味深い。下味野古墳群周辺では、これまでに判明しているものでは、釣山24号墳(長辺22m、方墳)、銅鏡を出土した古海40号墳を含め古海古墳群、徳尾古墳群が前期古墳として知られている。中期になって前方後円墳としてそれぞれ未調査のため内容は不明瞭ながら、里仁29号墳(全長85m)が、やや遅れて栢間1号墳(全長92m)、前方後方墳では古海36号墳(全長67m)などが点在する。調査例としては方墳で構成される里仁古墳群があり、畿内地方の影響を強く受けた鱗付円筒埴輪が出土している。後期に入って小規模古墳は墳丘規模が全体的に小型化する傾向があり、支稜線上にも造られるようになる。前方後円墳として布勢1号墳(全長59m)、大熊段1号墳(全長46.5m)があり、三浦1号墳(全長36m)、桂見6号墳(全長24.5m)、釣山2号墳(全長26.4m)等のように小規模な前方後円墳の築造もみられるようになる。このように小規模な前方後円墳を比較的多く有する古墳群として良田古墳群、松原古墳群などが挙げられる。桂見古墳群では湾曲した小口穴をもつ木棺が再び採用されるなど木棺墓が主流であり、千代川右岸に比べて箱式石棺の事例が少ないようである。千代川左岸では古墳の内部構造については右岸に比較して調査例が少なく特に湖山池周辺の横穴式石室については6世紀中葉の葦岡長者古墳(吉岡1号墳)、後葉の倉見9号墳、時期不明の石場山5号墳、高住12号墳が確認されているだけである。石材の豊富な東岸と比べて全体的に横穴式石室の造営が数少なく東岸でよく見られる所謂「中高式天井石室」とは異なる石室形態をとるようである。ただ、野坂川右岸の丘陵東側斜面に立地する山ヶ鼻古墳(古海13号墳)は巨石を削り抜いた石棺式石室で7世紀中頃の築造でありその特徴的の石室構造とともに数少ない後期～終末期古墳として、7世紀後半に創建されたと考えられている菖蒲廃寺につながる貴重な存在である。

古墳時代の集落の調査例は比較的少ないものの、現在のところ古墳の立地する丘陵の後背地微高地上、現集落と重なって営まれたものと推察されている。弥生時代から続く遺跡として、布勢第2遺跡、桂見遺跡、帆城遺跡、湖山第1、湖山第2遺跡、天神山遺跡等がある。いずれも大集落とはいかず微高地上に住居跡が点在するといった状況で、西桂見遺跡の調査から、弥生時代丘陵上にみられた住居も古墳築造期になると丘陵斜面へ下りていくとされる。この他に千代川左岸では、岩吉、菖蒲、山ヶ鼻、大栢遺跡等がある。菖蒲遺跡では釣山裾の微高地に焼失住居が検出されている。しかし菖蒲・服部の平野部周辺では中期になると溝状遺構を除いて明確に古墳時代中後期に比定される遺構は7世紀に入るまでみられなくなるようである。また、この時期の特徴的な遺跡として、秋里、塞ノ谷遺跡を挙げることができる。前者は古墳時代を中心として弥生後期、奈良・平安時代と祭祀色が濃く、特に多量の土師器とともに各種模造土・石製品が出土する土器群、土器溜状遺構が特徴的である。後者は湧泉を中心に弥生～古墳時代と継続して展開され、分銅形土製品や、舟、刀等各種木製模造品が注目される。

歴史時代

7世紀に入ってからこの地域は、白鳳後期創建とされる菖蒲廃寺に象徴されるように菖蒲村周辺は古代山陰道の通過地点とともに駅衛、郡家の推定地でもあり、律令期に入って鳥取平野西岸の中心的地域であったとされる。現在でも菖蒲集落の西に菖蒲廃寺の塔の心礎とみられる礎石があり、この付近で土師百井式軒丸瓦が出土している。またその250m西の山ヶ鼻遺跡では、菖蒲廃寺の時期と重なる7世紀の掘立柱建物群、溝状遺構、土坑等が検出されている。千代川対岸の古市遺跡では7世紀後半から平安時代にかけての掘立柱建物と奈良三彩小壺、墨書土器などが出土している。また、律令体制下のこの地域は、天平勝宝7年(755)、『東大寺東南院文書』「東大寺領因幡国高草郡高庭庄坪付注進状案」から南北10条にわたり条里制が施行されていたことが明らかとなっている。この時期、菖蒲遺跡では釣山沿いの微高地に8世紀後半の総柱建物が検出されている。しかし高庭庄の経営はうまくいかず、その後延暦20年(801)、延暦22年(803)東大寺から庄域の多くが藤原縄主、藤原藤嗣へ売却され、残りの散在する5町8反余りを中心として開発を行ったが、その後10世紀後半には完全に没落し、長保6年(1004)を最後に

史料に見られなくなる。10世紀初頭から国衙領体制が成立していく中で国衙領として再編されたものと考えられ、中世には一部を高草郡の郡領寺である葉師寺(後の座光寺)が有していたと『因幡民談記』に記されている。その間の遺構として、山ヶ鼻遺跡のそれぞれ墨書土器などが出土した9世紀後半の井戸や13世紀に至る多量の遺物が出土した大形土坑があり、菖蒲遺跡では9世紀後半の墨書土器が出土している。また、岩吉遺跡では8～10世紀にかけて溜り状遺構や自然流路から567点にもおよぶ多量の墨書土器、人形、「天長二年(825)税帳」と記された題箋軸を含む木簡等が出土し、桂見遺跡堤谷地区では8世紀後半、9世紀後半の掘立柱建物が検出され、いずれも公の機関の存在を示唆する報告がなされている。山ヶ鼻遺跡では輸入陶磁器類が土坑や井戸から出土しており、菖蒲遺跡では、中世京都、近江産の緑釉陶器片とともに、白磁片、青磁片が多数出土していることなどから、高庭庄没落後も中世にかけて何らかの統治機関的なものがあつたと考えられている。

貞治3年(1364)、因幡守護に山名氏が任じられる。山名氏は15世紀に入って守護所を布施に移して布施天神山城を築き、鳥取城へ移るまでの100年程の間、因幡支配の拠点とした。『大幅絵図』『因幡民談記』所載の17世紀後半の古絵図には、天神城周辺の様子が描かれており、一部調査されて内堀や土塁、井戸、焼け落ちた建物跡等が検出されている。また、「葬地」と記された丘陵である布勢鶴指奥墳墓群、桂見墳墓群で中世墓が検出され、この他に西桂見遺跡、大熊段遺跡、三浦遺跡、里仁古墳群、徳尾古墳群や、中世の埋葬施設とみられる集石遺構が釣山古墳群で検出されている。また、中世の倉庫跡が布勢第2遺跡で、長さ45m以上の土塁状遺構が西桂見遺跡で検出されている。






慶長5年(1600)関ヶ原の合戦後鹿野城主となった亀井茲矩は、慶長年間(1596～1614年)によって行われた亀井堤と呼ばれる大規模な堤防や河原を取水口とする大井出用水を開削した。古海、菖蒲、服部地区を含む千代川西岸下流域一帯は安定した用水を確保できるようになった。

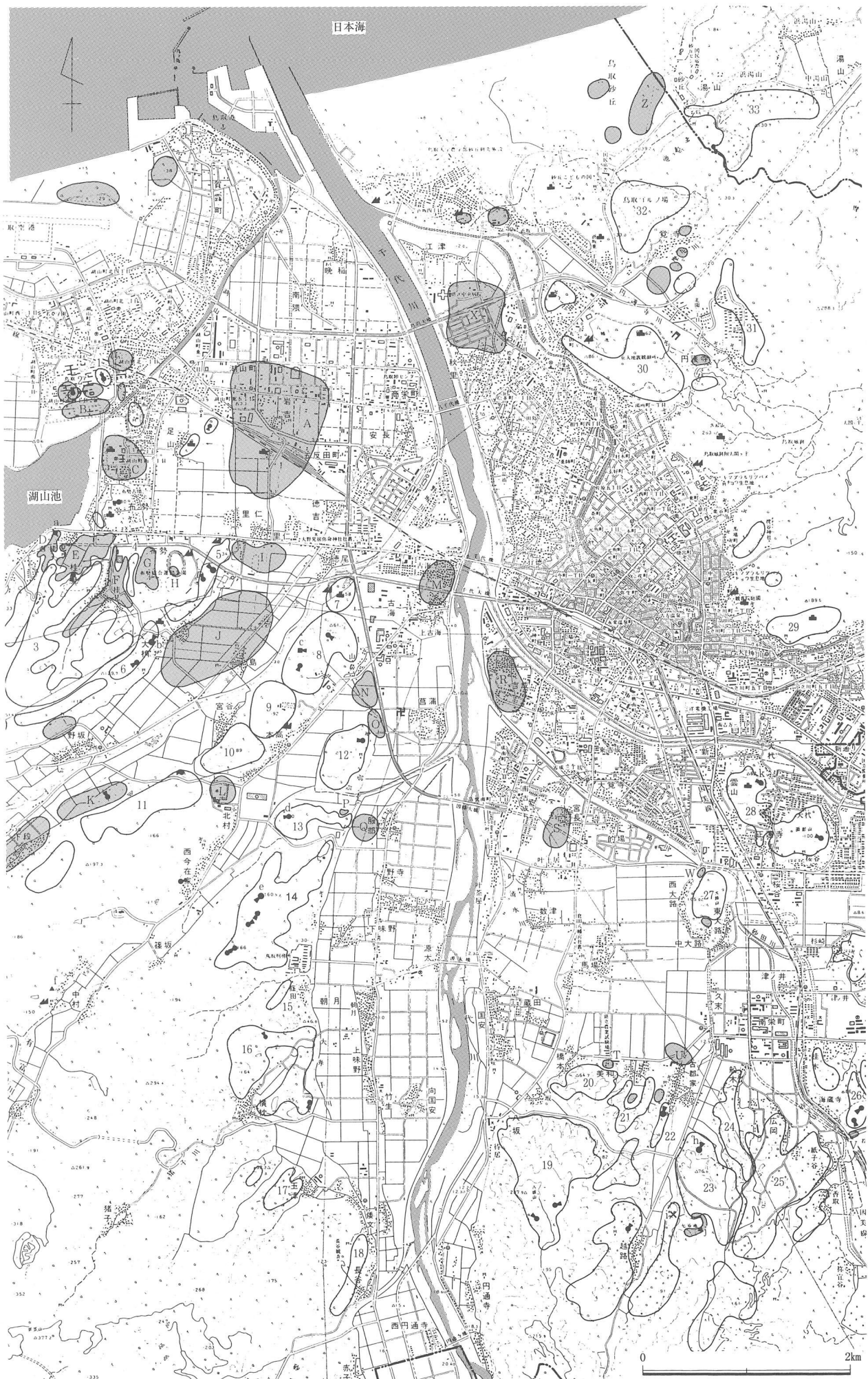
引用・主要参考文献

- 鳥取市『新修鳥取市史 第1巻 古代・中世篇』1983年
- 平凡社『日本歴史地名大系第32巻 鳥取県の地名』1992年
- 久保稔二朗「弥生時代の集落立地について」『鳥取県立博物館研究報告第27号』1990年
- 松井 潔「山陰東部における後期弥生墓制の展開と画期」『考古学と遺跡の保護』甘粕 健先生退官記念論集刊行会 1996年

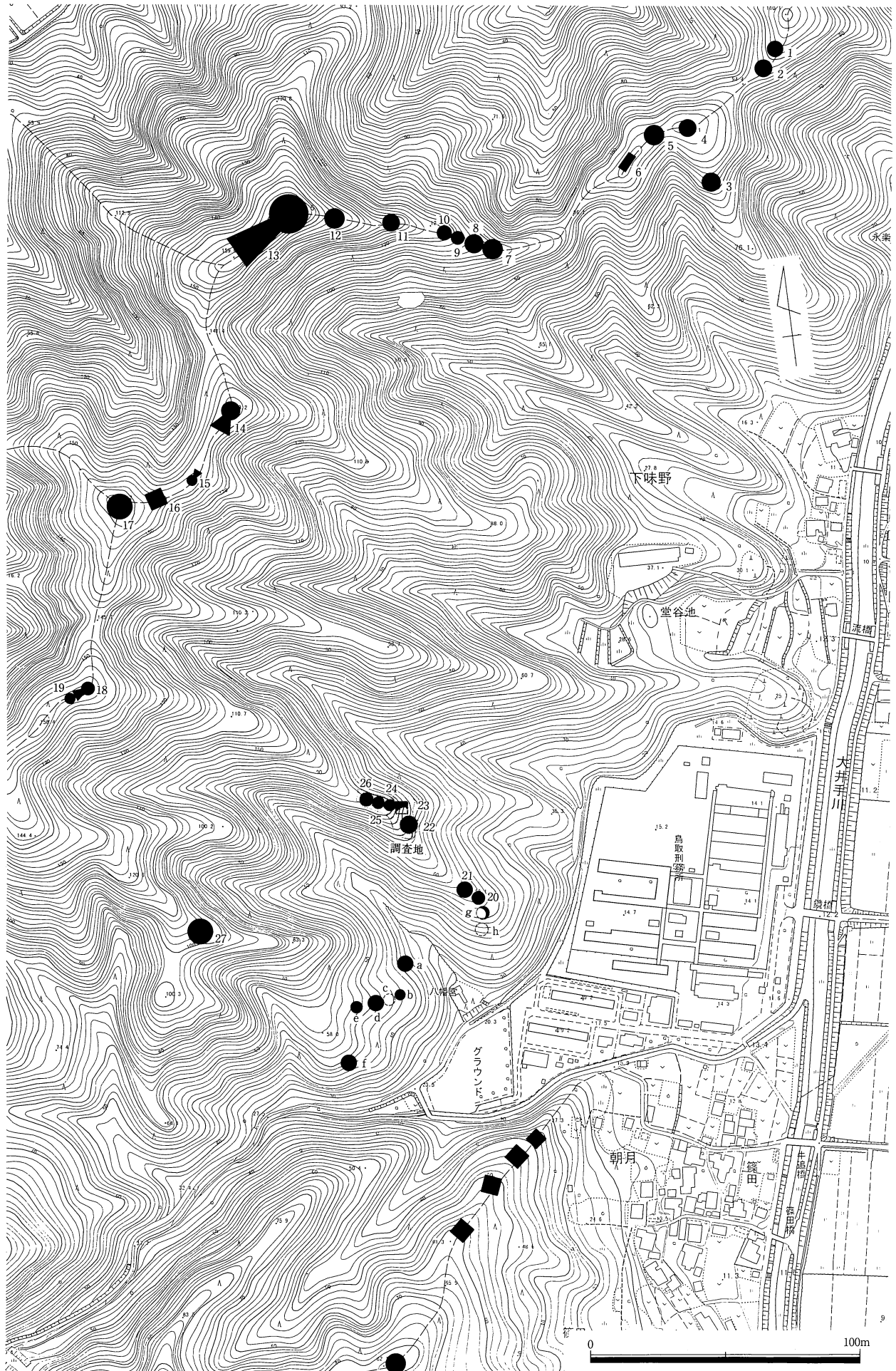
第1図 遺跡名称

- | | | | |
|-------------|-------------|-----------------|-------------|
| 1. 大熊段古墳群 | 25. 広岡古墳群 | A. 岩吉遺跡 | Y. 円護寺坂ノ下遺跡 |
| 2. 三浦古墳群 | 26. 海蔵寺古墳群 | B. 湖山第2遺跡 | Z. 追後遺跡 |
| 3. 桂見墳墓群 | 27. 大路山古墳群 | C. 天神山遺跡 | |
| 4. 布勢鶴指奥墳墓群 | 28. 面影山古墳群 | D. 西桂見遺跡 | |
| 5. 里仁古墳群 | 29. 立川古墳群 | E. 桂見遺跡 | |
| 6. 栂間古墳群 | 30. 雁金山古墳群 | F. 東桂見遺跡 | |
| 7. 徳尾古墳群 | 31. 円護寺古墳群 | G. 布勢第1遺跡 | |
| 8. 古海古墳群 | 32. 開地谷古墳群 | H. 布勢第2遺跡 | |
| 9. 本高古墳群 | 33. 湯山古墳群 | I. 里仁遺跡 | |
| 10. 宮谷古墳群 | | J. 大栂遺跡 | |
| 11. 小森山古墳群 | | K. 小森山遺跡 | |
| 12. 釣山古墳群 | | L. 北村恵儀谷遺跡 | |
| 13. 服部墳墓群 | a. 西桂見墳丘墓 | M. 古海遺跡 | |
| 14. 下味野古墳群 | b. 栂間1号墳 | N. 山ヶ鼻遺跡 | |
| 15. 篠田古墳群 | c. 古海35号墳 | O. 菖蒲遺跡 | |
| 16. 横枕古墳群 | d. 服部23号墳 | P. 本高段木遺跡 | |
| 17. 玉津古墳群 | e. 下味野23号墳 | Q. 服部遺跡 | |
| 18. 長谷古墳群 | f. 中村須恵器窯跡 | R. 古市遺跡 | |
| 19. 八坂古墳群 | g. 古郡家1号墳 | S. 宮長竹ヶ鼻遺跡 | |
| 20. 橋本古墳群 | h. 六部山3号墳 | T. 橋本遺跡 | |
| 21. 美和古墳群 | i. 越路銅鐸出土地 | U. 久末・古郡家・大路川遺跡 | |
| 22. 古郡家古墳群 | j. 七谷須恵器窯跡群 | V. 紙子谷門上谷遺跡 | |
| 23. 六部山古墳群 | k. 面影山11号墳 | W. 西大路土居遺跡 | |
| 24. 船木古墳群 | | X. 秋里遺跡 | |

- 凡例—
-  集落遺跡・遺物散布地
 -  墳墓群・古墳群
 -  主要古墳
 -  横穴
 -  城跡



第1図 下味野古墳群周辺遺跡分布図



第2図 下味野古墳群分布図

下味野古墳群分布図対照表

番 号	名 称	種 類	規模(m)	埋葬施設	出 土 遺 物	備 考	県番号
			直径×高さ (長×短/辺×高)				
1	下味野11号墳	円 墳	14×1.5				3-0210
2	下味野12号墳	円 墳	17×2.5				3-0211
3	下味野13号墳	円 墳	15×1.5				3-0212
4	下味野14号墳	円 墳	15×2.5				3-0213
5	下味野15号墳	円 墳	17×1.8				3-0214
6	下味野16号墳	方 墳	(17×8×3)				3-0215
7	下味野17号墳	円 墳	20×4				3-0216
8	下味野18号墳	円 墳	16×1.5				3-0217
9	下味野19号墳	円 墳	5×1				3-0218
10	下味野20号墳	円 墳	5×1				3-0219
11	下味野21号墳	円 墳	15×2				3-0220
12	下味野22号墳	円 墳	20×1.5				3-0221
13	下味野23号墳	前方後円墳	73.5×6				3-0222
14	下味野29号墳	前方後円墳	29×5				3-0228
15	下味野30号墳	前方後円墳	12×2				3-0229
16	下味野31号墳	(方墳)	—				3-0230
17	下味野32号墳	円 墳	—				3-0231
18	下味野33号墳	前方後円墳	19×4				3-0232
19	下味野34号墳	円 墳	—				3-0233
20	下味野38号墳	円 墳	12×1				3-0237
21	下味野39号墳	円 墳	10×1				3-0238
22	下味野40号墳	円 墳	15.5×4.1	(土壙墓)	鉄剣・刀子・鉄鏃・玉類・土師器	本報告書	3-0239
23	下味野41号墳	(方墳)	(11.5×10.6×2.4)	—		本報告書	3-0240
24	下味野42号墳	円 墳	9×0.76	(土壙墓)	土師器	本報告書	3-0241
25	下味野43号墳	円 墳	(11.4×10.8)×1.1	箱式石棺	鉄剣・鉄鏃・土師器	本報告書	3-0242
26	下味野44号墳	円 墳	(11.8×10.9)×1.3	木棺直葬	鉄鏃・須恵器	本報告書	3-0243
27	下味野45号墳	円 墳	20×1.3~3.0				3-0244
a		円 墳				踏査により確認	
b		円 墳				H12年度試掘調査	
c		円 墳				H12年度試掘調査	
d		円 墳				H12年度試掘調査	
e		円 墳				H12年度試掘調査	
f		円 墳				H12年度試掘調査	
g		円 墳				踏査により確認	
h		円 墳				踏査により確認	

※平成13年10月作成

第3章 調査の結果

第1節 下味野古墳群の立地と構成(第2図)

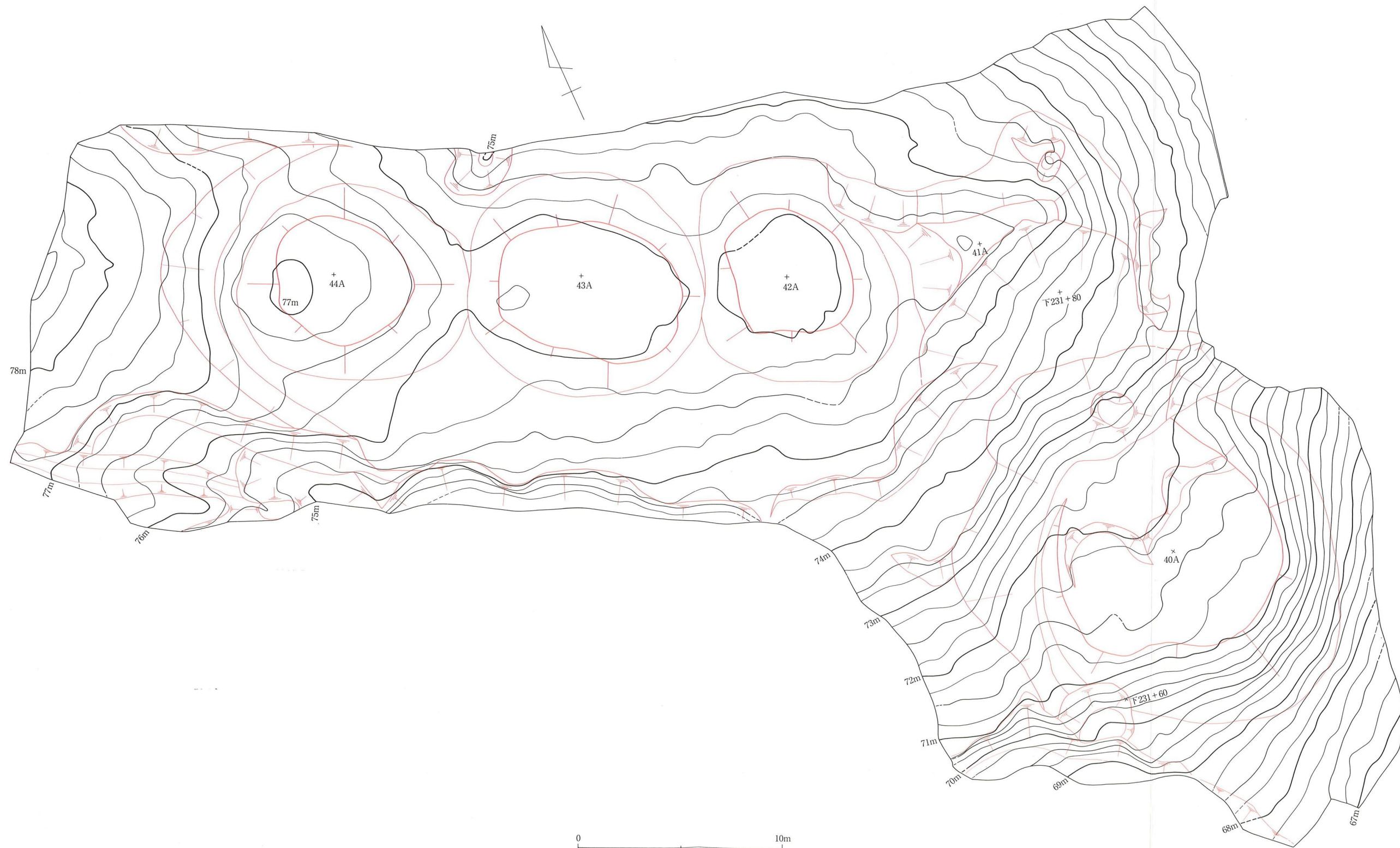
下味野古墳群は、鳥取市下味野を中心に北村、西今在家、篠坂に所在する標高約50～160mの丘陵に展開する古墳群である。現在までに23号墳(全長73.5m)をはじめ前方後円墳5基を含む計51基の古墳が確認されている。古墳群は中国山地から鳥取平野へ向けて延びる丘陵のうち、標高294mの「八町山」を頂として東に千代川を望みながら更に北東へと延びる丘陵上に位置し、有富川を隔ててそびえる独立丘陵「釣山」(標高105m)が丘陵最北端となる。下味野古墳群の所在する丘陵は、東郷谷の東側谷口部にもあたり、高路を源とする有富川が丘陵の南西から北側を通過して千代川へ合流する他、東には河原の取水口から丘陵の東縁辺部を通過して千代水平野へと続く大井手川(17世紀初頭に鹿野城主亀井茲矩によって掘削)が北上する。また、主稜線上の標高160m付近からは、南西に東郷谷が一望でき、東は千代川や「大路山」(標高105m)、「面影山」をはじめ鳥取平野南部が視界一面に広がる。北側に位置する「釣山」には、総数42基からなる釣山古墳群が分布し、平成2、3年度に前方後円墳(全長26.4m)1基を含む古墳6基と弥生時代後期の甕棺、住居跡の調査が行われている。「釣山」の手前にも独立丘陵が存在しており、これまでに総数47基の古墳、墳墓が確認されている服部古墳群が存在する。平成11・12年度には弥生時代後期の墳墓3基と古墳6基などの調査が行われている。また、下味野古墳群の南側の低丘陵には篠田、横枕古墳群が分布している。

下味野古墳群の所在する丘陵は、頂部の標高160mに前方後円墳である23号墳(全長73.5m)が占拠し、そこから南西に延びる主稜線上標高150～160m付近には29号墳(全長29m)、30号墳(全長12m)、33号墳(全長19m)、36号墳(全長22.5m)計5基の前方後円墳が700m範囲内に点在し、鳥取市内でも前方後円墳が密集する地域となる。主稜線は鞍部と高まりを繰り返しながら蛇行して北東側へ延びる尾根筋とその尾根筋から北へ派生する尾根上に古墳が展開する。主稜線の両側には幾つもの小尾根が派生するが、東側斜面は西側斜面に較べて緩やかであり、東側に派生する小尾根上には古墳が存在するものもある。

古墳群は標高160mに存在する全長73.5mの前方後円墳である23号墳を頂とし、標高160mの23号墳が位置する尾根頂部から南西から北東へ約1.5km延びる主稜線上、北へ約550m延びる尾根筋、主稜線を含め東方向へ約450m延びる尾根筋と大きく3群に分かれる。その前方後円墳から北東に延びる尾根筋に約20基、北に延びる小尾根に数基存在する。23号墳の南側の標高153mの頂部に29・30号墳の前方後円墳と付随するかような数基の古墳、更に南西の標高155m、158mの頂部にそれぞれ33号墳、36号墳の前方後円墳と付随するかような数基の古墳、さらに東方向と南東方向へ延びる尾根筋の先端部付近にそれぞれ数基の円墳群と5・6支群に大きく分けることができる。下味野古墳群にはこれまでに45基の古墳が確認されていたが、今回実施した踏査等の結果、新たに8基が追加となり、古墳の総数は計53基を数える。主稜線の東側に派生する小尾根上にはまだ古墳の存在するものがあり、さらに広範囲にわたる詳細な分布調査が必要である。

第2節 古墳の調査(第3・4図)

今回の調査地は主稜線から東側に派生する尾根のひとつに該当する。主稜線から東南東方向に延びる小尾根に存在する支群のうち5基が調査対象となった。標高は概ね67～79mに位置する。この小尾根も標高76m付近から東方向と南東方向へ細分岐しており、南東へ延びる小尾根先端付近には4基の古墳が確認されている。



第3図 下味野古墳群 調査地形図



第4図 下味野古墳群 墳丘遺存図

1. 下味野40号墳(第5～12図、図版2・6・7～9・23・24)

位置と現状

40号墳は、調査地南東端の標高72m付近に位置し、尾根が東方と南東に分岐する変換部の南東下方に立地する。北西約15mの分岐点には42号墳が所在する。南東に延びる尾根筋の下方、先端付近には3基の小規模な円墳が存在するが、60m以上の距離がある。調査前の観察では墳丘は確認できるものの、墳頂部が極めて平坦であり、目的は不明であるが明らかに後世の削平と考えられた。

墳丘

厚さ2～20cmの表土を除去した段階で墳丘面を検出した。墳丘の築造は、尾根上位側に大規模な弧状の溝を切削して成形し、さらに盛土して形を整えている。盛土の厚さは最大141cmを測るが、尾根上位側は流失したものとみられ23cm程の遺存が観察される。表土除去後の墳頂部の標高は72.22m、墳丘の遺存高は南東墳裾から墳頂部まで最大4.14mを測る。周溝は尾根の上方側半周程度に認められ、規模は北東側で幅169cm、深さ41cm、南西側で幅348cm、深さ37cmを測る。墳丘規模は北西～南東方向で径15.45m、北東～南西方向で14.90mを測り、尾根筋がやや長い円墳である。

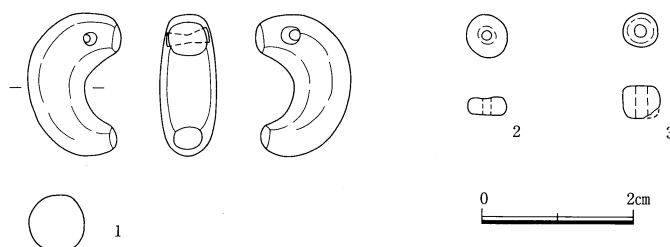
埋葬施設

埋葬施設は墳頂部に1基が検出された。

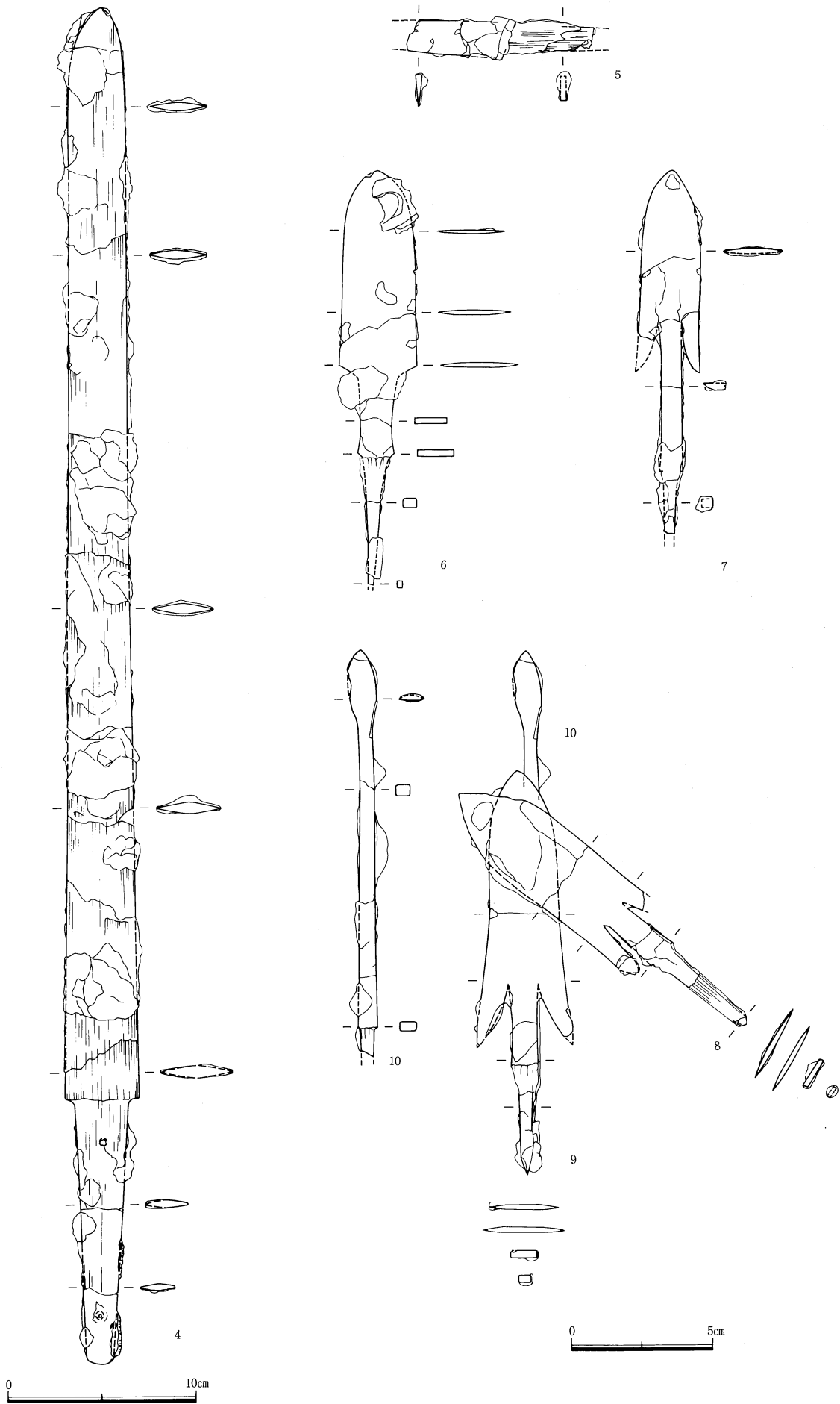
主体部

主体部は墳頂部中央のやや尾根側に位置し、主軸はN-41°-Wにとる。墓壙は平面が隅丸長方形を呈し、残存する長さ3.79m、幅1.15m、深さ51cmを測る。墓壙南東端は幅50cm程度の墳丘確認用トレンチによって、確認することができなかった。墓壙の全長をトレンチの幅から想定すると4.2m程度であると考えられる。底面の標高は尾根側に向かって徐々に高くなり、本来の地形に沿うように傾斜する。土層断面の観察では木棺痕跡を確認することはできず、遺体を墓壙に直接埋葬する土壙墓と考えられる。

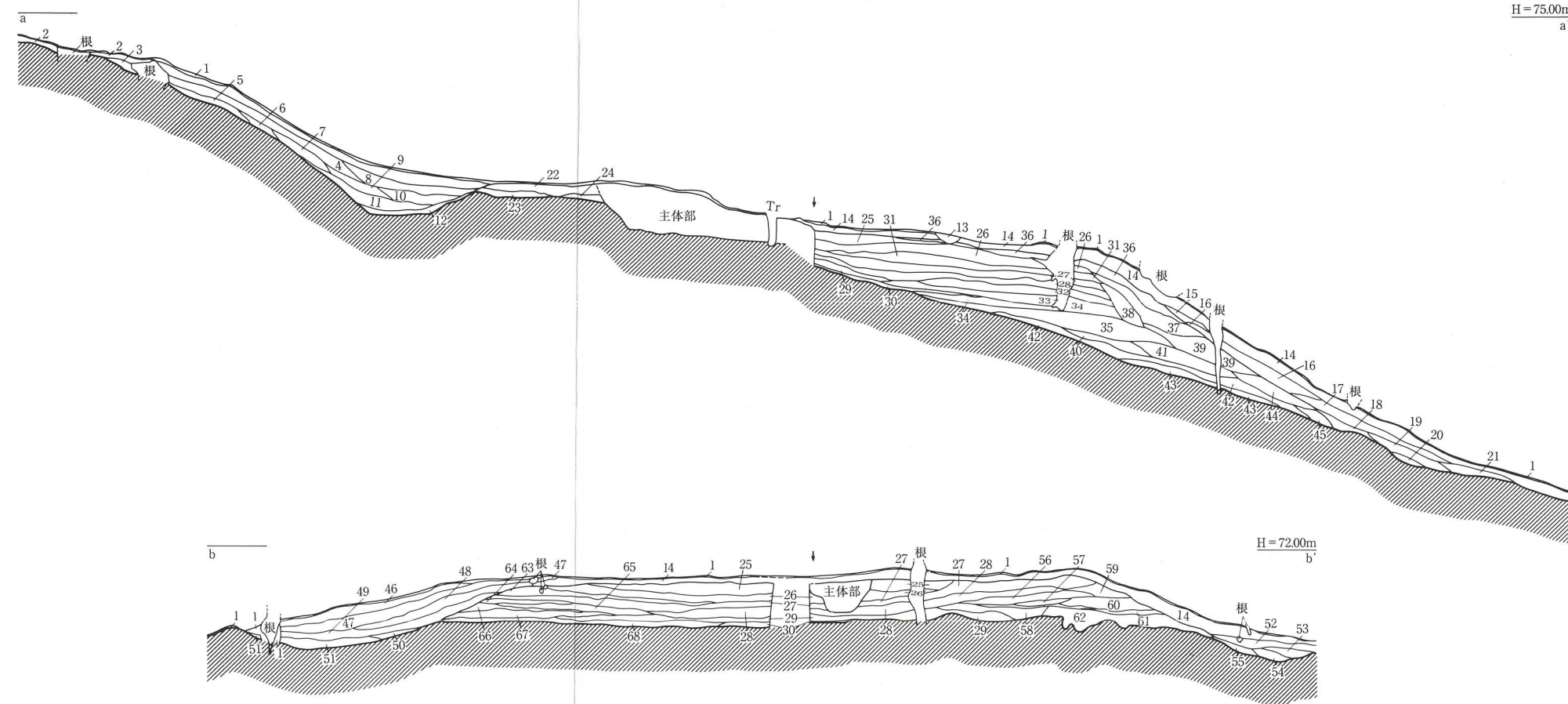
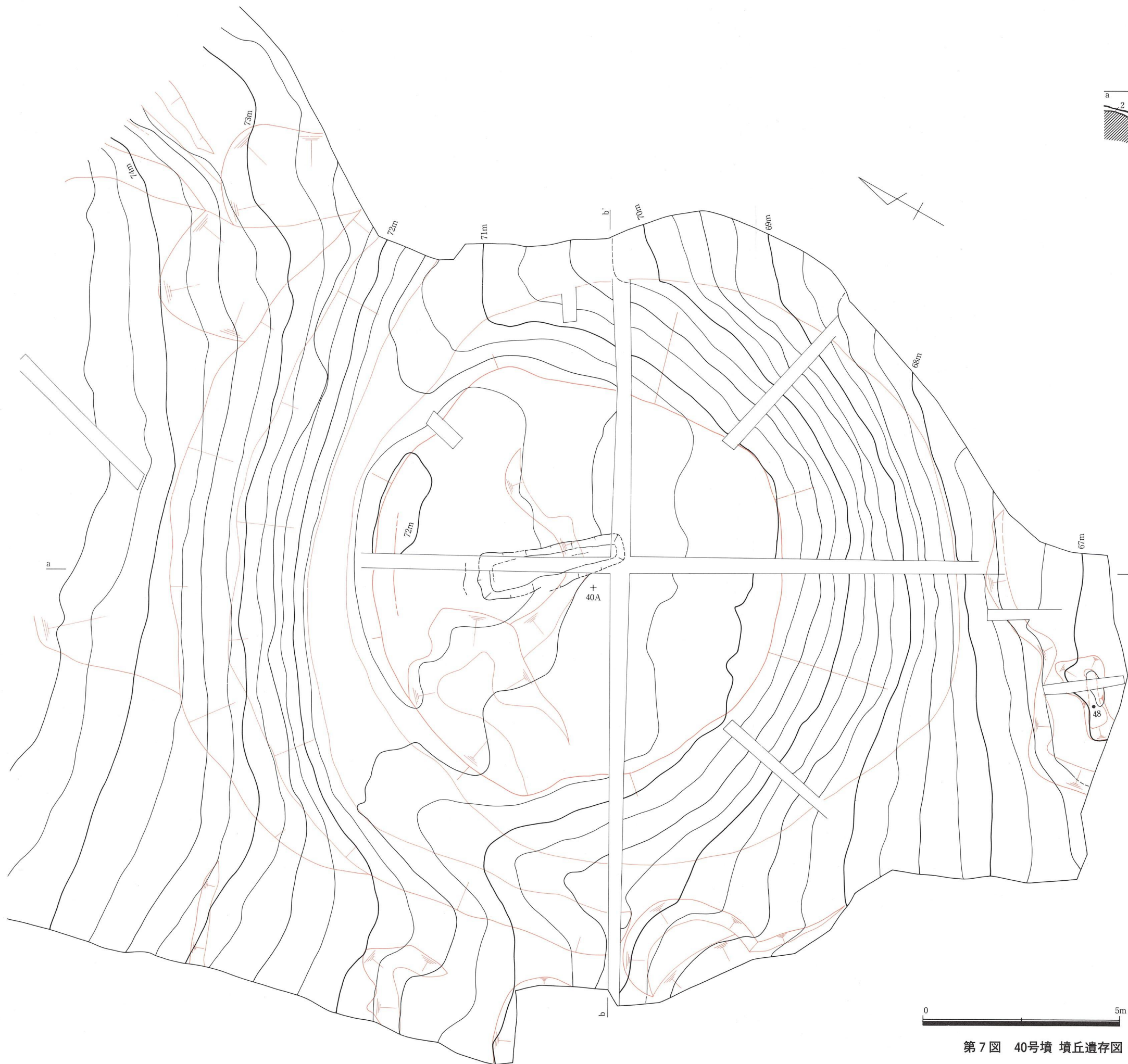
遺物は中央付近で鉄剣(4)が出土した。鉄剣は長さ72.3cmを測り、切先を北西に向けている。墓壙の軸よりも約30°西に振る。底面からは僅かに2、3cm程度浮いた状態である。遺存状態は良好で全面に梢と茎部木質が残り、茎尻部には卷締が残る。鉄剣の南側に(4)の茎端部である鉄剣片、南東側に刀子片(5)がそれぞれ12cm、5cm底面から浮いた状態で出土している。また、北西端のやや中央寄りには2～6cm底面から浮いた状態で鉄鏃を主として破片を含めた約40点の鉄製品(6～45)が集中して出土している。これらの鉄鏃類は概ね主軸に平行しており、北北西に先端部を向けてまとまっている。鉄鏃(6～45)は錆化が進み、錆着、膨脹するものもある。特に下層部の(24～37)は鏃身形状が不明なものが多い。鏃身部、茎部等の遺存状態から完存したものを埋納したものと考えられる。鏃身部の形状等から埋納数は24本以上で広根鏃、長頸鏃の割合は1：4の比率で出土している。(6～9・21)は所謂、広根鏃で柳葉形と三角形、長三角形の鏃身形状を呈し、(6)を除き鏃身部に逆刺を有し幅広のものである。逆刺は破損しているものが多く、(6)にも有していた可能性もある。長頸鏃の鏃身形状は柳葉形、三角形の2種類は確認できるが錆着して不明瞭なものが多い。また、(16・28)は頸部上位に片逆刺を有するものと(38・39)は茎部に捻りを有する。茎部には多くのものに木質が遺存している。さらに、出土状態を図示



第5図 40号墳 主体部出土遺物実測図(1)

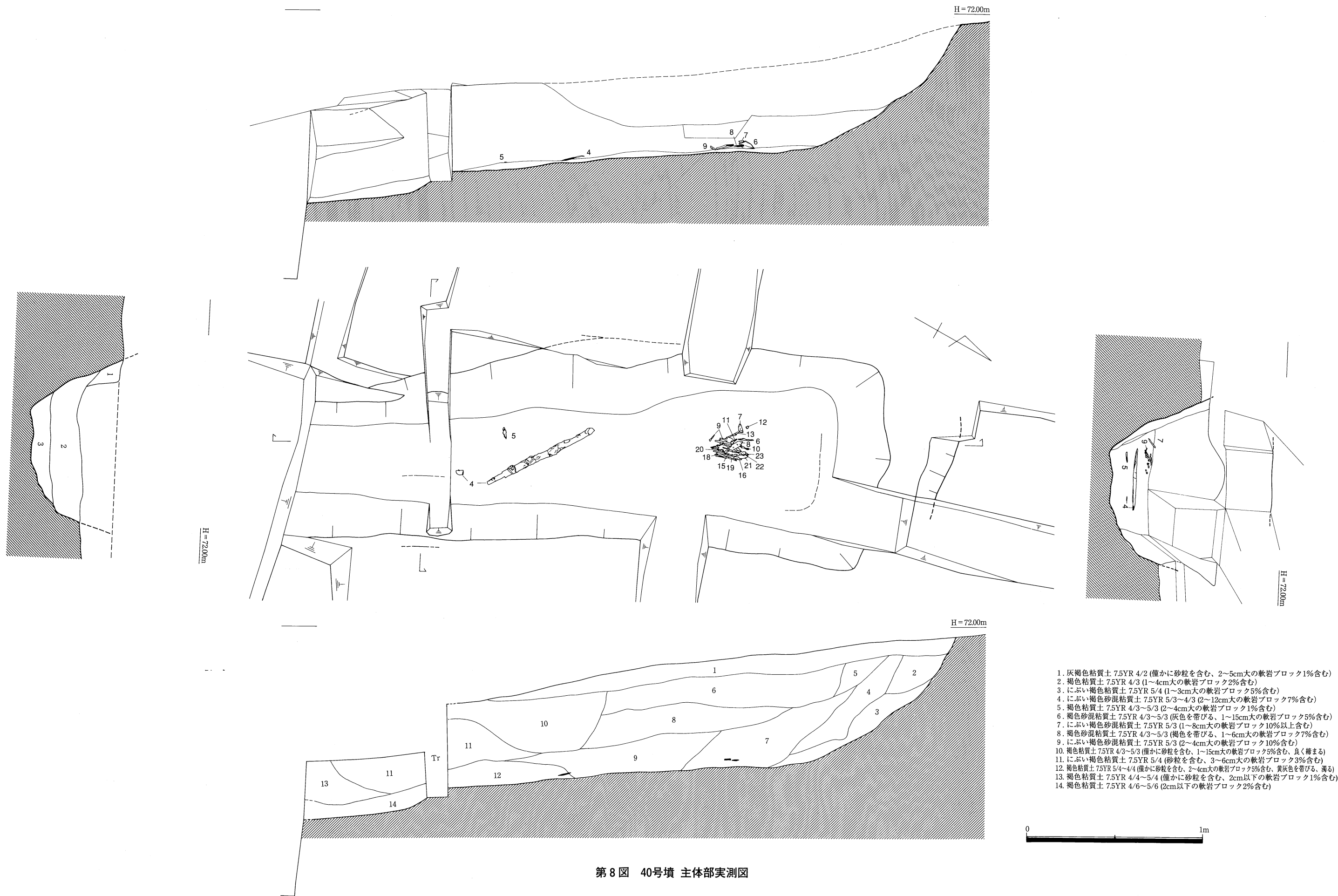


第6图 40号墳 主体部出土遺物実測図(2)



1. 腐植土
2. 暗褐色粘質土 7.5YR 3/3
3. におい褐色粘質土 7.5YR 4/3~5/3 (僅かに砂粒を含む)
4. 褐色粘質土 7.5YR 4/3~5/3 (僅かに1cm以下の軟岩ブロックを含む)
5. におい赤褐色粘質土 7.5YR 5/4 (2~10cm大の軟岩ブロック7%含む)
6. におい褐色粘質土 7.5YR 5/3~4/3
7. 褐色粘質土 7.5YR 4/3~5/3
8. 灰褐色粘質土 7.5YR 4/2
9. におい褐色砂混粘質土 7.5YR 5/3
10. 褐色砂混粘質土 7.5YR 4/3~5/3
11. 褐色砂混粘質土 7.5YR 4/3 (0.5~2cm大の軟岩ブロック3%含む)
12. におい赤褐色粘質土 5YR 4/3 (1cm大の軟岩ブロック3%含む)
13. 灰褐色粘質土 7.5YR 4/2 (木根痕)
14. 褐色粘質土 7.5YR 4/3
15. におい褐色砂混粘質土 5YR 5/4
16. におい褐色砂混粘質土 7.5YR 5/4
17. におい褐色粘質土 7.5YR 5/4
18. 暗褐色粘質土 7.5YR 3/3 (黒色・黄色を帯びる)
19. におい褐色粘質土 7.5YR 5/4 (黒色・黄色を帯びる)
20. 暗褐色粘質土 7.5YR 3/4 (黒色を帯びる、1~5cm大の軟岩ブロック1%含む)
21. 褐色粘質土 10YR 4/4 (黄色を帯びる)
22. におい褐色粘質土 7.5YR 5/3
23. 褐色粘質土 7.5YR 4/3~4/2 (1~4cm大の軟岩ブロック3%含む)
24. 褐色砂混粘質土 7.5YR 4/4 (2~10cm大の軟岩ブロック3%含む)
25. 褐色粘質土 7.5YR 4/4 (1~4cm大の軟岩ブロック20%以上含む)
26. 褐色粘質土 7.5YR 4/6 (0.5~8cm大の軟岩ブロック7%含む)
27. 褐色粘質土 7.5YR 4/4~4/6 (0.5~8cm大の軟岩ブロック7%・明褐色粘土7.5YR 5/8ブロックを含む)
28. 灰黄褐色粘質土 10YR 4/2 (2~10cm大の軟岩ブロック2%・明褐色粘土7.5YR 5/8ブロックを含む)
29. 灰黄褐色粘質土 10YR 4/2 (2~8cm大の軟岩ブロック2%含む)
30. 灰黄褐色粘土 10YR 5/2~5/1 (上下に2~5mm幅程度の鉄分注着層有)
31. におい褐色砂混粘質土 7.5YR 5/4 (1~10cm大の軟岩ブロック15%・明褐色粘土7.5YR 5/8ブロックを含む、橙色を帯びる)
32. 暗褐色粘質土 10YR 3/3~3/4 (1~5cm大の軟岩ブロック2%含む)
33. におい黄褐色粘質土 10YR 4/3
34. におい黄褐色粘質土 10YR 4/3 (僅かに砂粒を含む)
35. 褐色粘質土 10YR 4/4 (鉄分・褐灰色粘土10YR 4/1ブロックを含む)
36. 褐色砂混粘質土 7.5YR 4/3
37. におい褐色粘質土 7.5YR 5/3(0.5~40cm大の軟岩ブロック2%含む)
38. におい褐色砂混粘質土 7.5YR 5/4 (0.5~2cm大の軟岩ブロック1%含む、橙色を帯びる)
39. 褐色粘質土 10YR 4/4 (2~8cm大の軟岩ブロック2%含む、黄色を帯びる)
40. 灰褐色粘質土 7.5YR 4/2 (におい黄褐色粘質土10YR 5/4ブロックを含む)
41. 灰褐色粘質土 7.5YR 4/2 (におい黄褐色粘質土10YR 5/4混、6~8cm大の軟岩ブロック極めて僅かに含む)
42. 黒褐色粘質土 10YR 3/2 (におい黄褐色粘質土10YR 5/4ブロックを含む)
43. におい褐色砂混粘質土 7.5YR 5/4 (1~10cm大の軟岩ブロック15%・明褐色粘土7.5YR 5/8ブロックを含む、橙色を帯びる)
44. 褐色粘質土 7.5YR 4/4 (黄色を帯びる、僅かに砂粒を含む)
45. 暗褐色粘質土 7.5YR 3/3 (灰色を帯びる)
46. 褐色粘質土 7.5YR 4/6 (橙色を帯びる、もろい)
47. 褐色粘質土 7.5YR 4/4~5/4 (橙色を帯びる、0.5cm大の軟岩ブロック2%含む)
48. 褐色粘質土 7.5YR 4/3~5/3 (橙色を帯びる、0.5cm大の軟岩ブロック3%含む、濁る)
49. 褐色粘質土 7.5YR 4/3 (黄色を帯びる、濁る)
50. 褐色粘質土 7.5YR 4/4 (黄色を帯びる、0.5cm大の軟岩ブロック3%含む、濁る)
51. 黒褐色粘質土 7.5YR 3/1 (黄色を帯びる)
52. 暗褐色粘質土 7.5YR 3/3~3/4
53. 暗褐色粘質土 7.5YR 3/4~3/3 (濁る)
54. 暗褐色粘質土 7.5YR 4/3 (濁る、2~3cm大の軟岩ブロック5%含む)
55. におい褐色粘質土 7.5YR 5/4 (濁る、3cm大の軟岩ブロック3%含む、橙色を帯びる)
56. 褐色粘質土 7.5YR 4/3 (0.5~4cm大の軟岩ブロック2%含む、橙色を帯びる)
57. におい褐色粘質土 7.5YR 5/4 (2~5cm大の軟岩ブロック1%含む)
58. におい褐色粘質土 7.5YR 5/3 (黒褐色粘質土7.5YR 3/1混、黒色を帯びる、2~10cm大の軟岩ブロック2%以下含む)
59. におい褐色粘質土 7.5YR 5/4 (1~3cm大の軟岩ブロック3%・極めて僅かな砂粒を含む、褐色を帯びる)
60. におい褐色粘質土 7.5YR 5/3 (黒色を帯びる、0.5~4cm大の軟岩ブロック2%含む)
61. 灰黄褐色粘質土 7.5YR 4/2 (におい褐色粘質土7.5YR 5/3混、黒色を帯びる)
62. におい褐色粘質土 7.5YR 5/3 (黄色を帯びる、4~10cm大の軟岩ブロック1%含む)
63. 明褐色粘質土 7.5YR 5/3 (褐色粘質土7.5YR 4/3ブロックを含む)
64. におい黄褐色砂混粘質土 10YR 4/3
65. 灰黄褐色粘質土 10YR 5/2 (黄褐色粘質土10YR 5/6混)
66. 明褐色粘質土 7.5YR 5/6 (灰黄褐色粘質土10YR 4/3ブロックを僅かに含む)
67. 黒褐色砂混粘質土 7.5YR 3/2 (灰色を帯びる)
68. 明褐色粘質土 7.5YR 5/8 (灰黄褐色粘質土10YR 4/2混)

第7図 40号墳 墳丘遺存図・断面図



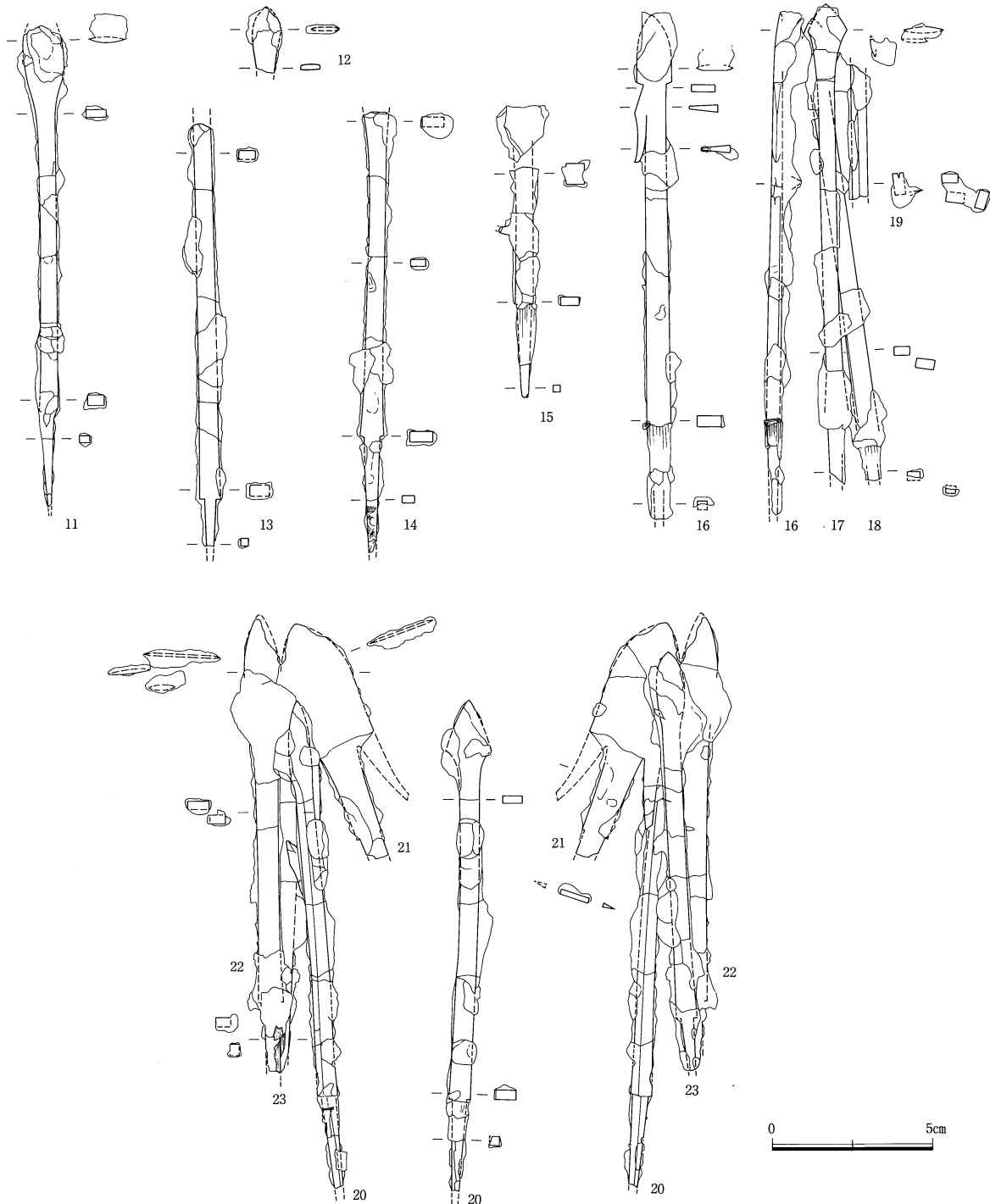
第8図 40号墳 主体部実測図

できなかったがこれらの鉄鏃と鉄剣との間に勾玉1点(1)とガラス小玉2点(2・3)と破片数点が出土している。(1)は「C」字形を呈し、長さ18.8mm、重量2.2gを測る。色調は褐色系を呈しており、メノウ製と思われる。(2・3)などのガラス小玉は概ね青色系の色調を呈しており、気泡が観察される。

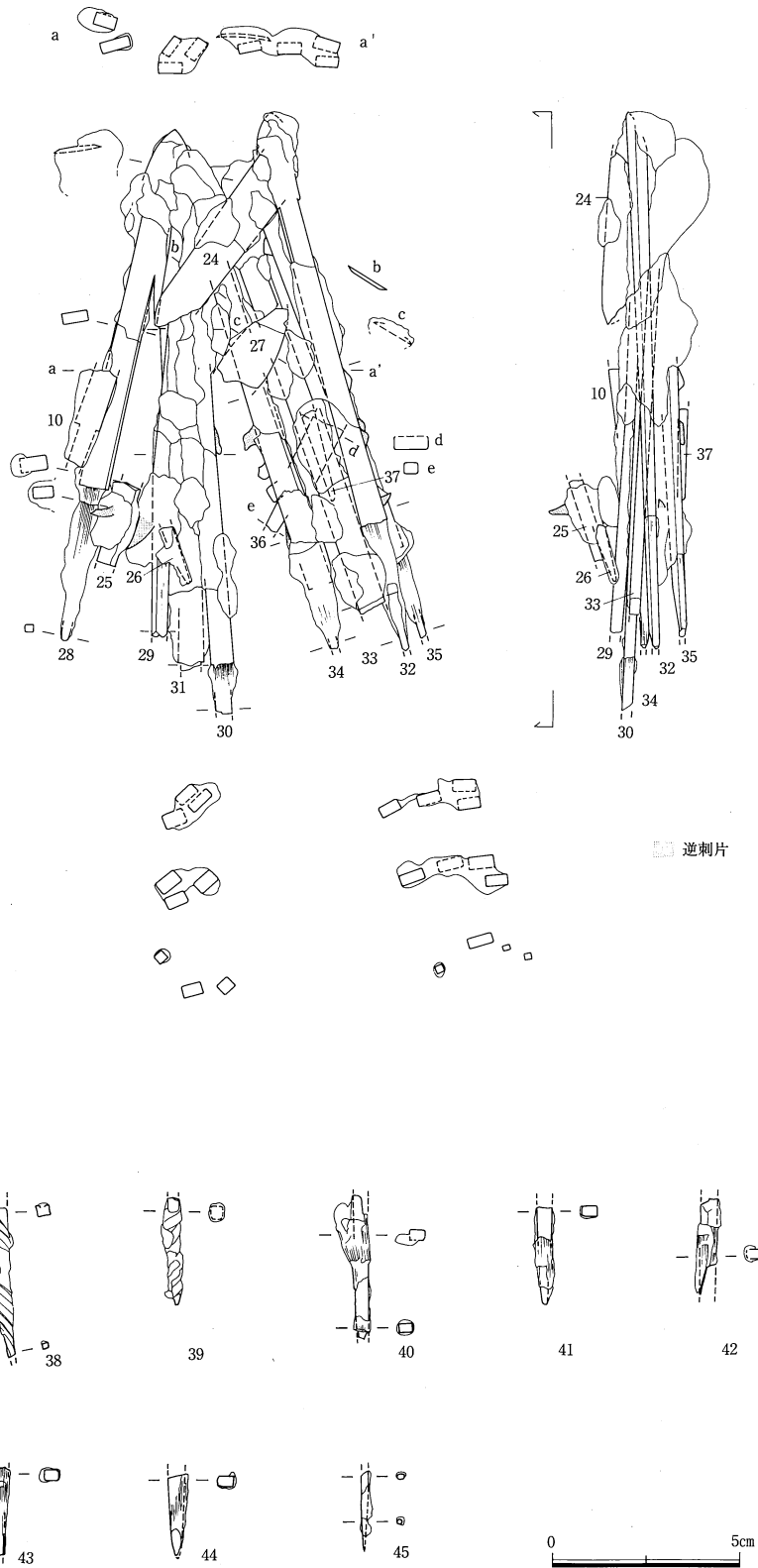
これらの遺物の出土状態から推測すれば頭位は北西の尾根側と考えられ、頭部付近に一括の鉄鏃類、首から胸位にかけて玉類、腹部から腰位に鉄剣の出土位置が想定できる。

その他の出土遺物

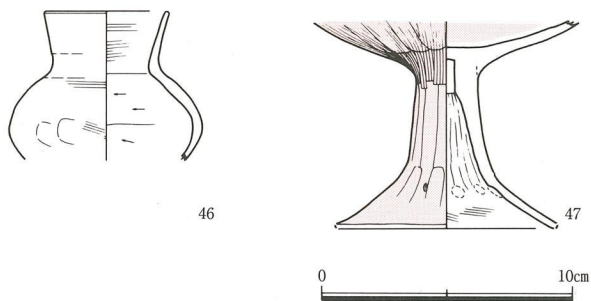
南東裾から2m以上の距離がある調査地南東端付近の標高67.3mで土師器の小型壺(46)、標高67.1mで赤彩された土師器の高杯(47)が出土している。また、南東端付近の土坑状の凹み、標高69.9mで全長



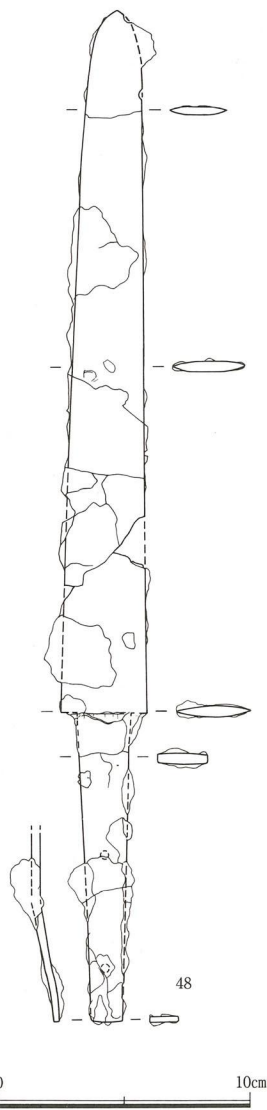
第9図 40号墳 主体部出土遺物実測図(3)



第10图 40号墳 主体部出土遺物実測図(4)



第11図 40号墳 墳丘外出土遺物実測図(1)



第12図 40号墳 墳丘外出土遺物実測図(2)

40cmの鉄剣(48)が出土している。(48)は刃部に比して茎部が長く、刃部には鑄は確認できない。鉄剣が出土した土坑状の凹みは不整ながらも長方形状を呈しており、埋葬施設などの可能性も否定できないが、40号墳の南東下方には墳丘らしき高まりは確認できず、帰属が不明となる。さらに調査地の際という制約もあり、納得できる調査ができなかったことも事実である。現時点では遺構に伴わない遺物として扱うこととした。

2. 下味野41号墳(第13・14図、図版10～12・18・24)

位置と現状

41号墳は、調査地東端の標高75m付近に位置し、尾根が東方と南東に分岐する変換部の東下方に立地する。西側には隣接して42号墳が所在する。東に延びる尾根筋の下方には古墳は確認されていない。調査前の観察では墳形が特定できない程、流失している様相を呈していた。

墳丘

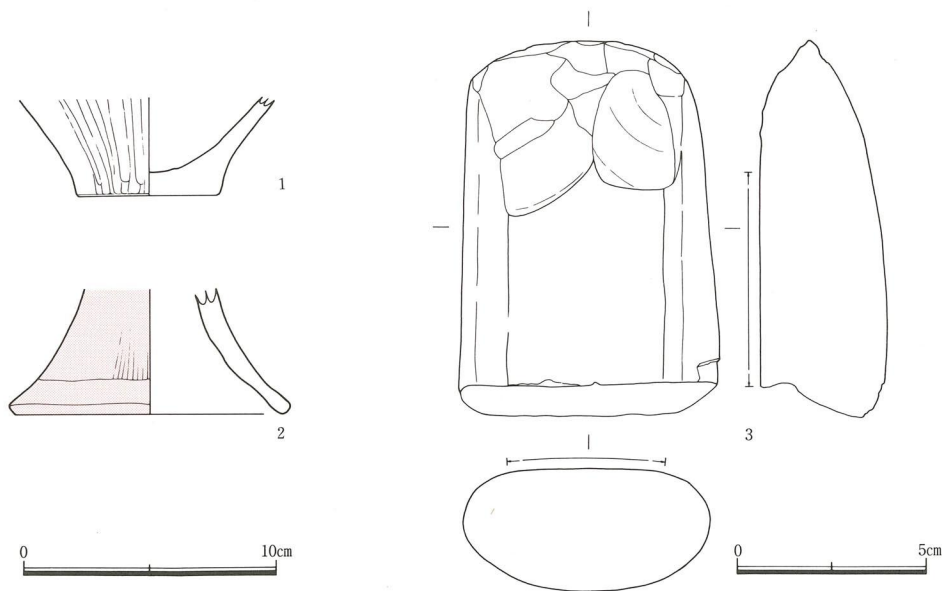
厚さ4～23cmの表土を除去した段階で墳丘面を検出した。墳丘の南側約半分は流失しており、下方の40号墳の周溝に堆積していた。墳丘の築造は、尾根上位側から両側に「□」状の溝を切削して成形し、さらに盛土して形を整えていたものと考えられる。東側は地山を切削して墳裾としている。盛土の厚さは最大120cmを測るが、南側は地山の露頭が観察される。表土除去後の墳頂部の標高は75.46m、墳丘の遺存高は東墳裾から墳頂部まで最大2.38mを測る。周溝は尾根の上方西側と北側に直線的に認められるが、西側の周溝上位の約2/3は42号墳の周溝に切られる。規模は西側で幅94cm、深さ38cm、北側で幅247cm、深さ57cmを測る。墳丘規模は西～東方向で径11.48m、北～南方向で推定10.60mを測り、尾根筋が僅かに長い方形墳である。

埋葬施設

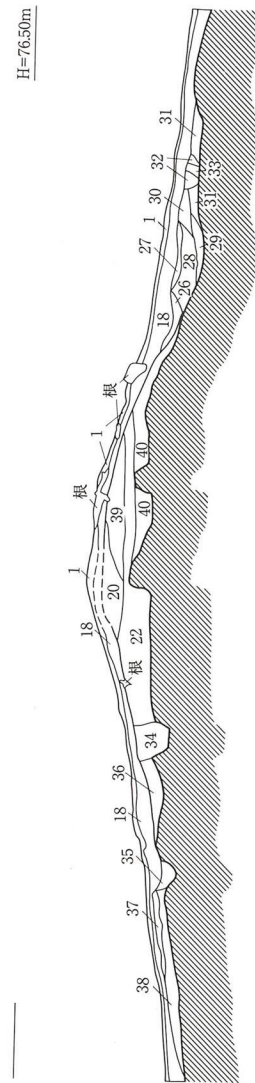
墳丘の断割と盛土除去により埋葬施設の検出を試みたが、検出することができなかった。盛土の流失した南半に存在していたとも考えることができる。

その他の出土遺物

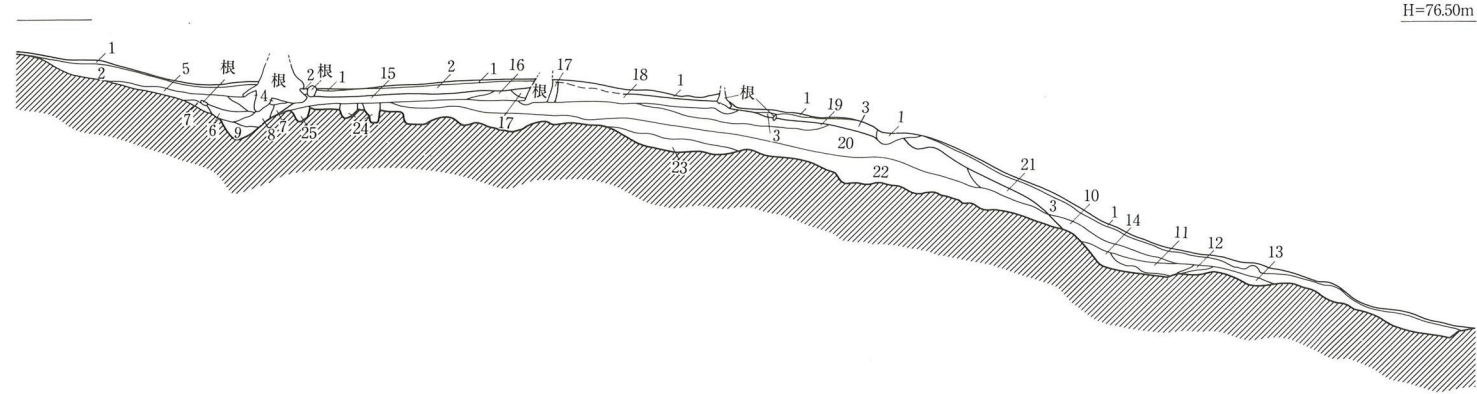
東側の墳裾外、表土中の標高72.9mで蛤刃石斧1/2片の基部側を転用した磨石(3)、北側の墳裾外、表土中の標高74.0mで赤彩の脚部(2)、墳頂部盛土中、地山直上の標高75.3mで弥生土器の底部(1)などが出土している。(1)の底部は平底、外面にはヘラ磨きを施す。(3)の使用痕は1面のみである。



第13図 41号墳 表土・盛土・墳丘外出土遺物実測図



1. 腐植土
2. 褐色粘質土 7.5YR 4/4~4/3
3. 褐色粘質土 7.5YR 4/4 (僅かに砂粒を含む)
4. 褐色粘質土 7.5YR 4/3 (橙色を帯びる)
5. 暗褐色粘質土 7.5YR 3/3~4/5 (黒色を帯びる)
6. 黒褐色粘質土 7.5YR 2/2 (にぶい褐色粘質土7.5YR 5/4混、3cm大の軟岩ブロックを含む)
7. 褐色粘質土 7.5YR 4/4 (橙色を帯びる)
8. 黒褐色粘質土 7.5YR 2/2 (僅かににぶい褐色粘質土7.5YR 5/4混)
9. にぶい褐色粘質土 7.5YR 5/4 (黒褐色粘質土7.5YR 2/2混、僅かに砂粒を含む)
10. 暗褐色粘質土 7.5YR 3/4 (黒色を帯びる)
11. 黒褐色粘質土 7.5YR 3/2 (暗褐色粘質土7.5YR 3/4混、やや橙色を帯びる)
12. 暗褐色粘質土 7.5YR 3/4 (黒褐色粘質土7.5YR 3/2混)
13. 褐色粘質土 7.5YR 4/4~4/6 (極めて僅かに砂粒を含む)
14. にぶい赤褐色粘質土 5YR 4/3 (黒褐色粘質土7.5YR 3/2混)
15. 褐色粘質土 7.5YR 4/4
16. にぶい褐色粘質土 7.5YR 3/4 (1~5cm大の軟岩ブロック5%含む)
17. 灰褐色粘質土 7.5YR 4/2
18. 褐色粘質土 7.5YR 4/3 (僅かに砂粒を含む、5cm大の軟岩ブロック少し含む)
19. 褐色粘質土 7.5YR 4/4~6/4 (1~10cm大の軟岩ブロック1%含む)
20. 明褐色粘質土 7.5YR 5/6~5/4 (2~7cm大の軟岩ブロック5%含む)
21. 褐色粘質土 7.5YR 4/3 (4~10cm大の軟岩ブロック僅かに含む)
22. 褐色粘質土 7.5YR 4/3 (黄灰色を帯びる、2~15cm大の軟岩ブロック3%含む)
23. にぶい褐色砂混粘質土 7.5YR 5/4 (僅かに軟岩ブロックを含む)
24. にぶい褐色粘質土 7.5YR 5/4~4/4
25. 褐色粘質土 7.5YR 4/3
26. 褐色粘質土 7.5YR 4/3 (黒褐色粘質土7.5YR 3/1混、僅かに軟岩ブロックを含む)
27. 黒褐色粘質土 7.5YR 3/1 (褐色粘質土7.5YR 4/3混)
28. 黒褐色粘質土 7.5YR 3/1 (0.5cm以下の砂粒を含む)
29. 極暗褐色粘質土 7.5YR 2/3 (0.5~4cm大の軟岩ブロック5%含む)
30. 暗褐色粘質土 7.5YR 3/3 (黒褐色粘質土7.5YR 3/1混、僅かに砂粒を含む)
31. 褐色粘質土 7.5YR 4/4 (2~8cm大の軟岩ブロック3%含む)
32. 褐色粘質土 7.5YR 4/3
33. 褐色粘質土 7.5YR 4/3 (3~5cm大の軟岩ブロック3%含む)
34. 褐色砂混粘質土 7.5YR 4/6 (1~8cm大の軟岩ブロック5%含む)
35. にぶい褐色粘土 7.5YR 5/4 (1~8cm大の軟岩ブロック10%含む)
36. にぶい褐色砂混粘質土 7.5YR 5/4 (橙色を帯びる、1~8cm大の軟岩ブロック10%以上含む)
37. 明赤褐色砂混粘質土 5YR 5/6 (もろい、1~10cm大の軟岩ブロック5%含む)
38. 明赤褐色砂混粘質土 5YR 5/6 (黄灰色を帯びる、1~15cm大の軟岩ブロック10%含む)
39. 明褐色粘質土 7.5YR 5/6~5/4 (2~7cm大の軟岩ブロック5%含む)
40. にぶい褐色砂混粘質土 7.5YR 5/4 (僅かに軟岩ブロックを含む)



第14図 41号墳 墳丘遺存図・断面図

3. 下味野42号墳(第15～18図、図版10・12～14・18・25)

位置と現状

42号墳は、調査地中央の標高76m付近に位置し、尾根が東方と南東に分岐する変換部に立地する。上方から続く尾根筋は東方へと延び、42号墳を起点に南東に延びる別尾根が派生する。42号墳の所在する尾根の上方である北西側に43号墳が、下方である東側に41号墳が隣接する。南東に派生する尾根筋の少し下方には40号墳がある。調査前の観察においては僅かに墳丘の高まりを確認することができた。

墳丘

厚さ18～27cmの表土を除去した段階で墳丘面を検出した。墳丘の築造は、溝を周回するように切削して成形し、さらに若干の盛土をして形を整えていたものと考えられる。周溝の北西側を43号墳の周溝に切られ、南東側は41号墳の周溝を切る。盛土の遺存状態は悪く、最大59cmである。表土除去後は墳裾周辺では地山の露頭も観察された。墳頂部の削平、盛土の流失の可能性が考えられるが、地山整形を主として築造されており、盛土は封土的なものであったとも考えられる。表土除去後の墳頂部の標高は75.94m、墳丘の遺存高は南東墳裾から墳頂部まで最大0.76mを測る。周溝の規模は北東側で幅121cm、深さ34cm、南西側で幅101cm、深さ26cm、南東側で幅164cm、深さ28cmを測る。墳丘規模は北西～南東方向で径9.08m、北東～南西方向で9.02mを測る。平面形は隅丸形状を呈するが、周溝は明らかに弧を描いており、歪ながらも円墳であると考えられる。

埋葬施設

埋葬施設は墳頂部中央に1基が検出された。

主体部

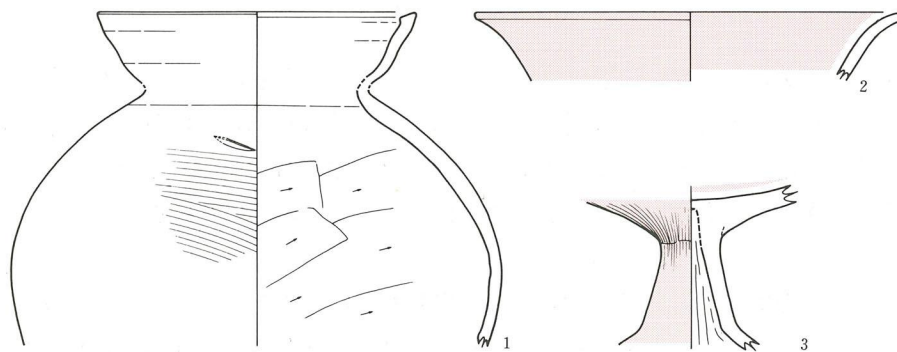
主体部は墳頂部中央のやや尾根側に位置し、主軸はN-62.5°-Wにとる。墓壙は地山を掘り込むが、遺存状態は悪い。平面は隅丸長方形を呈し、長さ3.32m、幅1.61m、深さ29cmを測る。墓壙の中央北東寄りを攪乱坑に切られる。遺存状態が悪く、土層断面の観察においても木棺痕跡を確認することはできなかった。木棺直葬の可能性も否定できないが、断定できないため、遺体を墓壙に直接埋葬する土壙墓としておく。

墓壙内からは遺物は出土しなかった。

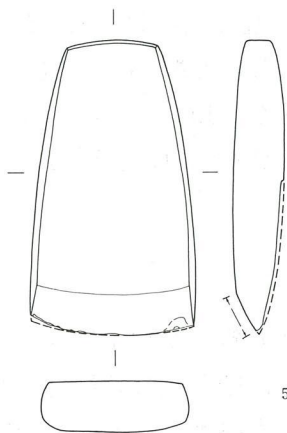
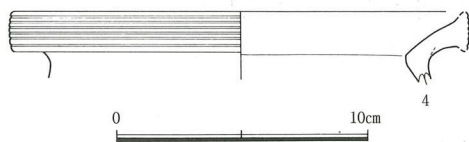
その他の出土遺物

北西側の肩部から周溝底にかけての墳丘斜面に土師器の甕(1)が出土している。北西側の周溝は43号墳に切られるが、甕の出土状態は明らかに42号墳に帰属するものであり、42号墳の周溝は部分的に残存するものと考えられる。また、西隅の周溝内埋土の上位から赤彩された土師器の脚柱部(3)が出土している。南西裾の標高75.54mの周溝埋土中より土師器の高杯口縁部(2)が出土している。(1)の口縁部は外傾して端部で内に肥厚し端面を有する単純口縁。体部は丸みをもつ。

古墳に伴わない遺物としては、墳頂部中央北寄りの盛土中、標高77.7mにて磨製扁平片刃石斧(5)、北東墳裾から北へ4m程離れた調査地北東際付近の標高74.85mでは弥生土器の口縁部(4)などが出土している。(4)はいわゆる「繰上げ口縁」。口縁端面に6条の櫛描平行沈線を施す。



第15图 42号墳 表土・墳丘・周溝出土遺物実測図

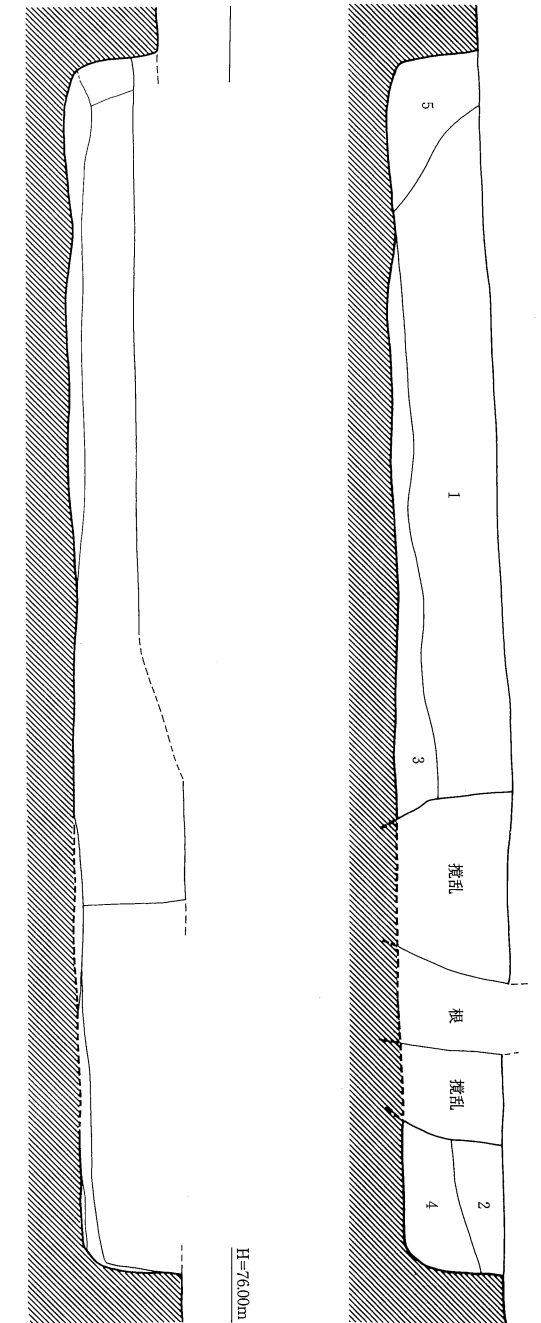
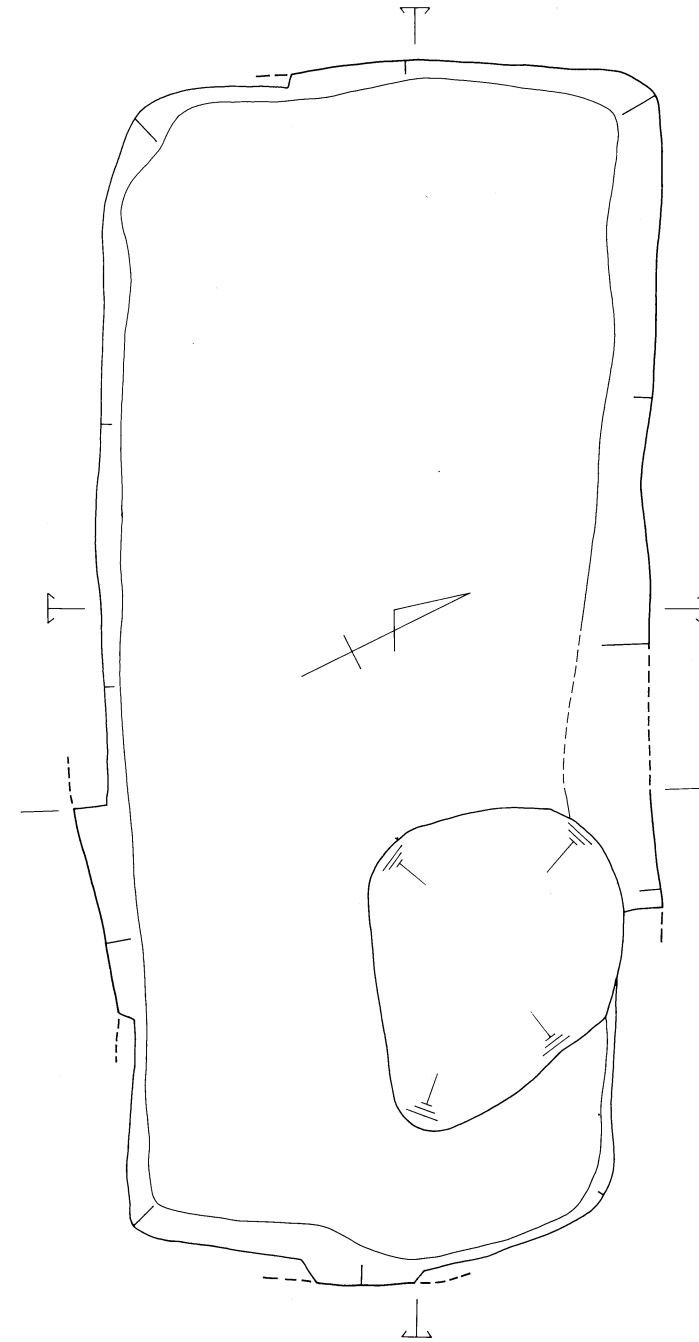
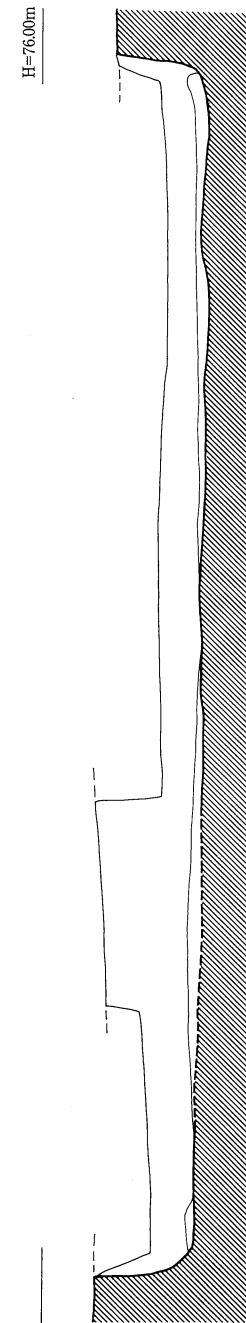
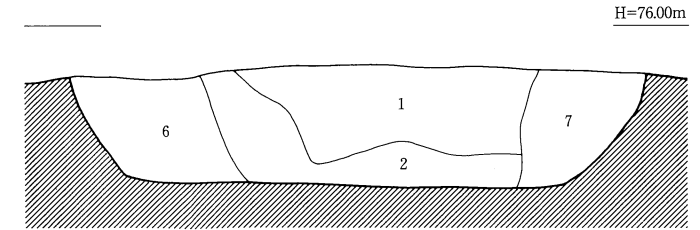
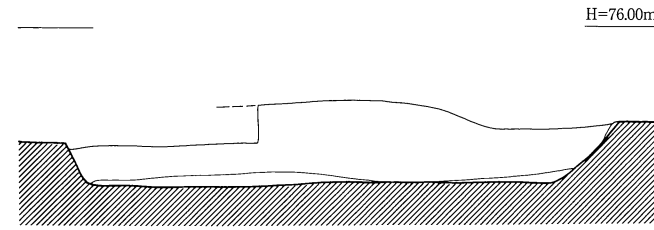


第16图 42号墳 墳丘外出土遺物実測図

1. 腐植土
2. にぶい黄褐色粘質土 10YR 5/4~5/3 (0.5cm大の礫を若干含む)・表土
3. 明黄褐色粘質土 10YR 7/6 (1~3cm大の地山ブロックを含む)
4. 灰褐色粘質土 7.5YR 4/2
5. 黒褐色粘質土 7.5YR 3/1
6. 黒褐色粘質土 7.5YR 3/1 (5より暗、1~2cm大の地山ブロックを若干含む)
7. にぶい褐色粘質土 7.5YR 5/4 (橙色を帯びる、8cm大の紫灰色地山ブロック有)
8. 灰褐色粘質土 7.5YR 4/2
9. 灰褐色粘質土 7.5YR 4/2 (8より若干暗、5cm大の地山ブロック有)
10. にぶい褐色粘質土 7.5YR 5/3
11. 黒褐色粘質土 7.5YR 3/1
12. 褐灰色粘質土 7.5YR 4/1
13. にぶい褐色粘質土 7.5YR 5/3 (10より暗、黒褐色土7.5YR 3/1ブロック・1cm大の地山ブロックを含む)
14. にぶい褐色粘質土 7.5YR 5/4 (0.5~5cm大の紫灰色地山ブロックを含む)
15. 灰黄褐色粘質土 10YR 5/2
16. 褐灰色粘質土 10YR 4/1 (0.3cm大の黒褐色土10YR 3/1ブロックを含む)
17. にぶい黄褐色粘質土 10YR 5/3 (橙色土7.5YR 6/6ブロック・1~5cm大の地山礫・地山ブロックを含む)
18. 灰褐色粘質土 7.5YR 4/2 (黄色を帯びる)・旧表土
19. 褐色粘質土 7.5YR 4/4 (8~10cm大の地山ブロックを若干含む)
20. 褐色砂混粘質土 7.5YR 4/3 (8~10cm大の地山ブロックを含む)
21. 褐色砂混粘質土 7.5YR 4/3 (1~6cm大の地山ブロックを若干含む)
22. 褐色粘質土 7.5YR 4/4 (3~8cm大の地山礫を若干含む)



第17図 42号墳 墳丘遺存図・断面図



1. におい黄褐色粘質土 10YR 6/3 (地山ブロックを若干含む)
2. におい黄色粘質土 2.5Y 6/3 (地山ブロックを含む)
3. 灰赤色粉岩層 2.5Y 5/2 (におい黄褐色粘質土 10YR 6/3 ブロックを多く含む)
4. におい黄色粘質土 2.5Y 6/3 (2より明、2~3cm大の地山ブロックを多く含む)
5. におい褐色粘質土 7.5YR 6/3 (地山ブロックを含む)
6. におい褐色粘質土 7.5YR 5/3 (1~2cm大の地山ブロックを含む)
7. におい黄褐色粘質土 10YR 6/3 (黄褐色土 7.5YR 7/8 ブロックを若干含む)



第18図 42号墳 主体部実測図

4. 下味野43号墳(第19～23図、図版3～6・12・14～18・25・26)

位置と現状

43号墳は、調査地中央やや北西寄りの標高76m付近に位置し、尾根の上方である北西側に44号墳が、下方である南東側に42号墳が隣接する。調査前の観察において周溝状の凹みは明瞭に確認することができたが、墳丘は僅かに高まりが確認できる程度であった。

墳丘

厚さ18～29cmの表土を除去した段階で墳丘面を検出した。墳丘の築造は、溝を北東側の一部を除きほぼ周回するように切削して成形し、さらに若干の盛土をして形を整えていたものと考えられる。北東側は地山を切削して墳裾としている。溝状周溝の北西側を44号墳の周溝に切られ、南東側は42号墳の周溝を切る。盛土は一部にしか遺存しておらず、最大でも20cm程度である。表土除去後は一部を除いて旧表土と地山の露頭が観察された。42号墳同様、墳頂部の削平、盛土の流失の可能性が考えられるが、地山整形を主として築造されており、盛土は封土的なものであったとも考えられる。表土除去後の墳頂部の標高は76.06m、墳丘の遺存高は北東墳裾から墳頂部まで最大1.09mを測る。周溝の規模は南西側で幅148cm、深さ35cm、南東側で幅188cm、深さ53cmを測る。墳丘規模は北西～南東方向で径11.37m、北東～南西方向で10.83mを測る。平面形は隅丸方形を呈するが、周溝は弧を描いており、歪ながらも尾根筋が僅かに長い円墳であると考えられる。

埋葬施設

埋葬施設は墳頂部中央に1基が検出された。

主体部

主体部は墳頂部中央のやや尾根側に位置する。埋葬形態は加工された板石を組み合わせた箱式石棺である。

墓壇は表土除去後の墳丘面から掘り込まれている。墓壇の平面は隅丸長方形を呈し、主軸はN-63°-Wにとる。長さ3.11m、幅1.43mを測る。いわゆる二段墓壇であり、検出面から約20cmの深さでさらに石棺の外法より僅かに大きく掘り込まれている。墓壇底には小口および側板を固定するための幅9～27cmの溝を掘り込む。溝の深さは均一ではなく、側板で3～7cm、小口を固定する溝の方が深く掘り込まれており22～25cmを測る。これらの溝は墓壇下部の壁面直下に掘り込まれており、石棺はこの墓壇内にほぼいっぱい組み込まれている。

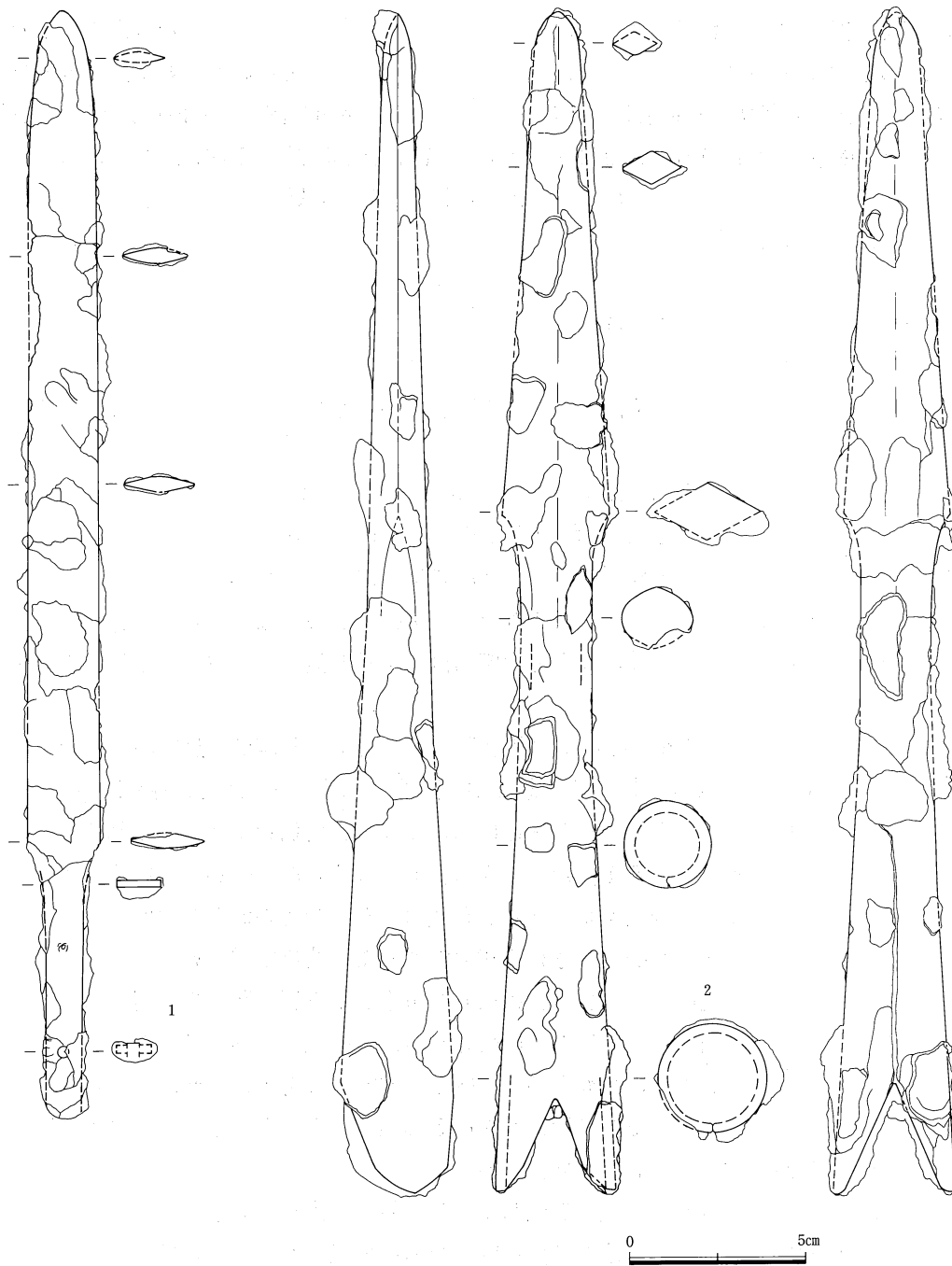
箱式石棺の規模は内法で長さ1.84m、幅は南東側(頭位)小口41cm、北西側(足位)小口36cmである。深さは南東側36cm、北西側30cmを測る。若干ではあるが、頭位に相当する南東側が深く、幅も増している。石棺の構造は両小口に1枚の長方形の板石をほぼ垂直に立て、両側板にはそれぞれ3枚の板石のうち2枚で両小口を押さえ、中央部を残る1枚が外側から支えるように組み合わせている。側板はいずれの側板もやや内傾しており、断面形「ハ」字状である。墓壇壁と石棺の間の僅かな隙間には、裏込め土によって固定している。棺床には5～7cmの厚さに小礫の混ざった淡黄色粘質土を敷いている。蓋石はまず中央に1枚板石を据置き、両端の隙間に各1枚の板石で覆う。南東側(頭位)の蓋石は他の2枚より大きめの石材を使用している。小口や側板と蓋石を密着させるための加工は施していない。蓋石の隙間は淡黄色粘土で目張りをする。蓋石上面の墓壇上部には厚さ13～22cmの封土が置かれている。石棺内にはほぼ一杯に土が流入しており、蓋石までの空間は僅かに5cm程度であった。土の流入により明らかではないが、棺の内面には朱が塗布されていた可能性もある。

遺物は棺内から鉄剣(1)、鉄銚(2)、石枕が出土している。石枕は南東端の小口付近に20cm弱の自然石の平滑な面を内側に「ハ」字状にして、下位約半分を敷土で埋めて固定している。棺材とは異なり、地山の軟岩である。鉄銚は石枕から足位方向へ約25cm離れた位置に北東側板に先端を向け、敷土直上から出土している。墓壇の軸より33°北へ振る。鉄剣は石枕から足位方向へ約45cm離れた位置に南西側板に先

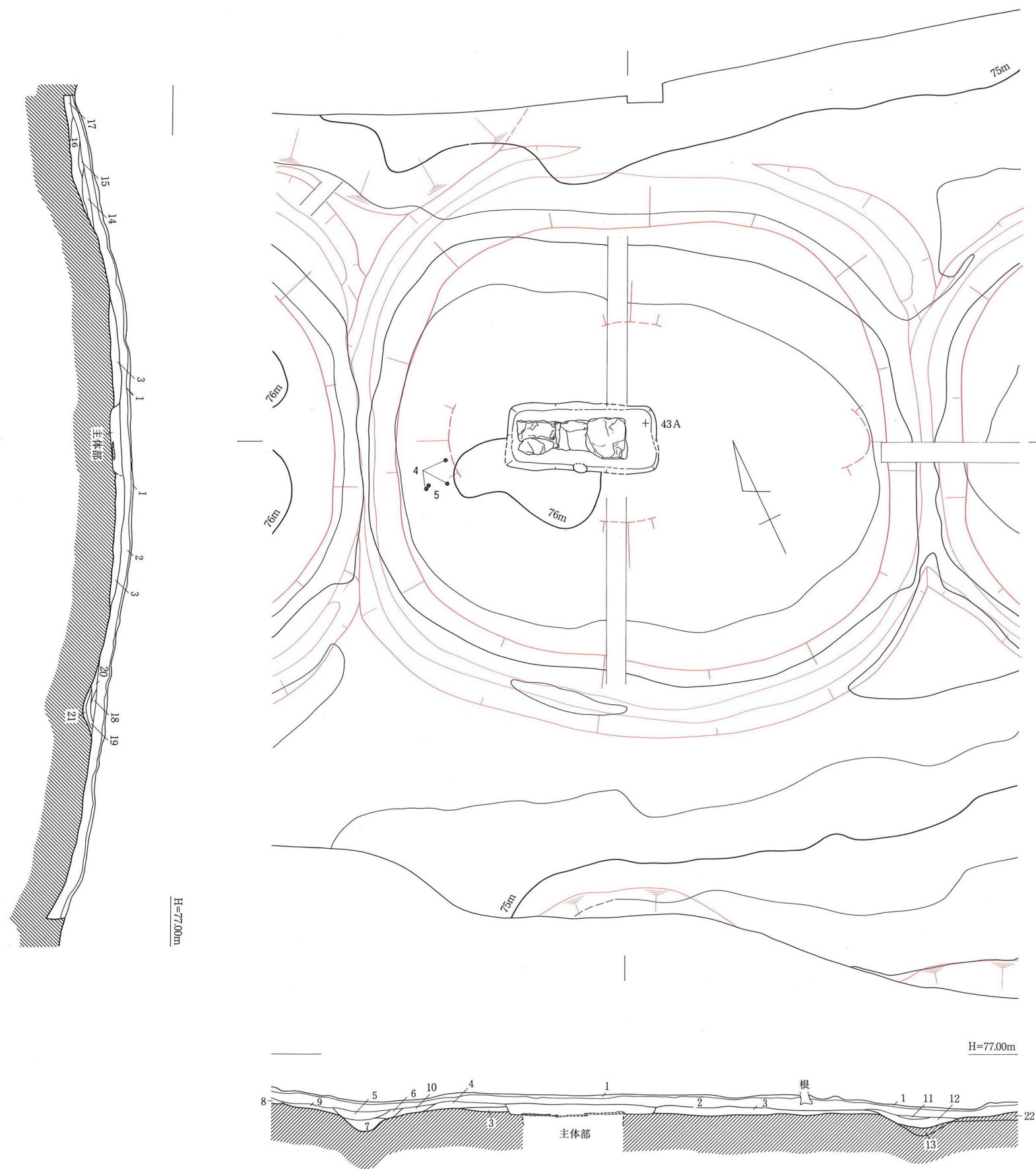
端を向け、棺床から約10cm浮いた状態で出土している。墓壙の軸から147°南へ振る。鉄銚とは16cm離れ、先端を違えて平行な位置である。(1)は全長31.3cmを測り、明瞭な縞は観察されない。(2)は全長33.3cmを測り、刀部の断面形は菱形、茎部は袋閉環状を呈する。袋部の端部には対面2方向に「V」字状の切り込みを有する。想像を逞しくすれば、鉄銚は首部若しくは胸部から右手に向かう位置に、鉄剣は腹部から肩部若しくは脇部に向かう位置とも考えられる。

その他の出土遺物

北東側の周溝から赤彩された高杯の有段杯部(3)、北西側の墳丘肩部標高75.5mにて弥生土器の壺肩部(4)と底部(5)が出土している。(4)は頸部に指圧爪痕を周回させる。(5)は厚手の平底。

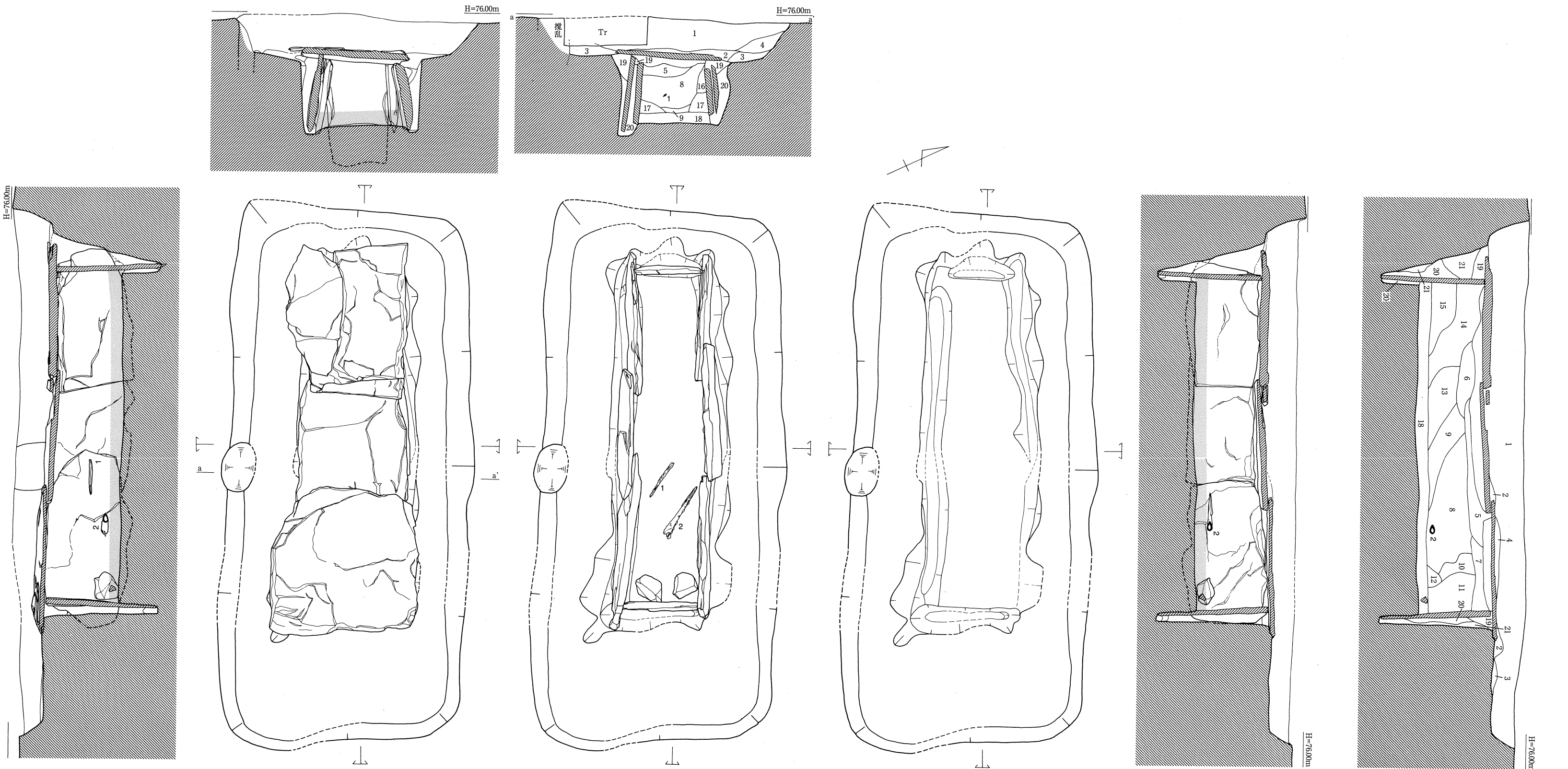


第19図 43号墳 主体部出土遺物実測図



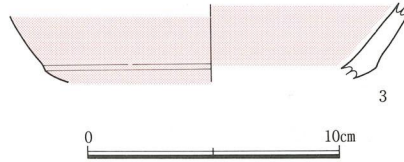
1. 腐植土
2. にぶい黄褐色粘質土 10YR 5/4~5/3 (0.5cm大の礫を若干含む)…表土
3. 灰褐色粘質土 7.5YR 4/2 (黄色を帯びる)…旧表土
4. 明黄褐色粘質土 10YR 6/6 (炭片・1~5cm大の地山礫を含む)
5. 灰褐色粘質土 10YR 4/1 (炭片・0.8cm大の黒褐色土10YR 3/1ブロック・黄褐色土10YR 5/6ブロックを含む)
6. 灰黄褐色粘質土 10YR 5/2 (褐灰色土10YR 4/1ブロックを含む)
7. 黒褐色粘質土 10YR 3/1 (炭片・黄褐色土10YR 5/6ブロックを含む)
8. 明黄褐色粘質土 10YR 6/6 (0.5cm大の褐灰色土7.5YR 4/2ブロックを含む)
9. 灰黄褐色粘質土 10YR 4/2 (0.5cm大の褐灰色土7.5YR 4/2ブロックを含む)
10. 黄褐色粘質土 10YR 5/6 (炭片を若干含む)
11. 灰黄褐色粘質土 10YR 5/2
12. 褐灰色粘質土 10YR 4/1 (0.3cm大の黒褐色土10YR 3/1ブロックを含む)
13. にぶい黄褐色粘質土 10YR 5/3 (褐色土7.5YR 6/6ブロック・1~5cm大の地山礫・地山ブロックを含む)
14. 灰黄褐色粘質土 10YR 5/2 (褐灰色土10YR 4/1ブロックを含む)
15. 褐灰色粘質土 10YR 4/1
16. 黒褐色粘質土 10YR 3/1 (橙色を若干帯びる)
17. にぶい黄褐色粘質土 10YR 5/3 (2より明、褐灰色土10YR 5/1ブロックを含む)
18. にぶい黄褐色粘質土 10YR 5/3 (2-17より暗、褐灰色土10YR 5/1ブロックを含む)
19. 黒褐色粘質土 10YR 3/1 (黄褐色土7.5YR 7/8ブロックを含む)
20. 黄褐色粘質土 10YR 5/6 (0.5cm大の褐灰色土10YR 5/1ブロックを含む)
21. 明黄褐色粘質土 10YR 6/6 (5cm大の地山ブロックを含む)
22. 褐色砂混粘質土 7.5YR 4/3 (8~10cm大の地山ブロックを含む)

第20図 43号墳 墳丘遺存図・断面図

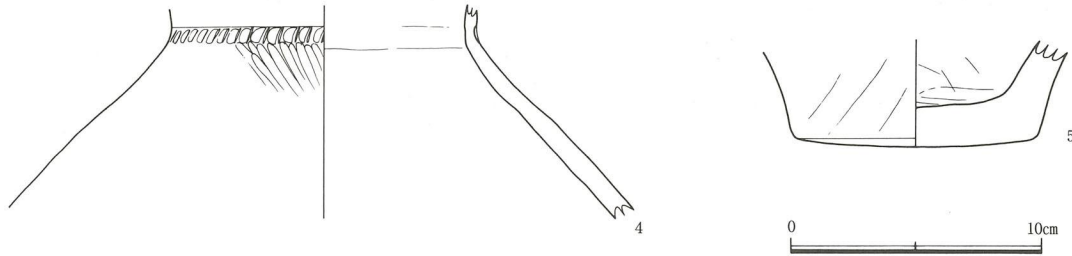


- 1. におい黄褐色粘質土 10YR 6/4 (炭片・明黄褐色土10YR 6/6ブロック・1~5cm大の地山ブロックを含む)
- 2. 淡黄色粘土 2.5Y 8/3 (明黄褐色土10YR 6/6ブロックを含む)…目張り粘土
- 3. 明黄褐色粘質土 10YR 6/6 (やや淡黄色を帯びる)
- 4. 明黄褐色粘質土 10YR 7/6 (やや橙色を帯びる)
- 5. におい黄褐色土 10YR 6/4 (0.5cm大の礫を含む、もろい)
- 6. におい黄褐色土 10YR 6/4 (5より暗、もろい)
- 7. におい黄褐色土 10YR 5/4 (0.5cm大の礫を含む、もろい)
- 8. におい黄褐色土 10YR 5/4 (7より暗、もろい、炭片を含む)
- 9. 橙色土 5YR 6/8 (橙色土7.5YR 6/6ブロック・2cm大の礫を含む)
- 10. 橙色土 7.5YR 6/6 (におい黄褐色土10YR 5/4ブロックを含む、もろい)
- 11. におい黄褐色土 10YR 5/4 (8より暗、橙色土7.5YR 6/6ブロックを含む)
- 12. 橙色土 7.5YR 6/8 (地山ブロック)
- 13. におい黄褐色土 10YR 6/4 (橙色土5YR 6/8ブロックを含む、もろい)
- 14. におい黄褐色土 10YR 5/4 (におい黄褐色土10YR 4/3ブロックを含む)
- 15. 橙色土 10YR 6/6 (におい黄褐色土10YR 5/4ブロック・0.5cm大の礫を含む)
- 16. におい黄褐色土 10YR 5/4 (炭片を少量含む)
- 17. 橙色土 10YR 6/8 (2cm大の礫を含む)
- 18. 淡黄色粘質土 2.5Y 8/3 (2~4cm大の軟岩ブロック・におい黄褐色土10YR 5/4ブロックを多く含む)…敷土
- 19. におい赤褐色砂混粘質土 5YR 4/4 (0.5cm大の軟岩ブロックを含む)
- 20. におい黄褐色土 10YR 4/3 (炭片を少量含む)
- 21. 黄褐色土 10YR 5/6

第21図 43号墳 主体部実測図



第22図 43号墳 周溝出土遺物実測図



第23図 43号墳 墳丘肩部出土遺物実測図

5. 下味野44号墳(第24～27図、図版3・12・14・18～21・26・27)

位置と現状

44号墳は、調査地北西端の標高76.5m付近に位置し、尾根の下方である南東側に42号墳が隣接する。尾根上方には頂部の標高155mに全長19mの前方後円墳(33号墳)が存在するが、それまでの間には現在古墳は確認されていない。調査前の観察において周溝状の凹み、墳丘の高まりともに明瞭に確認することができた。

墳丘

厚さ12～25cmの表土を除去した段階で墳丘面を検出した。墳丘の築造は、溝を北東側の一部を除きほぼ周回するように切削して成形し、さらに若干の盛土をして形を整えていたものと考えられる。北東側は地山を切削して墳裾としている。溝状周溝の南東側は43号墳の周溝を切る。盛土は僅かしか遺存しておらず、最大でも13cm程度である。43号墳同様、墳頂部の削平、盛土の流失の可能性が考えられるが、地山整形を主として築造されており、盛土は封土的なものであったとも考えられる。表土除去後の墳頂部の標高は76.82m、墳丘の遺存高は南西墳裾から墳頂部まで最大1.32mを測る。周溝の規模は北西側で幅234cm、深さ63cm、南西側で幅195cm、深さ52cmを測る。墳丘規模は北西～南東方向で径11.80m、北東～南西方向で10.91mを測る。平面形は楕円形を呈するが、歪ながらも尾根筋が僅かに長い円墳である。

埋葬施設

埋葬施設は墳頂部中央に1基が検出された。

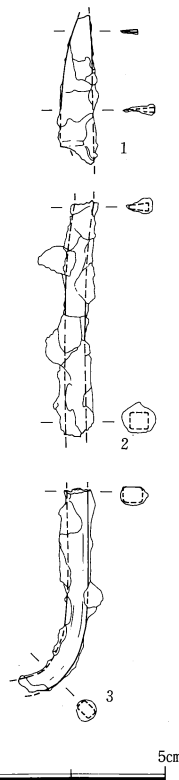
主体部

主体部は墳頂部中央のやや尾根側に位置する。埋葬形態は平面と断面の観察から組合わせ式の木棺直葬と考えられる。墓壙は表土除去後の墳丘面から掘り込まれている。墓壙の平面は隅丸長方形を呈し、主軸はN-61.5°-Wにとる。長さ2.99m、幅1.50m、深さ51cmを測る。検出面から約30cmの深さで木棺痕跡を検出した。断面の観察から木棺の規模を推定すると、厚さ5cm程度の板材を用いた長さ2.64m、幅0.66m、深さ40cm程度の棺が埋置されていたと考えられる。棺痕跡の平面検出では南東側の小口部の方が北西側より10cm程度幅が広く、南東側が頭位とも考えられる。

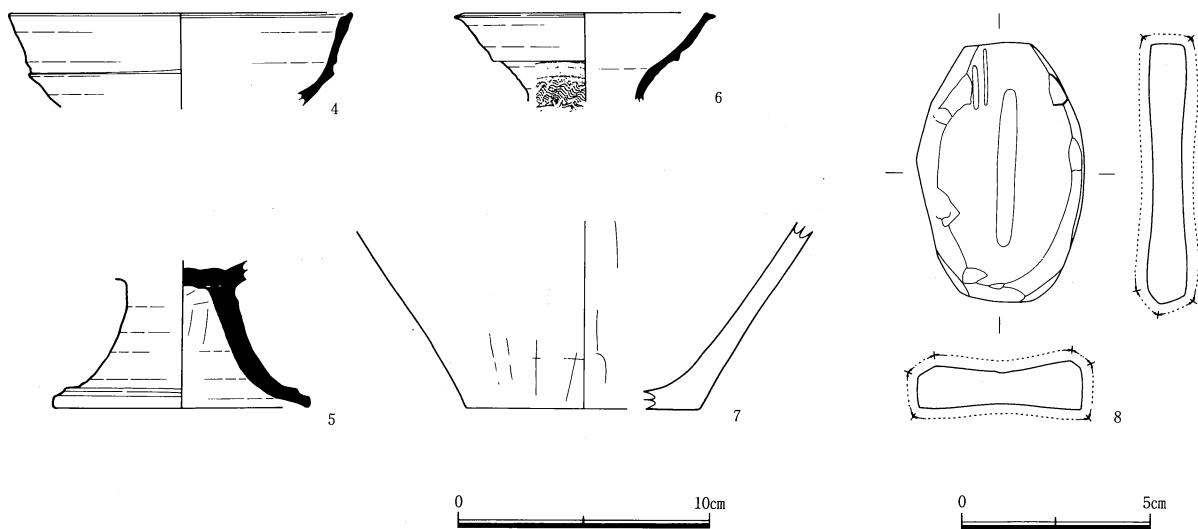
遺物は棺内から同一個体とも考えられる鉄鏃が3ヶ所から出土している。鏃身部(1)は北西端の北東側板寄り、頸部(2)は南西側板寄りから、頸部(3)は中央付近の南西側板際から出土している。何れの破片も棺床から10cm程度浮いた状態であった。

その他の出土遺物

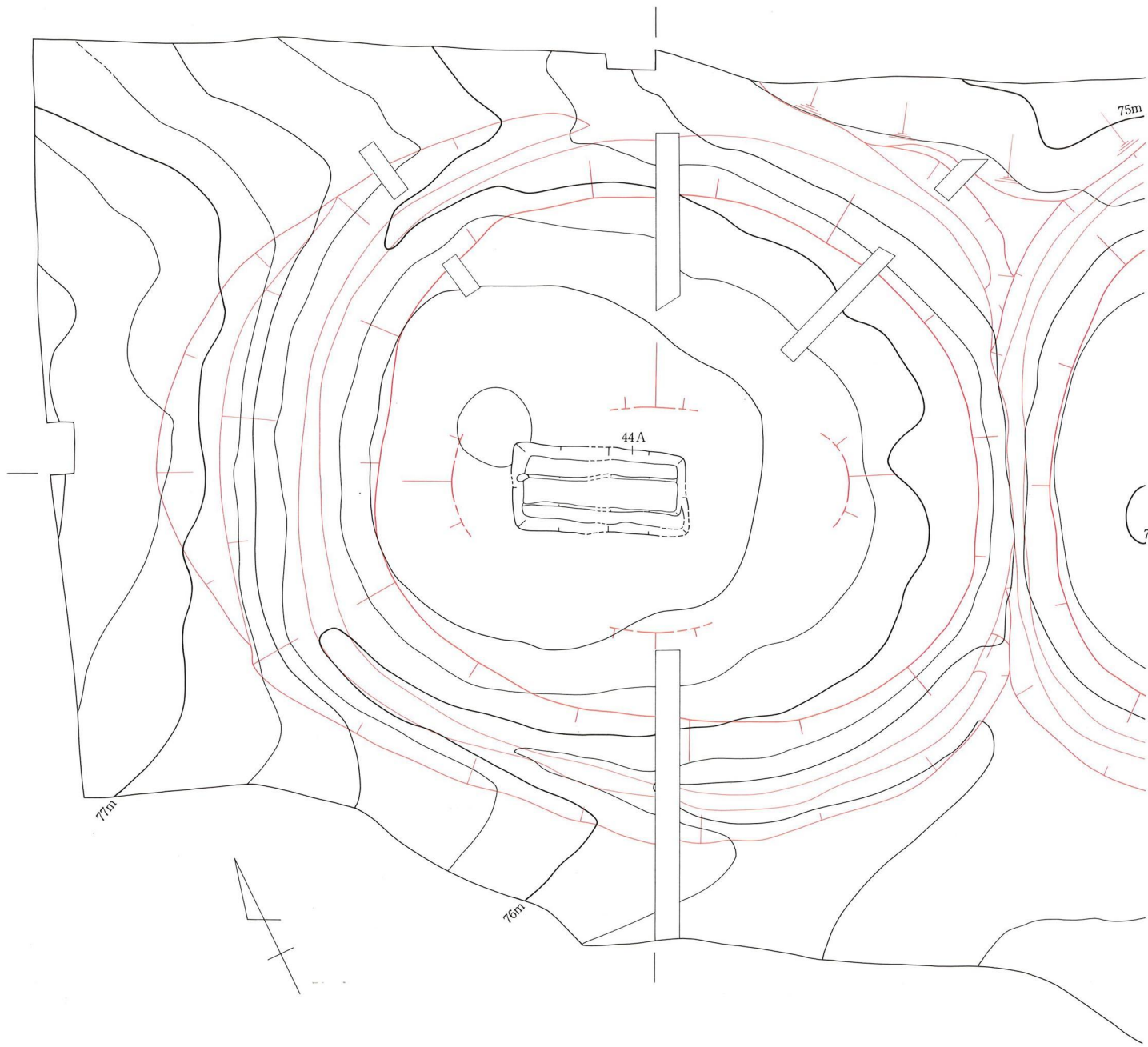
北東側の墳裾から1m弱離れた標高72.2mで須恵器の高杯口縁部(4)、北東墳裾外の流土中から須恵器の高杯脚部(5)、墳頂部中央やや南東寄りで波状文を有する須恵器の口縁部(6)、墳頂部中央やや南西寄り標高76.25mの旧表土中から弥生土器の底部(7)、旧表土を含む盛土中から砥石(8)などが出土している。(4)は口縁外端部をつまみ、凹端面とする。口縁部と底部を分ける稜は1条の沈線により稜を突出させるが鋭さに欠く。(5)の脚部は大きく開き裾端部で稜を突出させた後端面を有する。(6)は口縁端部で外方につまみ出し、凹端面とする。口縁部と頸部を分ける稜を有するが鋭さに欠く。頸部上位に10条の波状文を有する。(7)は平底。外面、ヘラ磨き後下位軽いナデ。(8)は完存し、全面に使用痕が認められる。1面の中心に1条、端部寄りに2条の浅い溝を観察する。



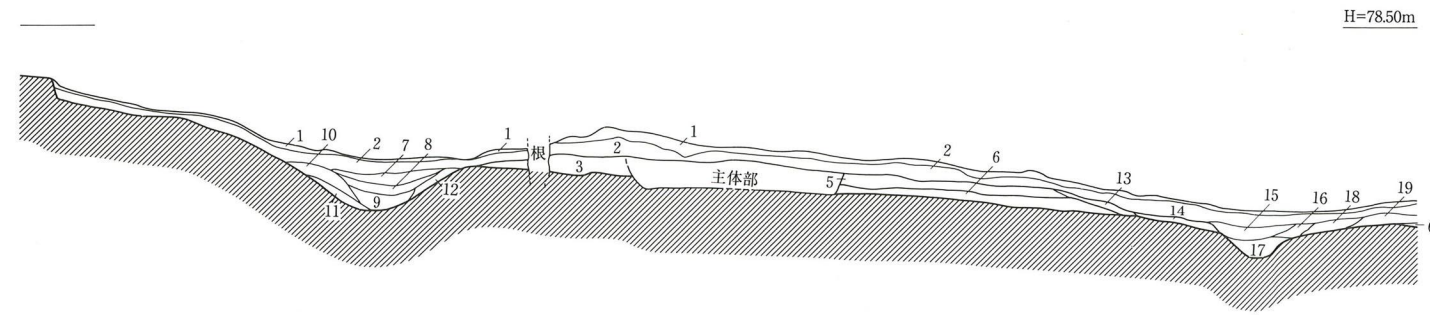
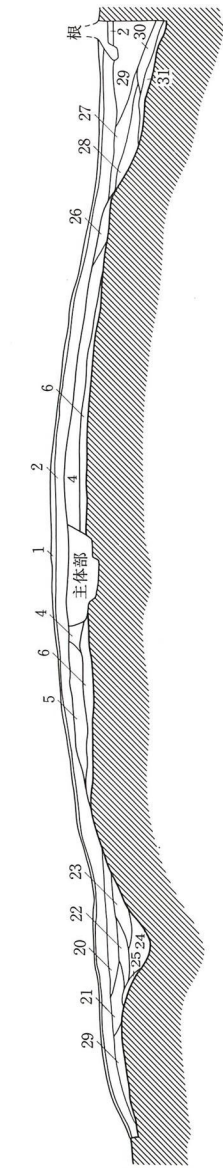
第24図 44号墳 主体部出土遺物実測図



第25図 44号墳 墳丘周溝出土遺物実測図



H=78.50m

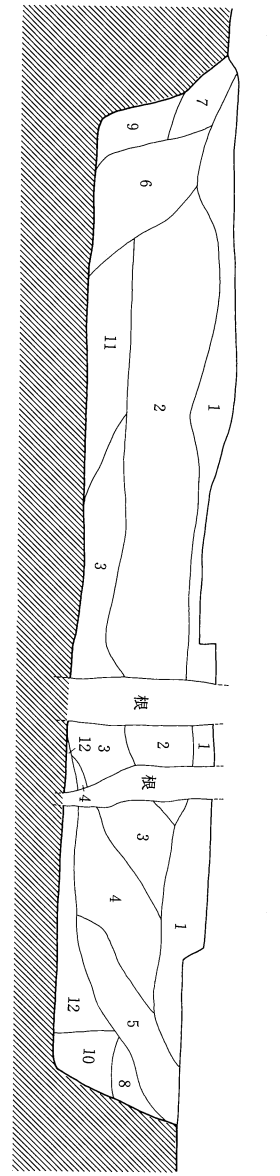
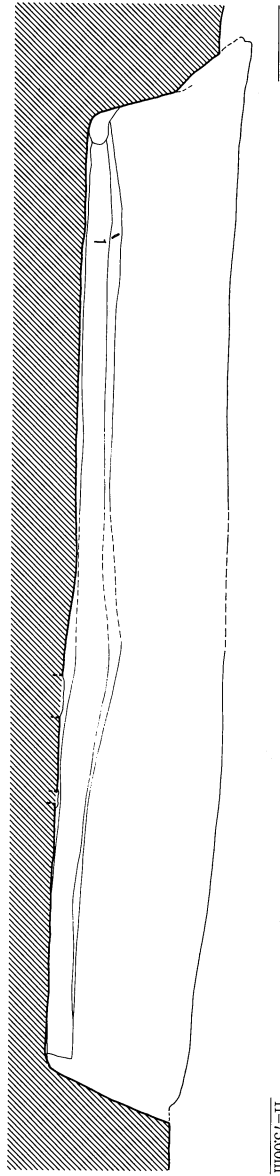
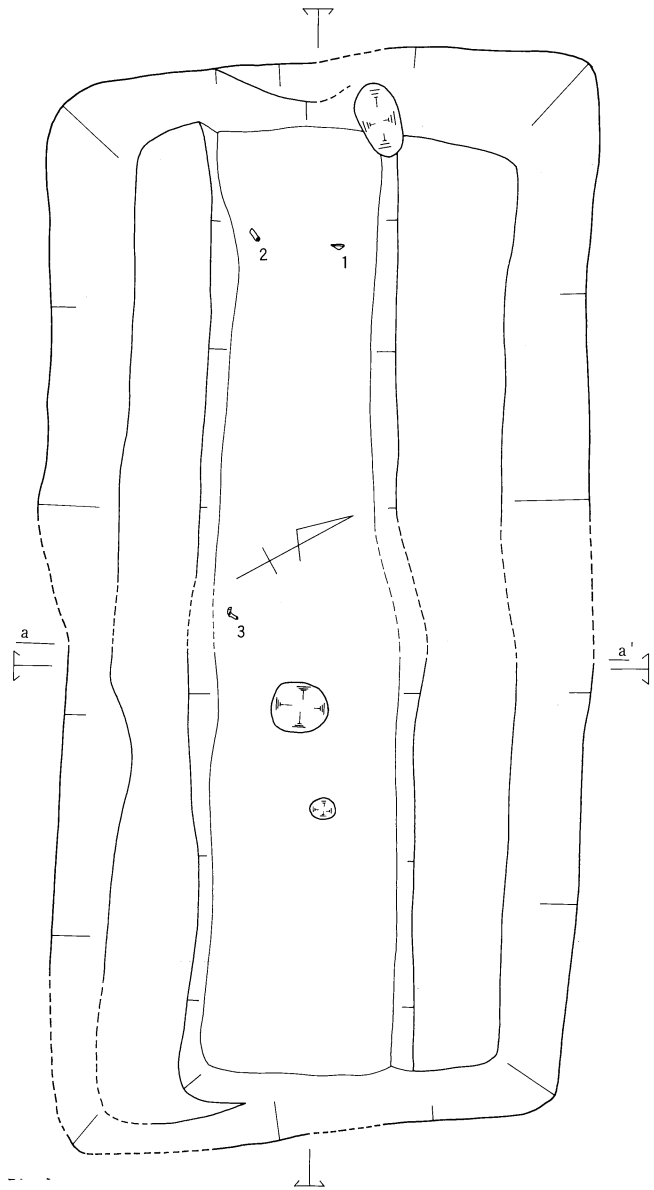
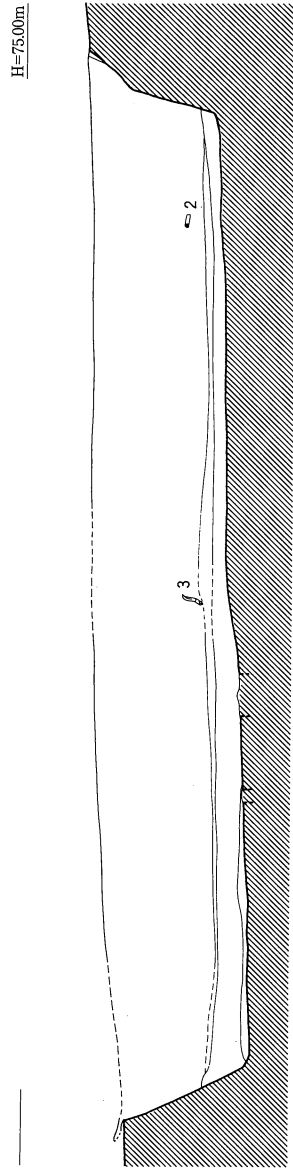
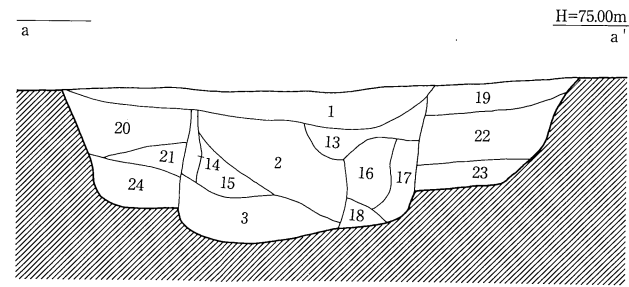
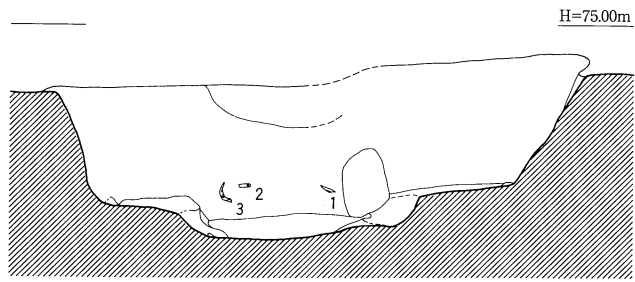


H=78.50m

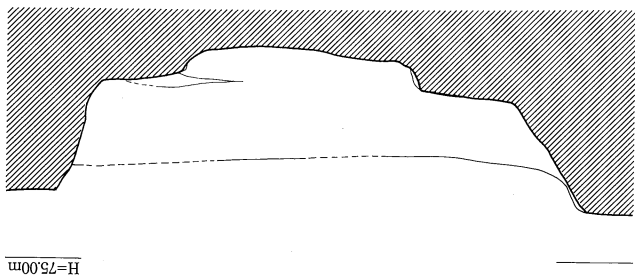
1. 腐植土
2. におい黄褐色粘質土 10YR 5/4~5/3 (0.5cm大の礫を若干含む)…表土
3. 黄褐色粘質土 10YR 5/6 (明赤褐色粘質土5YR 5/8ブロックを含む)
4. 明褐色粘質土 7.5YR 5/6
5. 明褐色粘質土 7.5YR 5/6 (灰褐色粘質土7.5YR 4/2ブロックを含む)
6. 灰褐色粘質土 7.5YR 4/2 (黄色を帯びる)…旧表土
7. 黒褐色粘質土 10YR 3/1
8. 灰黄褐色粘質土 10YR 4/2 (0.8cm大の地山礫を含む)
9. 褐灰色粘質土 10YR 4/1 (炭片・0.5cm大の地山礫を含む、5cm大の地山礫有)
10. 褐灰色粘質土 10YR 4/1 (黄褐色を帯びる、0.5cm大の地山礫を含む)
11. 明褐色粘質土 7.5YR 5/6 (0.5~3cm大の地山礫を含む)
12. 明黄褐色粘質土 10YR 6/8 (0.3cm大の褐灰色土10YR 4/1ブロックを含む)
13. 明黄褐色粘質土 10YR 6/6 (0.5cm大の褐灰色土7.5YR 4/2ブロックを含む)
14. 灰黄褐色粘質土 10YR 4/2 (0.5cm大の褐灰色土7.5YR 4/2ブロックを含む)
15. 褐灰色粘質土 10YR 4/1 (炭片・0.8cm大の黒褐色土10YR 3/1ブロック・黄褐色土10YR 5/6ブロックを含む)
16. 灰黄褐色粘質土 10YR 5/2 (褐灰色土10YR 4/1ブロックを含む)
17. 黒褐色粘質土 10YR 3/1 (炭片・黄褐色土10YR 5/6ブロックを含む)
18. 黄褐色粘質土 10YR 5/6 (炭片を若干含む)
19. 明黄褐色粘質土 10YR 6/6 (炭片・1~5cm大の地山礫を含む)
20. 褐灰色粘質土 10YR 4/1 (0.5cm大の黒褐色土10YR 3/1ブロックを含む)
21. におい黄褐色粘質土 10YR 5/4 (1cm大の灰黄褐色土10YR 5/2ブロックを含む)
22. におい黄褐色粘質土 10YR 5/4 (21より暗、1cm大の褐灰色土10YR 4/1ブロックを多く含む)
23. 黄褐色粘質土 10YR 5/6 (0.5cm大の褐灰色土10YR 4/1ブロックを含む)
24. 黒褐色粘質土 10YR 3/1~3/2 (0.3cm大の黄褐色土10YR 5/6ブロックを含む、炭片を若干含む)
25. 黄褐色粘質土 10YR 5/6
26. におい黄褐色粘質土 10YR 5/3 (0.5~1cm大の地山礫有)
27. 褐灰色粘質土 10YR 5/1 (0.5cm大の黒褐色土10YR 3/1ブロックを含む)
28. 灰黄褐色粘質土 10YR 5/2 (0.5cm大の砂礫有)
29. 明黄褐色粘質土 10YR 6/8 (橙色を帯びる、0.1cm大の地山礫有、灰黄褐色土10YR 5/2ブロックを含む)
30. 黒褐色粘質土 10YR 3/1
31. におい黄褐色粘質土 10YR 5/4 (0.5cm大の砂礫有)



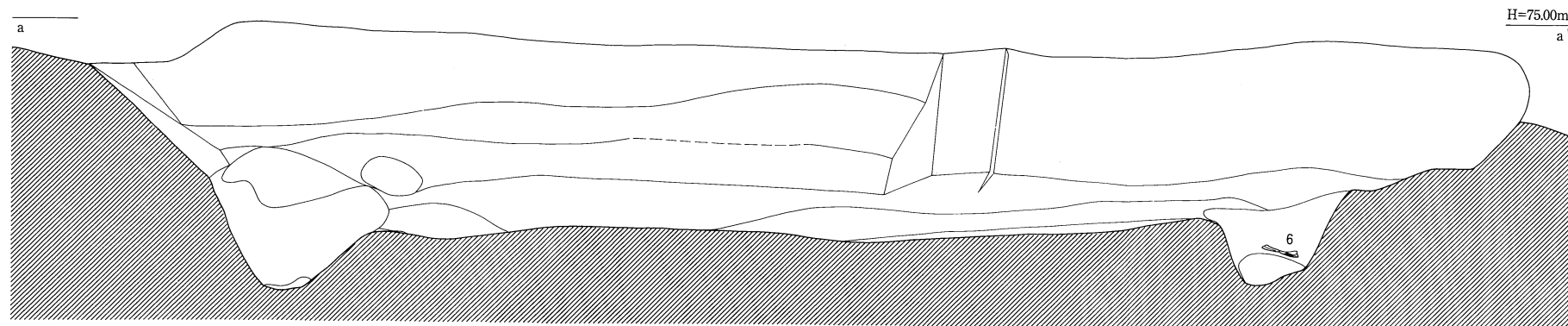
第26図 44号墳 墳丘遺存図・断面図



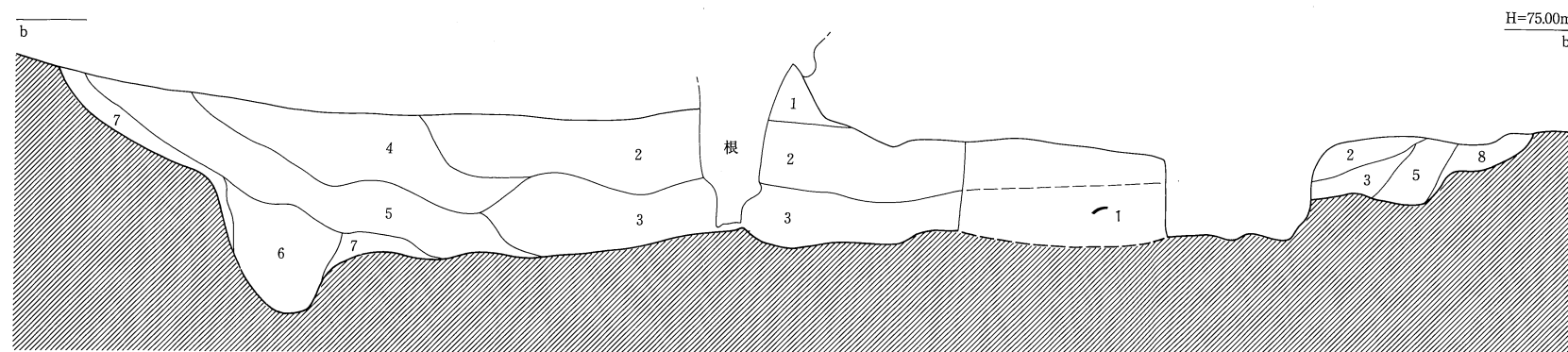
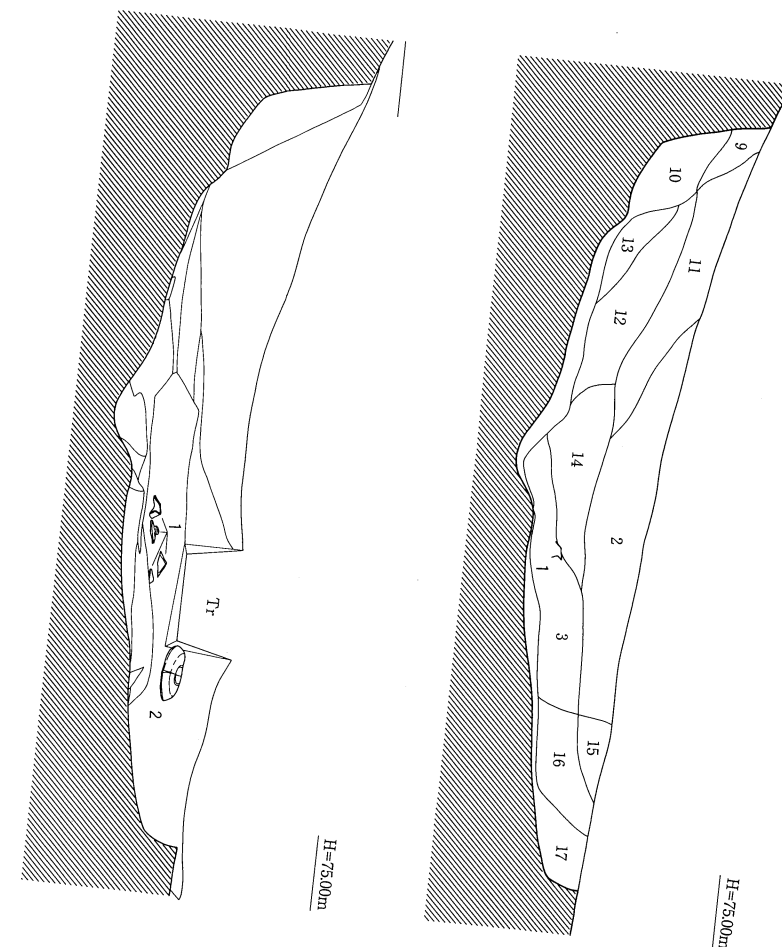
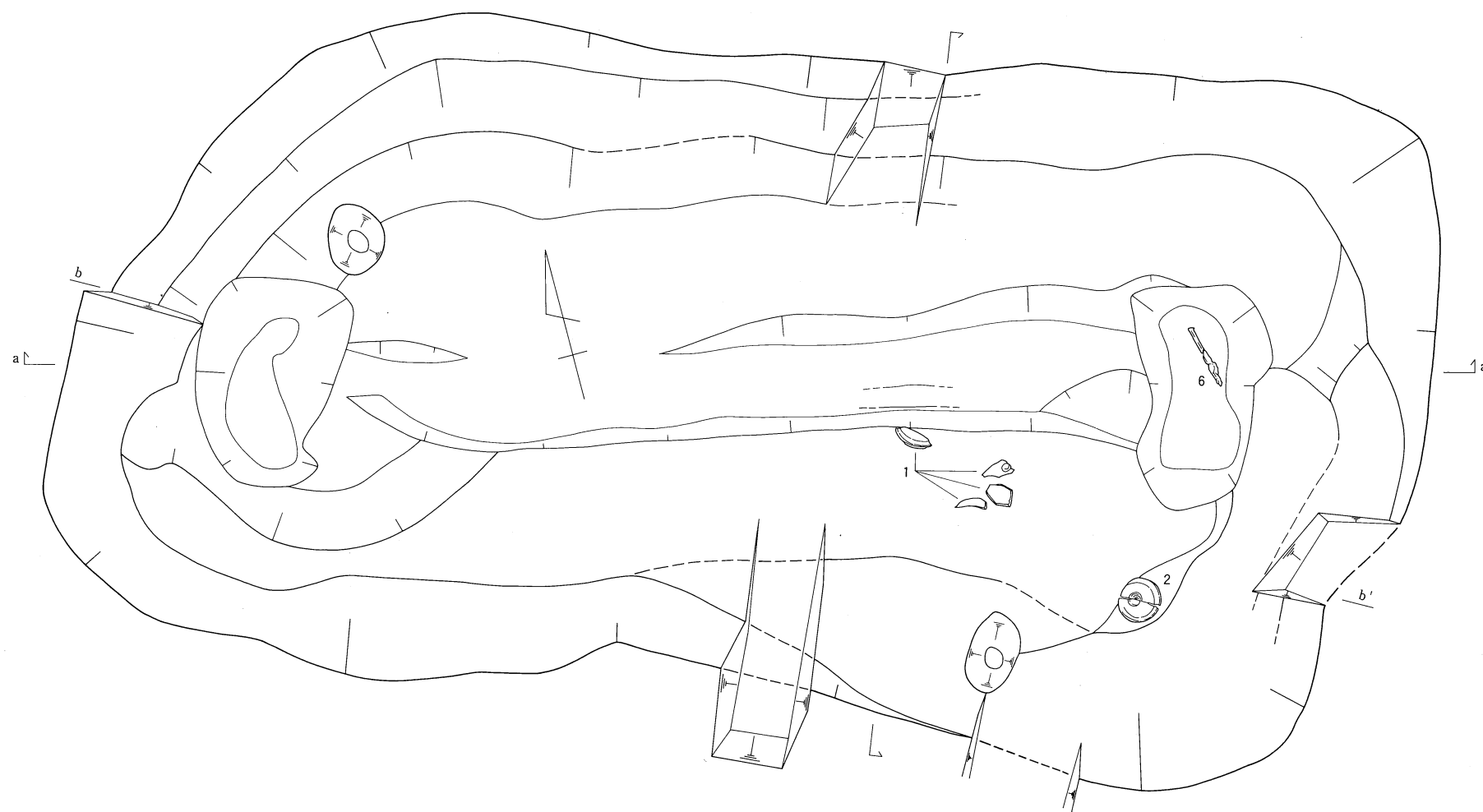
1. におい黄褐色粘質土 10YR 4/3
(炭片を含む、明黄褐色土10YR 6/8ブロックを若干含む、粘質が強い、褐色を帯びる)
2. 褐灰色粘質土 10YR 4/1~3/1
(におい黄褐色土10YR 3/4ブロック及び明黄褐色土10YR 6/8ブロックを含む、よく混ざりホクホクした土)
3. 明黄褐色粘質土 10YR 6/8
(褐灰色土10YR 3/1ブロックを若干含む、ホクホクした土)
4. 明黄褐色粘質土 10YR 6/6 (におい黄褐色土10YR 3/4ブロックを含む)
5. におい黄褐色粘質土 10YR 6/4 (ややしまる)
6. 褐灰色粘質土 10YR 4/1 (1.5cm大の地山ブロックを含む)
7. 黄褐色粘質土 10YR 5/6 (1~3cm大の地山ブロックを含む)
8. 明黄褐色粘質土 10YR 6/6 (4より明、しまる)
9. 黄褐色粘質土 10YR 5/6 (7より若干明、炭片を含む)
10. 黄褐色粘質土 10YR 5/6 (黒灰色を帯びる、炭片・0.5cm大の地山ブロックを含む)
11. 灰黄褐色粘質土 10YR 4/2 (黒灰色を帯びる、0.5~1cm大の地山ブロックを含む)
12. におい黄褐色粘質土 10YR 6/4 (やや灰色かかる、炭片を含む)
13. 明黄褐色粘質土 10YR 6/8 (におい黄褐色土10YR 6/4ブロックを含む)
14. 灰黄褐色粘質土 10YR 4/2 (0.5cm大の地山ブロックを含む、ホクホクした土)
15. 灰黄褐色粘質土 10YR 4/2
(14より若干明、黒灰色を帯びる、におい黄褐色土10YR 5/4ブロックを含む、ややしまる)
16. におい黄褐色粘質土 10YR 5/4 (ホクホクした土)
17. におい黄褐色粘質土 10YR 5/4 (16より暗、0.5cm大の地山ブロックを含む)
18. 黄褐色粘質土 10YR 7/6 (0.5cm大の地山ブロックを含む、ホクホクした土)
19. 明黄褐色粘質土 10YR 6/8 (褐色土10YR 4/4ブロックを若干含む)
20. 明黄褐色粘質土 10YR 6/8
(炭片を若干含む、におい黄褐色土10YR 6/4ブロックを含む)
21. 灰黄褐色粘質土 10YR 5/2 (やや黒褐色を帯びる、炭片を若干含む)
22. 黄褐色粘質土 10YR 7/8
(0.8cm大の地山ブロックを若干含む、におい黄褐色土10YR 6/4ブロックを含む)
23. 明黄褐色粘質土 10YR 6/6
24. 黄褐色粘質土 10YR 7/8
(0.3cm大の地山ブロックを含む、炭片を若干含む)



第27図 44号墳 主体部実測図



1. 褐色粘質土 10YR 4/4
2. 灰褐色粘質土 7.5YR 4/2 (0.5~1cm大の軟岩ブロック1~2%含む、黒灰色を帯びる)
3. 黒褐色粘質土 5YR 2/1 (0.5cm以下の砂粒を含む、にぶい黄褐色粘土10YR 5/3ブロックを僅かに含む、炭化物を多く含む)
4. 黒褐色粘質土 7.5YR 3/2 (0.5~1cm大の軟岩ブロック1~2%・炭化物を含む、灰色を帯びる)
5. 黒褐色粘質土 5YR 5/1 (黒褐色粘質土7.5YR 3/2混、炭化物を多く含む)
6. 灰黄褐色粘質土 10YR 5/2 (6cm大の軟岩ブロック3%・炭化物を含む、黒褐色粘質土5YR 5/1混)
7. にぶい褐色砂混粘質土 7.5YR 5/3 (1~10cm大の軟岩ブロック2%以上含む)
8. 灰褐色粘質土7.5YR 4/2 (1~10cm大の軟岩ブロック7%含む、灰色を帯びる)
9. にぶい褐色砂混粘質土 7.5YR 5/3 (0.5~3cm大の軟岩ブロック3%含む)
10. にぶい橙色砂混粘質土 7.5YR 6/4 (2~8cm大の軟岩ブロック15%含む)
11. 灰褐色砂混粘質土 7.5YR 5/2~4/2 (0.5~1cm大の軟岩ブロック2%含む)
12. 褐色砂混粘質土 7.5YR 4/3 (0.5~4cm大の軟岩ブロック1%含む)
13. にぶい褐色砂混粘質土 7.5YR 5/3 (1cm以下の軟岩ブロック僅かに含む)
14. 黒褐色粘質土 7.5YR 3/1 (灰褐色粘質土7.5YR 4/2混、1~4cm大の軟岩ブロック1%含む)
15. 灰褐色砂混粘質土 7.5YR 5/2 (褐色を帯びる)
16. 灰褐色砂混粘質土 7.5YR 4/2 (黒褐色粘質土7.5YR 3/1混、0.5cm程度の軟岩ブロック僅かに含む)
17. にぶい褐色砂混粘質土 7.5YR 5/3 (灰色を帯びる、濁る、0.5cm程度の軟岩ブロック僅かに含む)



第28図 SX-01 実測図

6. その他の埋葬施設

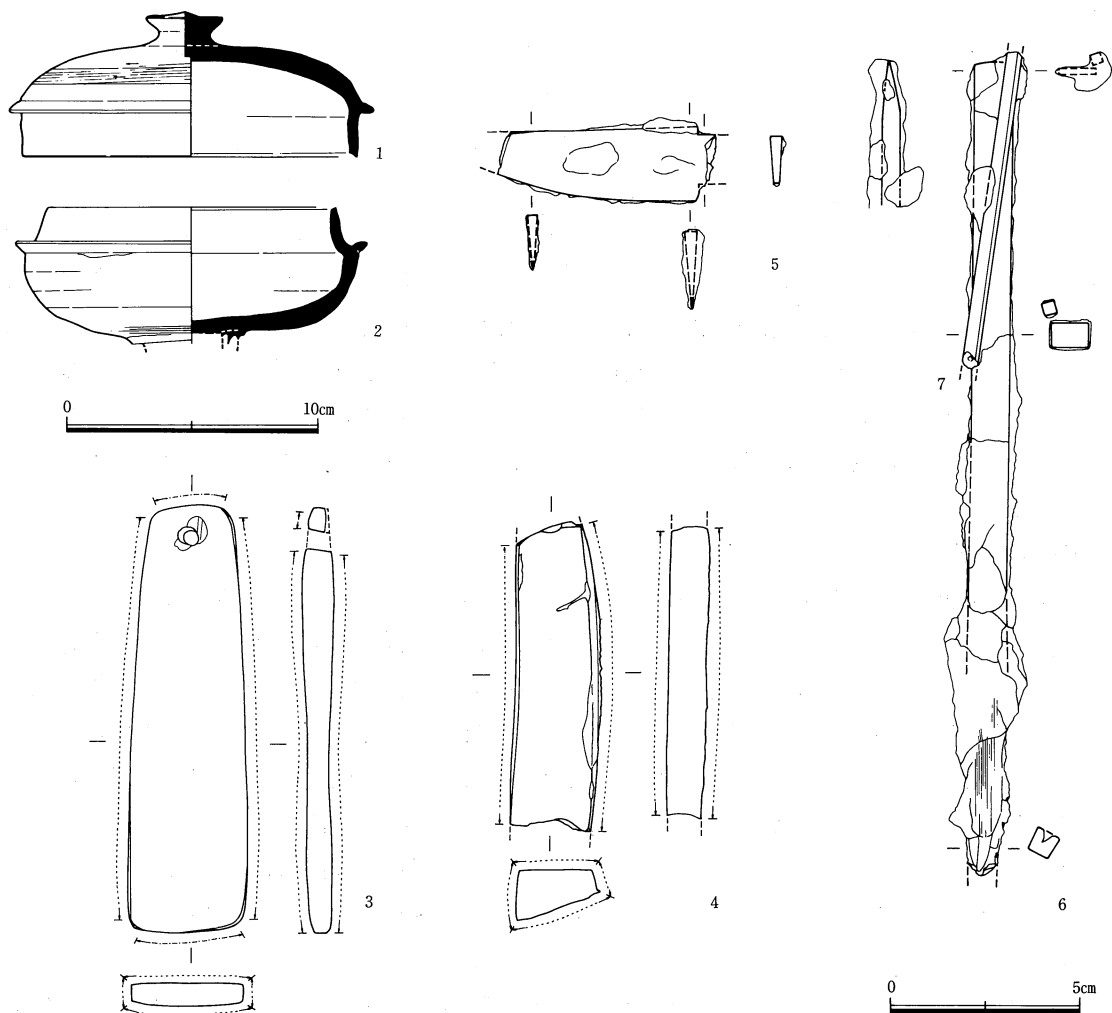
SX-01 (第28・29図、図版21・22・27・28)

調査地中央、尾根筋から南西へ7m程下った標高74.75mの緩斜面に立地する。位置的には42号墳の南西裾から3m程の距離である。調査当初、埋葬施設と認識しておらず土坑として扱っていた。調査の進行途中で埋葬施設の可能性を考慮した。

墓壙の平面形は不整な長方形を呈する。主軸は上方の尾根の軸より15°程西へ振るものの、等高線にほぼ平行しており、N-76°-Wとなる。墓壙の規模は長さ4.52m、幅2.32m、深さ72cmを測る。墓壙底面両端には長さ70cm、幅45cm、深さ30cm程度の小口坑が掘り込まれている。両小口坑の間は溝状に最大10cm程度の凹みがみられる。これらの状況から埋葬形態は木棺直葬であったと考えられる。木棺の規模を復元すると、長さ3.03m、幅0.68~0.73mとなる。深さは不明である。

遺物は墓壙南東隅から須恵器の有蓋高杯杯部(2)が底面から10cm程浮いた状態で出土している。また、この杯部とセットになると考えられる蓋(1)が棺中央のやや東寄り、棺内の流入土と考えられる層位から数片の破片となって出土している。東側の小口坑から鉄鑿(6)とこれに付着する不明鉄製品(7)、出土状態を図示できなかったが刀子(5)、砥石(3・4)などが出土している。(1)は宝珠形つまみを有する。天井部と口縁部を分ける稜は突出するが鋭さに欠く。口縁端部は内傾する端面を有する。(2)杯底部は丸みを有し、脚部を欠く。口縁端部は内傾して端面を有する。(3)は長軸4面に使用痕。一端部に片面穿孔の紐孔を有する。(4)は両端部を欠く。長軸4面に使用痕。全面に鉄分が付着する。(6)は背、刃側で関部を有する。

これらの調査結果よりSX-01は埋葬施設であると判断でき、位置的に42号墳の墳丘外埋葬施設とも考えられる。



第29図 SX-01 出土遺物実測図

第3節 まとめにかえて

下味野古墳群は標高160mに存在する全長73.5mの前方後円墳である23号墳を頂とし、その前方後円墳から北東に延びる尾根筋に約20基、北に延びる小尾根に数基存在する。23号墳の南側の標高153mの頂部に29・30号墳の前方後円墳と付随するかような数基の古墳、更に南西の標高155m、158mの頂部にそれぞれ33号墳、36号墳の前方後円墳と付随するかような数基の古墳、さらに東方向と南東方向へ延びる尾根筋の先端部付近にそれぞれ数基の円墳群と5・6支群に大きく分けることができる。下味野古墳群にはこれまでに45基の古墳が確認されていたが、今回実施した踏査等の結果、新たに8基が追加となり、古墳の総数は計53基を数える⁽¹⁾。主稜線の東側に派生する小尾根上にはまだ古墳の存在するものがあると考えられ、さらに広範囲にわたる詳細な分布調査が必要である。

今回の調査地は主稜線から東側に派生する小尾根のひとつに該当する。主稜線から東南東方向に延びる小尾根に存在する支群のうち5基が調査対象となった。標高は概ね67～79mに位置する。この小尾根も標高76m付近から東方向と南東方向へ細分岐しており、南東へ延びる小尾根先端付近には数基の古墳が分布している。

調査地東半において地山と認識した軟岩は泥岩と考えられ、この亜円礫の表面には多数の穿孔がみられ、生痕化石の可能性も指摘されている。岩美町新井三嶋谷墳丘墓の調査事例では貼石の凝灰質泥岩のなかに同様のものが確認されている。新井三嶋谷の生痕化石は海生の軟体動物であるニオガイ科の二枚貝が穿孔したものとされており、第四紀、更新世中期頃に当地が海岸近くの水面下にあったとの評価をされている。調査地においても同様の可能性も考えられ興味深いものがある⁽²⁾。

下味野40号墳

40号墳は、調査地中央付近の尾根が東方と南東に分岐する変換部の南東下方に立地する。南東に延びる尾根筋の下方、先端付近には数基の小規模な古墳が存在し、小支群を形成するものと考えられるが、40号墳から60m以上の距離があり、距離的には上方の41～44号墳の小支群に帰属するものと思われる。40号墳墳丘の築造は、尾根高位を切削して低位側へと大量の盛土することによって築造されている。41～44号墳は、地山整形を主として旧地表面に盛土を行い墳形を整えている。また、41～44号墳が全長9～11m、高さ1～2mの小規模な古墳であるのに対して40号墳は全長15.5m、高さ4mと今回調査した古墳のなかでは傑出する。埋葬施設の主軸は41～44号墳同様、尾根筋方向と同軸である。また、埋葬施設内から出土した全長72.3cmの鉄剣は、43号墳石棺内から出土した鉄剣や鉄鉾同様、棺の主軸に対して平行には納められず30°程振った斜方向に埋納されている。鉄剣のみに関すれば切先が頭位側に向いていることも共通する。遺物は土器類の出土が乏しく時期を特定することができないが、鉄製品の様相は古墳時代中期的な要素がみられる。

下味野41～44号墳

41号墳は同じ尾根筋に存在する42～44号墳と規模は類似するものの、他が円墳であるのに対して方形墳である。墳丘の築造方法は地山整形を主として旧地表面に盛土を行い墳形を整えているが、墳丘の約半分が流失しているにも関わらず、盛土の遺存状態は42～44号墳に較べて良好である。盛土の遺存状況は44号墳が13cm、43号墳が20cm、42号墳が59cm、41号墳が120cmを測り、上方の古墳ほど遺存状態は悪い。このことは上方の古墳ほど盛土が少なかったとも捉えることができる。推測の域をでないが、墳頂部の標高をある程度揃えたとも考えられる。埋葬施設は検出できず、古墳に伴う遺物の出土もなく詳細な時期は不明である。盛土中の旧表土より弥生土器が出土しており築造時期の上限を暗示しており、当墳が弥生時代の墳丘墓でないことを示唆する。平面及び断面の観察により、42号墳に先行するものと考えられる。

42～44号墳は墳形、墳丘の築造方法はきわめて類似している。規模は尾根上位に向かって、僅かではあるが大きくなる傾向が窺える。墓壙の規模、主軸もほぼ類似するが、大きく相違する点は埋葬方法で

ある。また、平面検出及び断面の観察から尾根上位の古墳ほど新しくなるものと考えられる。

42号墳は遺存状態が悪く、埋葬形態を断定できなかつたため土壙墓としたが墓壙底面が平坦なこと、規模などから木棺直葬であった可能性は十分考えられる。副葬品などの遺物は出土しなかった。

43号墳は箱式石棺で内法は長さ1.84m、幅0.41m、深さ36cmを測る。石材の加工、石棺の構造ともに比較的丁寧である。副葬品は全長31.3cmの鉄剣、全長33.3cmの鉄鉾が出土している。身の断面形は菱形、袋は円筒形を呈する。副葬品としての鉄鉾の出土は稀有であり、県内でも数例、鳥取市域では桂木11号墳、倉見4号墳に次いで3例目となる⁽³⁾。

44号墳は木棺直葬である。平面および断面の観察から木棺の規模は、長さ2.64m、幅0.66m、深さ40cmとなる。副葬品は同一個体とも考えられる鉄鏃が破片で出土している。

古墳の時期については土器類の出土に乏しく明確に把握することが困難である。44号墳の墳頂部より出土した須恵器は概ね6世紀初頭(TK-47)に比定できる⁽⁴⁾。41～44号墳は5世紀代から6世紀初頭にかけて尾根下位の42号墳から順に尾根上位へと築造されたものと考えられる。

SX-01

埋葬施設SX-01は位置的に42号墳を意識した墳丘外埋葬とも考えられるが、墳裾から3m以上離れており、主軸も尾根の主軸とは異なり等高線に平行である。また、墓壙、木棺の規模も比較的大きく、副葬品も豊富である。須恵器の年代観から5世紀末頃(TK-23)の時期が比定できる⁽⁴⁾。42号墳の詳細な埋葬形態、時期が不明であることから明言できないが、単純に42号墳に帰属する埋葬施設とするには疑問も残る。このような帰属の不明な埋葬施設は、近年調査された服部墳墓群でも確認されており⁽⁵⁾、調査事例の増加が待たれる。単独で存在する可能性も含めて検討する必要があるかと考える。

おわりに

今回調査した5基の古墳は下味野古墳群のごく一部であり、当古墳群を特徴づけることは困難である。とりわけ、出土遺物のなかでは鉄製品の出土が豊富であり、詳細な分析、比較検討が必要である。また、直接遺構に伴わないものの弥生時代の遺物が出土していることは、近隣に遺構の存在を示唆するものであり注意を要する。当古墳群の造営集団、社会的背景など解決すべき課題も多いが既に紙数も尽きた。詳細は今後の調査、研究に委ねることとする。

鳥取市域屈指の古墳群の一支群の一部の調査に過ぎなかつたが、千代川左岸における強大な勢力の一端を認識するには十分な成果であった。

註

- (1) 「下味野所在遺跡1、下味野古墳群」『鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』鳥取市教育委員会 2001年
- (2) 中野 知照氏のご指摘による。
赤木 三郎「岩美町新井三嶋谷遺跡とその周辺自然环境」『新井三嶋谷墳丘墓発掘調査報告書』岩美町教育委員会 2001年
本報告書 図版28
- (3) 「倉見4号墳」『西桂見遺跡Ⅱ』鳥取市教育委員会・倉見古墳群発掘調査団 1984年
- (4) 『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ 1966年
- (5) 「その他の埋葬施設と出土遺物」『服部墳墓群』(財)鳥取市文化財団 2001年

下味野古墳群調査一覽表

名称	墳		丘		埋葬施設			出土遺物		備考	時期	
	形態・規模 (m)	主軸	埋葬方法等	棺規模 長さ×幅×高さ(m)	平面形態	墓 長さ×幅×高さ(m)	等		埋葬施設			墳丘・周溝 その他
							主	軸				
下味野 40号墳	円形 直径 15.45 高さ 4.14	N-29°-W	(土壙墓)	—	隅丸長方形	(3.79)×1.15×0.51	N-41°-W	鉄剣・刀子 ・鉄鏃 不明鉄製品 勾玉・ガラ ス小玉	鉄剣 土 師 器 (壺・高杯)		古墳時代 中期	
下味野 41号墳	(方形) 長辺 11.48 短辺(10.6) 高さ 2.38	N-78°-W	—	—	—	—	—	土 師 器 (赤彩陶部) 弥生土器(底部) 磨石	土 師 器 (赤彩陶部) 弥生土器(底部) 磨石		古墳時代 中期	
下味野 42号墳	円形 直径 9.08 高さ 0.76	N-70°-W	(土壙墓)	—	隅丸長方形	3.32×1.61×0.29	N-62.5°-W	土 師 器 (壺・赤彩高杯) 磨製石斧 弥生土器(甕)	土 師 器 (壺・赤彩高杯) 磨製石斧 弥生土器(甕)		古墳時代 中期中葉	
下味野 43号墳	楕円形 長軸 11.37 短軸 10.83 高さ 1.09	N-60.7°-W	箱式石棺	(内寸) 1.84×0.41×0.36	隅丸長方形	3.11×1.43×0.84	N-63°-W	鉄剣・鉄鏃	土 師 器 (赤彩高杯) 弥生土器 (壺肩部・底部)		古墳時代 中期	
下味野 44号墳	楕円形 長軸 11.80 短軸 10.91 高さ 1.32	N-56.8°-W	木棺直葬	2.64×0.66×0.40	隅丸長方形	2.99×1.50×0.51	N-61.5°-W	鉄鏃	須 恵 器 (高杯・口縁部) 弥生土器 (底部) 砥石		古墳時代 後期	
SX-01	—	—	木棺直葬	3.03×0.78×—	不整長方形	4.52×2.32×0.72	N-76°-W	須恵器(有蓋高杯) 刀子・鏃・不明鉄製品 砥石	須恵器(有蓋高杯) 刀子・鏃・不明鉄製品 砥石		古墳時代 中期中後半	

出土遺物観察表

—記載事項について—

挿図番号 遺構ごとの実測番号、図版番号、付図内表示番号を統一して示す。

器 種 土器は形態的特徴から、壺・甕・高杯・低脚杯等の従来の呼称を用いた。部分名称の場合は()で表示。石製品は形態、使用痕の観察から、砥石・磨石等の名称を用いた。

法 量 土器……口径：① 底径：② 最大胴径：③ 器高：④をcmで示す。なお、()は復元値。〈 〉は推定値。ただし目安としての径の残存が7分の1以下を推定値とした。

石製品・鉄製品……長さ：L 幅：W 厚さ：T 径：Dをcmで示す。()は現存値。

形態・手法の特徴 主要部分について記述した。土器については口縁部の内外面ヨコナデ調整を特別な場合以外は省略した。

胎土・焼成・色調

① 胎土 砂粒の大きさとその量を示す。

② 焼成 良好(堅緻)・良(普通)・やや不良(やや軟)・不良(軟)の4段階に分けた。

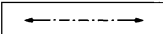
③ 色調 主として外面の色調を示すが、内外面が異なる場合(外)・(内)で表示。

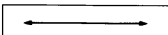
備 考 赤彩、黒斑、釉、糊痕、煤・炭化物付着の有無等を記載。石製品等は重量を記載。()は現存値。

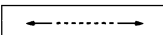
遺物登録番号 出土地を調査区分の通し番号で表示。遺物台帳登録番号。

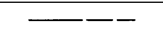
—遺物実測図中における表示—

須恵器：黒塗り

石製品実測図加工範囲： 

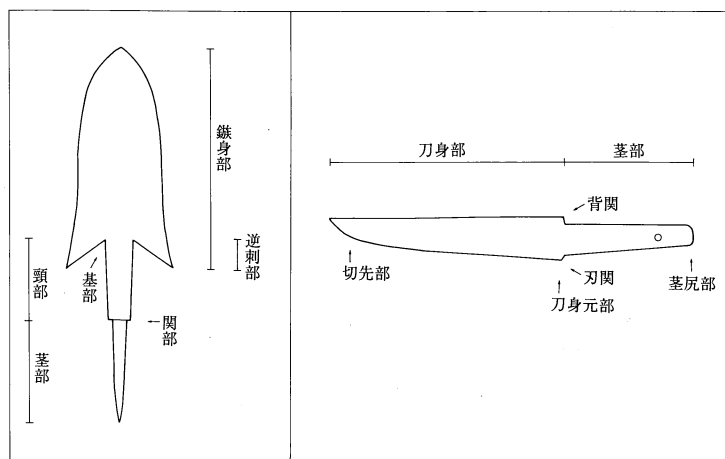
遺物使用痕範囲： 

石製品実測図磨滅範囲： 

土器実測図のヨコナデ調整による稜： 

—土器の部分名称について— 部位名称を略す場合は頭文字を()で表示。

—鉄製品 部分名称—



下味野40号墳 (第11図、図版24)

(単位 cm)

挿図番号	器種	法量(cm) ①口径 ②底径 ③最大胴径 ④器高	形態・手法の特徴		①胎土 ②焼成 ③色調	残存状況	備考	遺物登録番号
46	壺	① (4.8) ③ (7.6)	小型壺。口縁部は直線的に開き端部は丸い。体部は中位で最大径をもつ。	外) 体部ハケ目後ナデ。 内) 口縁部ハケ目。体部丁寧なヘラ削り。	① 1mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③橙褐色	(口) 1/4 (体) 1/2		10
47	高杯	② 8.7	脚柱部は緩やかに開き裾部でハの字状に開く。	外) 杯部から接合部までハケ目調整後杯部をナデ。脚部は縦方向の工具ナデ後裾部ナデ 内) 杯部剥落不明瞭。脚部上半絞り目をナデ消す。下半剥落するがハケ目。成形時の指頭圧痕。脚柱基部中心軸に小円棒状刺突を観察。	① 1mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	(杯) 1部 (脚上半) 1 (脚下半) 3/4	赤彩 粉痕	11

下味野41号墳 (第13図、図版24)

1	底部	② 5.6	平底。	外) 体部ヘラ磨き、底面ナデ。 内) 底部ナデ、砂の動きが残る。	① 1mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	(底) 1	黒斑有	3
2	脚部	② (10.4)	脚部は外反して開く。端部は面をもつ。	外) 風化するがハケ目後裾部横方向のナデ。 内) 剥落不明瞭。	① 1mm以下の砂粒を多く含む2mm粒有 ②良 ③淡橙褐色	1/4	赤彩	1
3	磨石	L 10.0 W 6.9 T 3.3	磨製石斧1/2片基部側を転用。	使用痕1面。	③灰色		367.0g	2

下味野42号墳 (第15図、図版25)

1	甕	① (12.5) ③ (19.4)	単純口縁。口縁部は外傾して開き端部で内に肥厚し端面をもつ。体部は丸味をもつ。	外) 体部ハケ目。残存肩部にヘラ状工具による刺突文1を観察する。 内) 肩部ナデ。体部ヘラ削り。	① 2mm以下の砂粒を多く含む3mm粒有 ②やや不良 ③黄褐色	1/6	煤付着	3 15 16
2	高杯	① <16.8>	口縁部は外反して開き端部で凸面をもつ。	内外) 剥落不明瞭。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	1/8	赤彩	4
3	高杯		脚柱部は緩やかに開く。	外) 杯部ハケ目、脚部ナデ後接合部ハケ目。 内) 杯部剥落不明瞭。脚部絞り目を軽くナデ消す。	① 2mm以下の砂粒を多く含む4mm粒有 ②良 ③橙色	(脚柱) 1	赤彩	8
4	甕	① <18.0>	縁上口縁。口縁端面に6条の櫛形平行沈線を施す。	内) 体部剥落不明瞭。	① 2mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③橙褐色	(口) 1/9		11
5	磨製石斧	L 7.8 W 4.4 T 1.4	扁平片刃石斧。平面形は基部から刃部方向へと幅を増し、刃部先端は弧状を呈する。	刃こぼれする。	③淡灰色	ほぼ完存	(79.0)g	14

下味野43号墳 (第22・23図、図版26)

3	高杯		有段の杯部。	外) 段稜部ヨコナデ。他不明瞭。 内) ナデ?	① 1mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③淡橙褐色	1/7	赤彩	1
---	----	--	--------	----------------------------	-----------------------------	-----	----	---

挿図 番号	器 種	法量 (cm) ①口径 ②底径 ③最大胴径 ④器 高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴		①胎 土 ②焼 成 ③色 調	残存状況	備 考	遺物 登録 番号
4	壺 (肩部)		肩部は頸部からナデ肩状に張出す。	外) 頸部に指爪痕を巡らし上部を横方向のナデ。 内) 丁寧なナデ。	①2～3mmの砂粒を含む ②良 ③褐色	1/4		3 14 27 29
5	(底部)	② (9.4)	厚手の平底。	外) 丁寧なナデ。 内) 不定方向のナデ。	①1～2mm以下の砂粒を多く含む3、4mm粒有 ②良 ③橙色	1/4		15

下味野44号墳 (第25図、図版26)

4	須 惠 器	① (13.5)	口縁部は直線的に開き外端部をつまみ凹端面とする。口縁部と底部を分ける稜は鋭さに欠ける。	内外) ヨコナデ。 外) 口縁部と体部を分ける稜は1条の沈線により稜を突出させる。	①0.5mmの砂粒を含む ②良 ③灰色	1/7	自然釉	30
5	須 惠 器 高 杯	② 10.0	脚部は大きく開き裾部で段を突出させた後端面をもつ。	内外) 脚部ヨコナデ。後接合内面ナデ。 内) 杯部ヨコナデ後ナデ。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む3、4mm粒有 ②良 ③灰色 青灰色	(脚上半) 1 (脚下半) 1/3		17
6	須 惠 器 (口縁部)	① (9.6)	口縁部は直線的に開き端部で外方に摘み出して凹端面とする。口縁部と頸部を分ける稜は鋭さに欠ける。	内外) ヨコナデ。 外) 頸部に10条の波状文を施す。 内) 頸部接合時のナデ。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む2mm粒有 ②良 ③灰色 青灰色	1/4	自然釉	18
7	(底部)	② (9.2)	平底。体部は直線的に外傾して立ち上がる。	外) 底部へラ磨き後下位軽いナデ。底面丁寧なナデ。 内) 風化剥落するがナデ。	①1mm以下の砂粒を多く含む4mm粒有 ②良 ③黄褐色	1/4	煤付着	34
8	砥 石	L 6.9 W 4.4 T 1.3		全面使用痕。使用頻度が高い。1面の中心に長軸方向の溝1条と端部寄りに2条の浅い溝を観察する。	③灰白色	ほぼ完存	45g	35

SX-01 (第29図、図版27・28)

1	須 惠 器 有蓋高杯 蓋	① 13.2 ④ 5.8	つまみは宝珠形。天井部は丸みもち口縁部は直下へと下り凹端面をもつ。天井部と口縁部を分ける稜は鋭さに欠けるが突出する。	内外) ヨコナデ。 外) 天井部3/4を時計廻りのへら削り。カキ目痕。つまみ貼付後周縁をヨコナデ。 内) 天井部不定方向の丁寧なナデ。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③灰色	ほぼ完形	自然釉	4 5
2	須 惠 器 有蓋高杯	① 11.2 受部 13.7	杯底部は丸みをもつ。受部は体部から屈曲して外上方へ伸びる。立上りは内傾して上方へ伸び端面をもつ。	内外) ヨコナデ。 外) 杯下半はへら削り後脚部接合時のヨコナデにより削り方向不明瞭。脚部との接合部を強くカキ目とする。 内) 杯底部は不定方向の丁寧なナデ。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③灰色	(杯) 1		4
3	砥 石	L 11.2 W 3.1 T 0.8	扁平。平面形は長方形形状。一端部に紐孔1をもつ。	長軸4面に使用痕。両端部は成形痕。片面穿孔。	③淡灰色 灰白色	完存	52g	1
4	砥 石	L (8.2) W 2.3 T 1.1	長軸両端部折れ。横断面は不整形形状。	長軸4面に使用痕。	③淡黄色	全面鉄分付着	(32.0)g	1

下味野古墳群 鉄製品(1)

(単位 cm)

出土地	挿図番号	器種	全長	法 量						形態の特徴	残存状況	備考	遺物登録番号
				刀 部		茎 部		断 面					
				長さ	断面形	長さ	断面形	計測部位	幅				
下味野40号墳主体部	第6図4	鉄 剣	72.30 目釘孔径 0.40	58.30	レンズ状	14.00	レンズ状	剣身元部 3.90 剣身中央部 3.30 切先部 3.00 茎中央部 2.28	0.70 0.60 0.50 0.50	遺存良好。 剣身は元部から切先部に向けて幅、厚を徐々に減らす。 鞘木質が遺存するが中心軸に明瞭な鑄は観察されない。 直角両側から茎尻部へと続く。 茎部に目釘孔2。	完存	460.0g 木質痕 巻締痕	15 17
	第6図5	刀 子	(6.70)	(3.35)	二等辺三角形	(3.35)	長方形	刀身中央部 0.25 茎中央部 0.20	1.10 0.28	錆化する。 刃側をもつ。	両端部欠	(6.7)g 木質痕	16
下味野40号墳墳丘外	第12図48	鉄 剣	40.00	27.85	レンズ状	12.15	長方形	剣身元部 3.00 剣身中央部 2.90 切先部 2.30 茎中央部 2.00 茎尻部 1.20	0.45 0.45 0.30 0.45 0.25	剣身に比して茎部が長く剣身に鑄を持たない。 剣身は元部から切先部に向けて幅、厚を徐々に減らす。 目釘孔2。	ほぼ完存	172.9g	8
下味野43号墳主体部	第19図1	鉄 剣	31.30	23.50	レンズ状	7.80	長方形	剣身元部 2.10 剣身中央部 2.00 切先部 1.45 茎中央部 1.25 茎尻部 1.00	(0.45) 0.45 0.40 0.22 0.25	錆化する。 剣身は元部から切先部に向けて幅、厚を徐々に減らす。 中心軸に明瞭な鑄は観察されない。 茎部に目釘孔2の可能性。	完存	86.2g	33 35
	第19図2	鉄 鉞	33.30	14.20	菱形	19.10	袋閉環状	鉞身元部 1.30 鉞身中央部 1.70 切先部 3.00 袋中央部 2.40 袋端部 3.10	0.70 1.00 1.70 0.30 0.30	錆化する。 鉞身は袋部より短かく身元部から先端部に向けて幅、厚を極端に減らす。両面の鑄は鋭い。 鉞身側部から斜行して幅を減らし角張りを落しながら袋部へと続く。 袋部は突合せ端部方向へと広がり環状となる。端部は突合せ部と対面の2方向でV字状の切り込みをもつ。	完存	354.0g	34
SX-01	第29図5	刀 子	(5.80)	(5.80)	二等辺三角形			刀身元部 0.35 刀身中央部 0.28	2.50 1.42	錆化する。 背、刃側で関部をもつ。	刀身部	(8.9)g 木質痕	2
	第29図6	鑿	(21.55)				方形	刃部 1.00 中央部 1.00 茎端部 0.60	1.00 0.58 0.60	錆化する。 断面長方形の基部は棒状を呈し刃部方向に向けて幅を一定とし厚を減らす。 刃部は一面から斜めに鍛造して片刃を造りだす。	茎端部欠	(59.7)g 木質痕 7と錆着	6
	第29図7	不明鉄製品	(8.45)					端部	0.37 0.30	0.37 0.30	錆化する。 断面方形で細長い棒状。一方に向けて幅、厚を減らす。	1部	6と錆着

下味野古墳群 鉄製品(2)

(単位 cm)

出土地	挿図番号	器種	全長	鎌 身 部			頸 部		茎 部		形態の特徴	残存状況	備考	遺物登録番号	
				①鎌身部 ②頸部 ③茎部	平面形	断面計測部位	逆 刺	闊 部 平面形	断面計測部位	断面形					断面計測部位
					断面形	W T 幅 厚さ		逆刺長	断面形						W T 幅 厚さ
下味野40号墳主体部	第6図6	鉄 鎌	(14.65) ① 6.90 ② 3.20 ③ (4.55)	長三角形	中央部 W 2.60 T 0.20		山形	中央部 W 1.15 T 0.20	方形	尖端部 W 0.20 T 0.25	錆化する。 鎌身先端部からふくらをもち僅かに幅を増す。	茎端部欠	(21.4)g 木質痕	23	
	第6図7	鉄 鎌	(12.85) ① 7.15 ② 5.30 ③ 2.20	腸扶柳葉形 平造	中央部 W 2.10 T 0.20	逆刺 1.80	台形 長方形	中央部 W 0.70 T 0.28	方形	中央部 W 0.40 T 0.30	錆化する。 鎌身先端部からふくらをもち中央部ではほぼ一定の幅とする。	尖端部欠	(14.7)g	19 21 36	
	第6図8	鉄 鎌	(13.10) ① 8.90 ② 2.20 ③ (4.00)	腸扶柳葉形 平造	中央部 W 2.90 T 0.20	逆刺 2.03	山形 長方形	基部 W 1.10 T 0.20	長方形	中央部 W 0.40 T 0.10	錆化する。 鎌身中央部で僅かに幅を減らす。	一部 欠	8~10錆着 (58.8)g 木質痕	22 25	

出土地	挿図番号	器種	全長 ①鍔身部 ②頸部 ③基部	鍔身部			頸部		茎部		形態の特徴	残存状況	備考	遺物登録番号
				平面形	断面計測部位	逆刺	闊部平面形	断面計測部位	断面形	断面計測部位				
				断面形	W T 幅 厚さ	逆刺長	断面形	W T 幅 厚さ						
下味野 40号墳 主体部	第6図 9	鉄 鍔	(14.35) ①(9.80) ② 2.90 ③ 3.80	腸袂 長三角形 平造	中央部 W 2.47 T 0.20	逆刺 2.26	闊部 平面形 長方形	基部 W 0.95 T 0.25	方形	中央部 W 0.45 T 0.25	錆化する。 鍔身先端部からふくらをもち逆 刺方向へ幅を増す。	完存		25
	第6図 10	鉄 鍔	(14.55) ① 2.80 ②10.70 ③(1.05)	柳葉形 片丸造	基部 W 0.90 T 0.20		角 長方形	基部 W 0.62 T 0.35	方形	尖端部 W 0.25 T 0.25	長頸鍔。錆化する。	茎端部欠	木質痕	25 28 32 35
	第9図 11	鉄 鍔	(15.00) ①(2.50) ②(9.50) ③(2.80)	柳葉形 (平造)	中央部 W 1.20 T 0.23		角 長方形		方形	中央部 W 0.38 T 0.25	長頸鍔。錆化する。	両端部欠	(11.6)g 木質痕	20 27
	第9図 12	鉄 鍔	①(2.05)	柳葉形 (平造)	中央部 W 0.90 T 0.10							鍔身部	(1.0)g	18
	第9図 13	鉄 鍔	(13.20) ②11.70 ③ 1.15				角 長方形	上端部 W 0.55 T 0.30	方形	中央部 W 0.25 T 0.25	長頸鍔。錆化する。	頸基部	(11.8)g	30
	第9図 14	鉄 鍔	(13.70) ①10.10 ②(3.65)				台形 長方形	中央部 W 0.50 T 0.25	方形	中央部 W 0.40 T 0.28	長頸鍔。錆化する。	頸基部	(11.0)g 木質痕 巻縮痕	24 31 35
	第9図 15	鉄 鍔	(7.10) ②(4.15) ③ 2.95				角 長方形	中央部 W 0.60 T 0.30	方形	尖端部 W 0.25 T 0.25	錆化する。	頸基部	16~19錆 着 (51.8)g 16・17の 上面から 出土	34
	第9図 16	鉄 鍔	(15.80) ①<2.15> ②10.65 ③(3.00)	三角形	元部 W 1.10		角 長方形	基部 W 0.75 T 0.35	方形	中央部 W 0.30	長頸鍔。錆化する。 頸部上位に片逆刺をもつ。 逆刺長1.55cmを測る。	茎端部欠	木質痕 巻縮痕	29 34
	第9図 17	鉄 鍔	(14.05) ①(0.85) ②(12.00) ③(1.80)	(三角形) 平造	元部 W 1.20		台形 長方形	中央部 W 0.50 T 0.30	方形	中央部 W 0.40	長頸鍔。錆化する。 鍔身部から斜行して頸部へ続 く。	茎端部欠		34
	第9図 18	鉄 鍔	<14.60>	不明瞭			台形 長方形	中央部 W 0.60 T 0.30	方形	中央部 W 0.35	長頸鍔。錆化する。	茎端部欠		34
	第9図 19	鉄 鍔	②(4.20)				長方形	一端部 W 0.60 T 0.30			錆化する。	頸部		34
	第9図 20	鉄 鍔	(15.30) ①(2.40) ②10.05 ③(2.82)	三角形			角 長方形	闊部 W 0.63 T 0.25	方形	中央部 W 0.35 T 0.30	長頸鍔。錆化する。 鍔身部から斜行して頸部へ続 く。	茎端部欠	20~23錆 着 (63.4)g 木質痕	33 35 36
	第9図 21	鉄 鍔	(7.80) ① 6.40 ② 2.70 ③(0.80)	腸袂 三角形 平造	先端部 W 2.09 T 1.00	逆刺 2.15	角 長方形	中央部 W 0.92 T 0.18	長方形		錆化する。 鍔身先端部からふくらをもち逆 刺方向へ幅を増す。	茎部 欠		24 33
	第9図 22	鉄 鍔	(14.25)	不明瞭	中央部 W 1.30 T 0.10		台形 長方形	中央部 W 0.70 T 0.30	長方形	中央部 W 0.48 T 0.30	長頸鍔。錆化する。	茎端部欠	木質痕	33 35

出土地	挿図番号	器種	全長 ①鍍身部 ②頸部 ③基部	鍍身部			頸部		茎部		形態の特徴	残存状況	備考	遺物登録番号
				平面形	断面計測部位	逆刺	闊部平面形	断面計測部位	断面形	断面計測部位				
				断面形	W T 幅 厚さ	逆刺長	断面形	W T 幅 厚さ						
下味野 40号墳 主体部	第9図 23	鉄 鍍	(13.10) ① 2.30 ② 9.25 ③ (1.60)	柳葉形	先端部 W 0.80 T 0.20		台形 長方形	基部 W 0.50 T 0.30	方形 下位 W 0.38 T 0.30	長頸鍍。錆化する。	茎端部欠		33 35	
	第10図 24	不明 鉄製品	(6.80)		中央部 W 1.20 T 0.10					錆化する。平造り両刃をもつ。 先端部で刃幅1.2cm、厚0.1cmを測る。		10の片と 24・25、 27～36錆 着 (146)g 29・32の 上面に錆 着	35	
	第10図 25	鉄 鍍	②(2.60)				長方形			錆化する。	頸部片	上面に逆 刺部が錆 着	35	
	第10図 26	鉄 鍍	③(1.90)						方形状 上端部 W 0.30 T 0.24	長頸鍍。錆化する。	基部	(1.0)g 29の上面 に錆着	35	
	第10図 27	鉄 鍍	①(2.55)		中央部 W 1.25 T 0.25 (平造)					錆化する。	鍍身部	33・34の 上面に錆 着	35	
	第10図 28	鉄 鍍	14.1 ②<7.1> ③ 4.15	不明瞭 平造			角 長方形	闊部 W 0.75 T 0.30	長方形 基部 W 0.55 T 0.30	長頸鍍。錆着して鍍身部不明瞭。頸基部に片逆刺をもつ。	完存	木質痕 上面に10 の闊部片 錆着	35	
	第10図 29	鉄 鍍	<13.20> ③(1.30)	不明瞭			不明瞭 長方形	中央部 W 0.60 T 0.30	方形 端部 W 0.30 T 0.30	長頸鍍。錆化する。	茎端部欠	上面に26 と逆刺片 が錆着	35	
	第10図 30	鉄 鍍	<15.00> ③(1.30)	不明瞭			角 長方形	中央部 W 0.60 T 0.35	長方形 端部 W 0.40 T 0.38	長頸鍍。錆化する。	茎端部欠		35	
	第10図 31	鉄 鍍	<13.00> ③(0.20)	不明瞭			角 長方形	中央部 W 0.60 T 0.40	基部 W 0.55 T 0.31	長頸鍍。錆化する。	基部 欠		35	
	第10図 32	鉄 鍍	14.80 ①(2.30) ②(9.00) ③ 3.50	不明瞭 平造			台形 長方形	闊部 W 0.70 T 0.35	方形状 先端部 W 0.25 T 0.15	長頸鍍。錆着して鍍身部不明瞭。	先端部欠		35	
	第10図 33	鉄 鍍	<12.40>	不明瞭				中央部 W 0.61 T 0.32			長頸鍍。錆化する。	基部 欠		35
	第10図 34	鉄 鍍	<13.80>	不明瞭			不明瞭 長方形		方形 端部 W 0.21 T 0.21	長頸鍍。錆化する。	茎端部欠		35	
	第10図 35	鉄 鍍	<14.40>	不明瞭			不明瞭 長方形	中央部 W 0.60 T 0.30	長方形 先端部 W 0.20 T 0.15	長頸鍍。錆化する。	先端部欠		35	
	第10図 36	鉄 鍍	(3.40) ②<1.80> ③<1.60>				不明瞭 長方形	端部 W 0.90 T (0.35)	端部 W 0.40 T 0.30	錆化する。	頸基部	32～35の 下層に錆 着	35	

出土地	挿図 番号	器種	全長 ①鎌身部 ②頸部 ③茎部	鎌身部			頸部		茎部		形態の特徴	残存状況	備考	遺物 登録 番号
				平面形	断面計 測部位	逆刺	闊部 平面形	断面計 測部位	断面形	断面計 測部位				
				断面形	W T 幅 厚さ		逆刺長	断面形						
下味野 40号墳 主体部	第10図 37	鉄 鎌	③(2.60)						長方形	上部部 W 0.40 T 0.30	錆化する。	茎部	(1.0)g 36の下層 に錆着 (最下層)	35
	第10図 38	鉄 鎌	③(4.05)						不整形	尖端部 W 0.15 T 0.15	錆化する。遺存部は振じりを有する。	(茎部)	(1.4)g	24
	第10図 39	鉄 鎌	③(2.85)						不整形	中央部 W 0.30 T 0.35	錆化する。茎部は振じりを有する。	茎部	(1.2)g	24
	第10図 40	鉄 鎌	③(3.85)						長方形	中央部 W 0.35 T 0.25	錆化する。	茎部	(1.5)g	24
	第10図 41	鉄 鎌	③(2.60)						長方形	中央部 W 0.45 T 0.30	錆化する。	茎部	(0.9)g 木質痕	24
	第10図 42	鉄 鎌	③(2.55)						長方形	中央部 W 0.50 T 0.25	錆化する。	茎部	(1.2)g 木質痕	24
	第10図 43	鉄 鎌	③(2.39)						長方形	中央部 W 0.40 T 0.30	錆化する。	茎部	(0.8)g 木質痕	24
	第10図 44	鉄 鎌	③(2.15)						長方形	中央部 W 0.45 T 0.30	錆化する。	茎部	(0.6)g 木質痕	24
	第10図 45	不明 鉄製品	③(2.15)						楕円形	中央部 W 0.18 T 0.15	錆化する。	尖端部	(0.6)g 木質痕	24
下味野 44号墳 主体部	第24図 1	鉄 鎌	①(4.00)	片刃形	中央部 W 0.15 T 0.89						錆化する。	鎌身部	(1.8)g	37
	第24図 2	鉄 鎌	②(6.25)	二等辺 三角形					上部部 W 0.52 T 0.22		錆化する。	頸部	(8.0)g	32
	第24図 3	鉄 鎌	(6.00)						上部部 W 0.55 T 0.45		錆化する。		(6.6)g	33

下味野40号墳 主体部 出土玉類(第5図、図版6)

挿図 番号	種類	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)		穿孔	色 調	重量 (g)	材質	残存 状況	備考	遺物 登録 番号
1	勾 玉	18.8	7.6	1.8	1.6	両面	茶褐色、明褐色	2.20	メノウ	完存	C字形	38
2	小 玉	2.7	5.1	1.0			濃青色 半透明	0.10	ガラス	完存	気泡有	42
3	小 玉	4.2	4.6	1.6			青 色 半透明	0.10	ガラス	完存	気泡有	39
—	小 玉	(3.5)					淡青色 半透明	(0.06)	ガラス	破片	気泡有	43
—	小 玉	(3.5)					淡青色 半透明	(0.05)	ガラス	破片	気泡有	43
—	小 玉	(3.0)					青 色 半透明	(0.05)	ガラス	破片	気泡有	40
—	小 玉	(2.9)					青 色 半透明	(0.05)	ガラス	破片	気泡有	40

圖 版



調査地遠景（南西上空から）平成12年9月撮影



調査地全景（北西から）

図版 2



40号墳 墳丘
検出状況（南西から）



40号墳 主体部内
遺物出土状況（北東から）

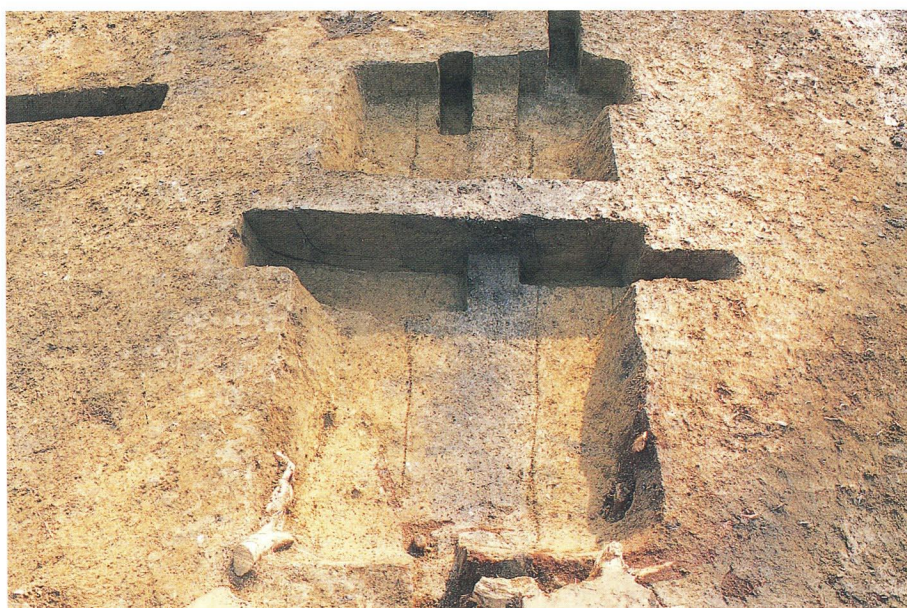


40号墳 主体部内
遺物出土状況（東から）

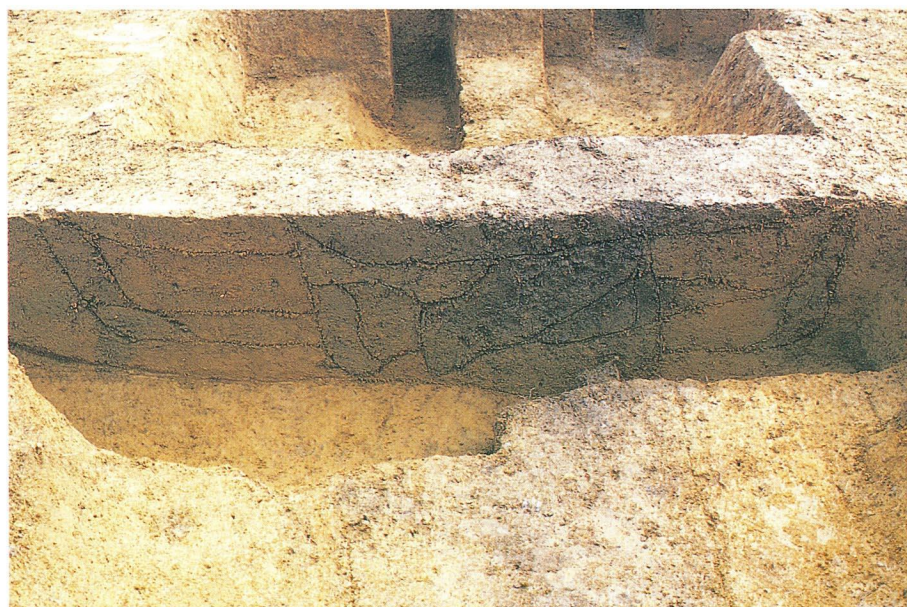
44・43号墳 周溝
検出状況（北西から）



44号墳 主体部木棺痕跡
検出状況（北西から）



44号墳 主体部断面
（北西から）



図版 4



43号墳 主体部内
遺物出土状況（北西から）



43号墳 主体部断面
（北西から）

43号墳 主体部
検出状況（北西から）



43号墳 主体部断面
（北西から）





4

40号墳
主体部 出土遺物 (1)



48

40号墳
墳丘外 出土遺物 (1)



1

43号墳 主体部 出土遺物 (1)



2



1

40号墳 主体部 出土遺物 (2)



2・3

40号墳 調査前
(北西から)



40号墳 北東裾断面
(南東から)



40号墳 北西裾断面
(北東から)



図版 8



40号墳 墳丘
検出状況（北西から）



40号墳 主体部断面
（北西から）



40号墳 主体部断面
（北東から）

40号墳 主体部
検出状況（北西から）



40号墳 主体部内
遺物出土状況（北東から）



40号墳 完掘状況
（北西から）





41・42号墳 調査前
(北西から)



41号墳 北裾断面
(北東から)



41号墳 西裾断面
(北から)

41号墳 墳丘
検出状況（西から）



41号墳 墳丘
検出状況（北から）



41号墳 東西墳丘断面
（北から）





42～44号墳 調査前
(東から)



41・42号墳 墳丘
検出状況 (北西から)



42号墳 東裾断面
(南西から)

42号墳 主体部断面
(北東から)



42号墳 主体部
検出状況 (北東から)



42号墳 周溝内
遺物出土状況 (北西から)





42～44号墳 調査前
(北西から)



43号墳 墳丘
検出状況 (南東から)

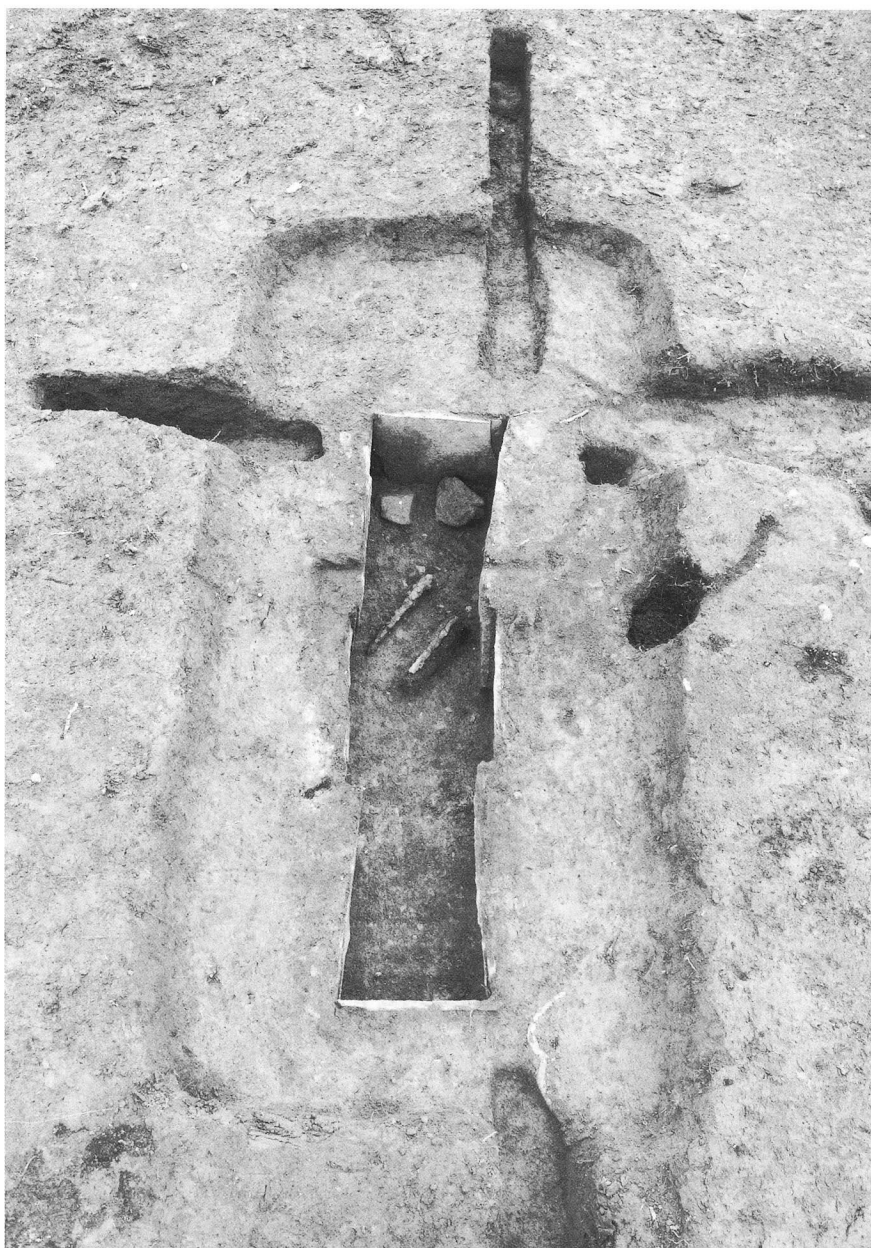


43号墳 墳丘
検出状況 (南西から)

43号墳 主体部
検出状況（北東から）



43号墳 主体部内
遺物出土状況（北西から）





43号墳 主体部内
遺物出土状況（北西から）



43号墳 主体部内
遺物出土状況（北西から）

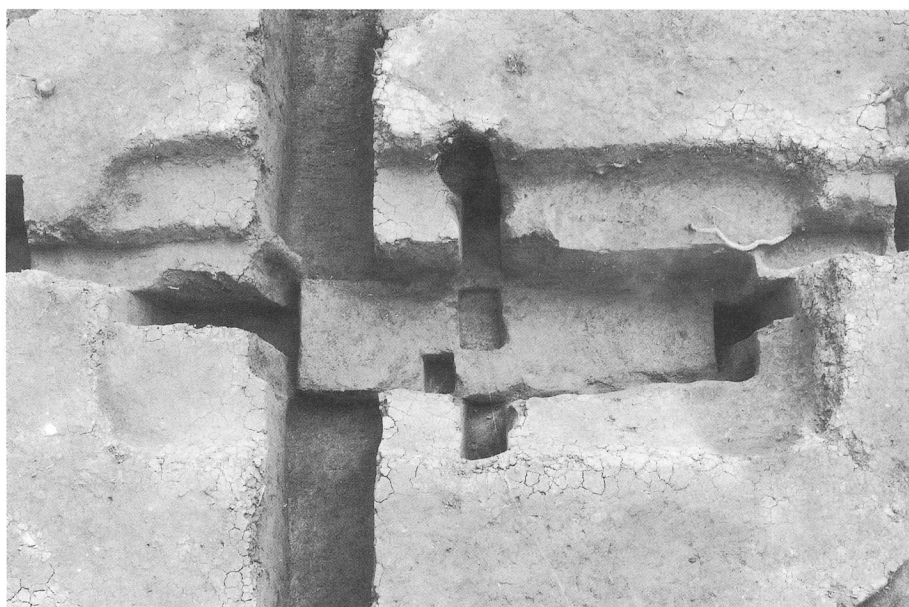
43号墳 主体部断面
(北西から)



43号墳 完掘状況
(南東から)



43号墳 主体部
完掘状況 (北東から)





41～44号墳 調査前
(北西から)



44～42号墳 周溝
検出状況 (北西から)



44号墳 西裾断面
(南西から)

44号墳 東裾断面
(南西から)



44号墳 墳丘
検出状況 (南西から)

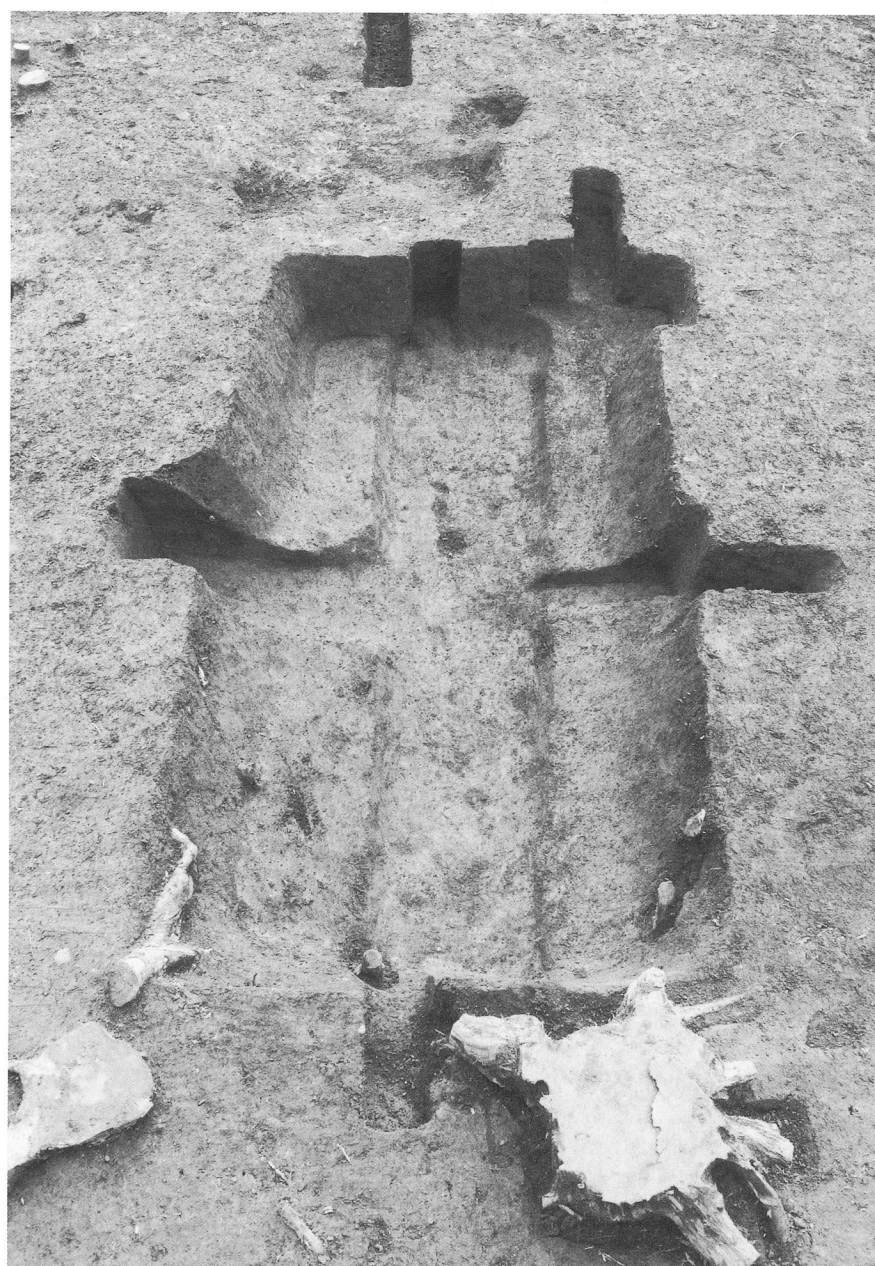


44号墳 完掘状況
(南東から)



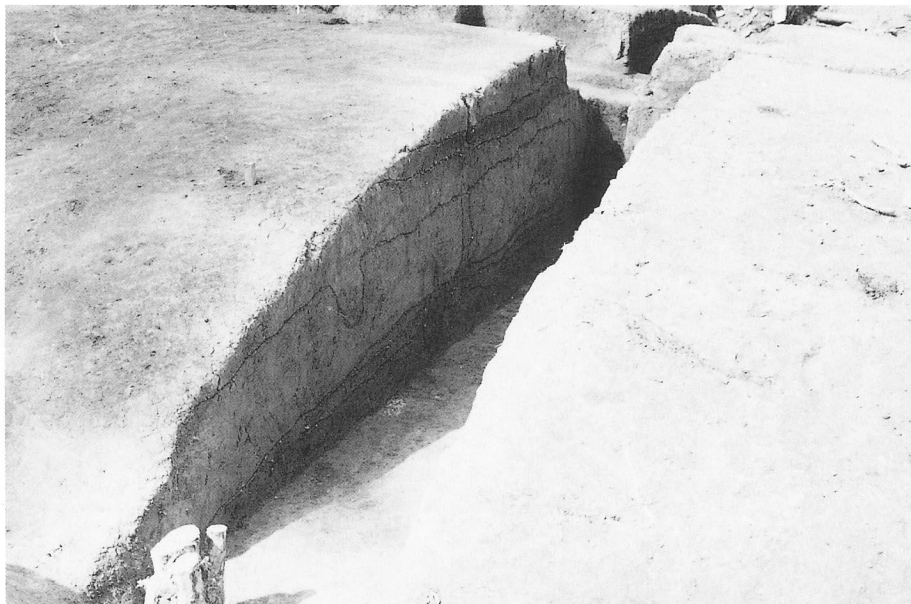


44号墳 主体部内
遺物出土状況（南東から）



44号墳 主体部
検出状況（北西から）

44号墳 南側墳丘断面
(南から)



44号墳 北側墳丘断面
(北東から)



SX-01
検出状況 (北東から)





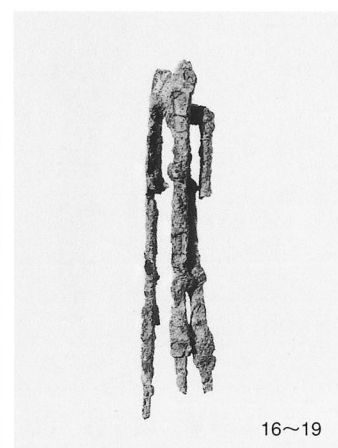
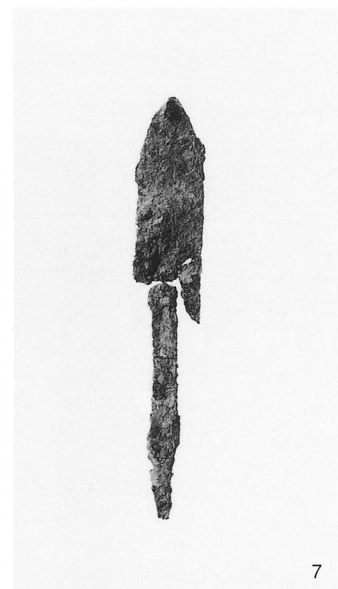
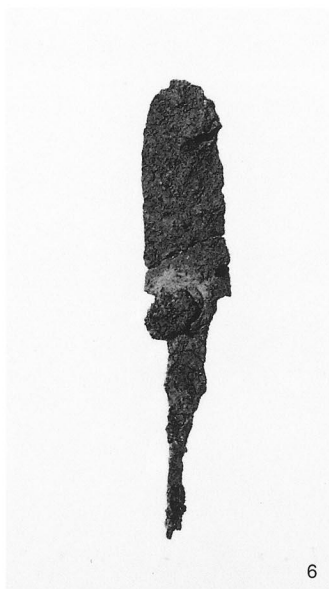
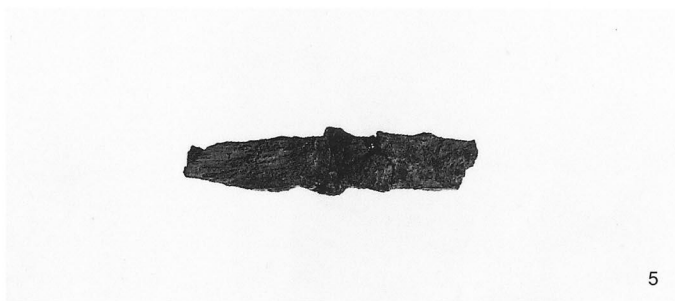
SX-01内
遺物出土状況（北西から）



SX-01内
遺物出土状況（北西から）



SX-01 完掘状況
（南東から）



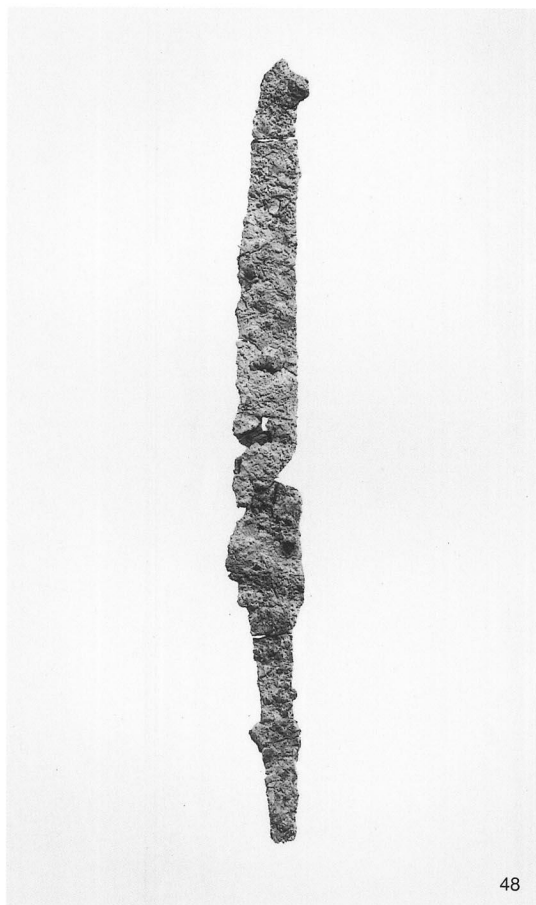
40号墳 主体部 出土遺物 (3)



46



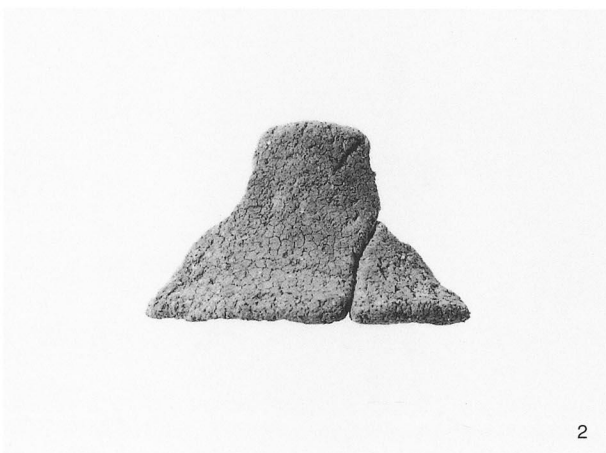
47



48



1



2

40号墳 墳丘外 出土遺物 (2)

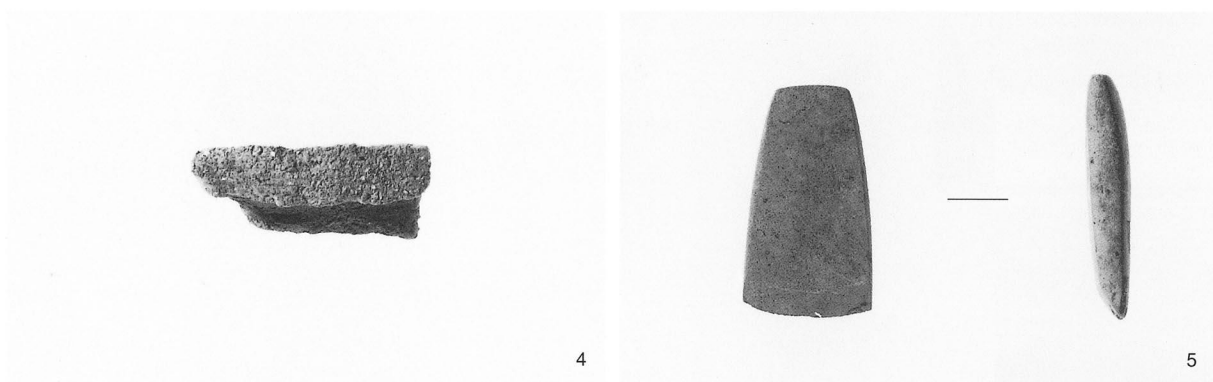


3

41号墳 表土・盛土・墳丘外 出土遺物



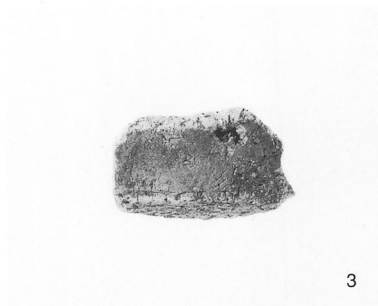
42号墳 表土・墳丘・周溝 出土遺物



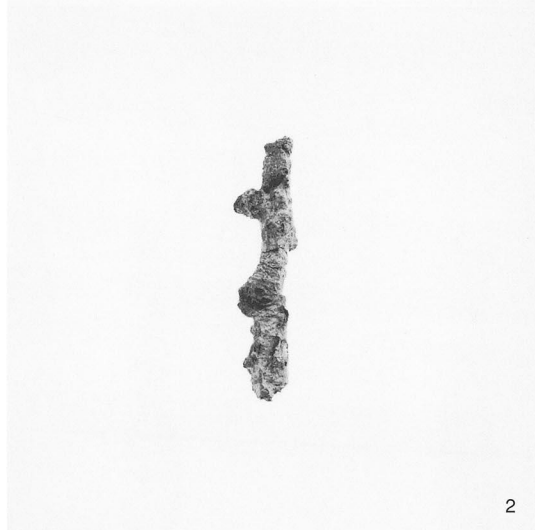
42号墳 墳丘外 出土遺物



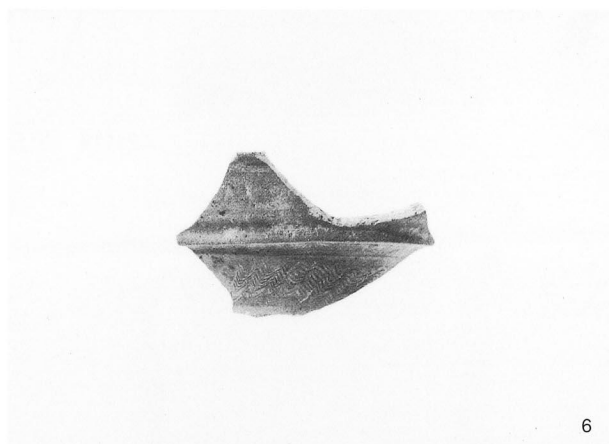
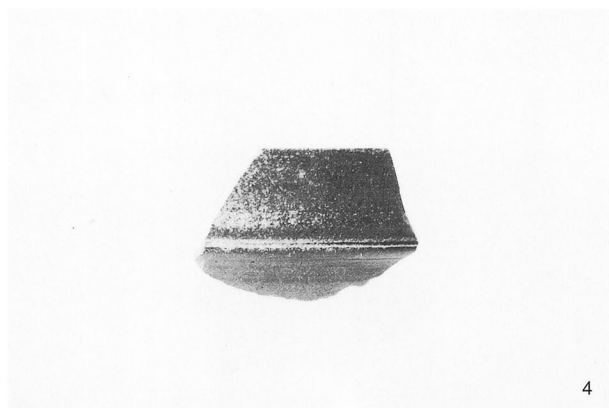
43号墳 主体部 出土遺物 (2)



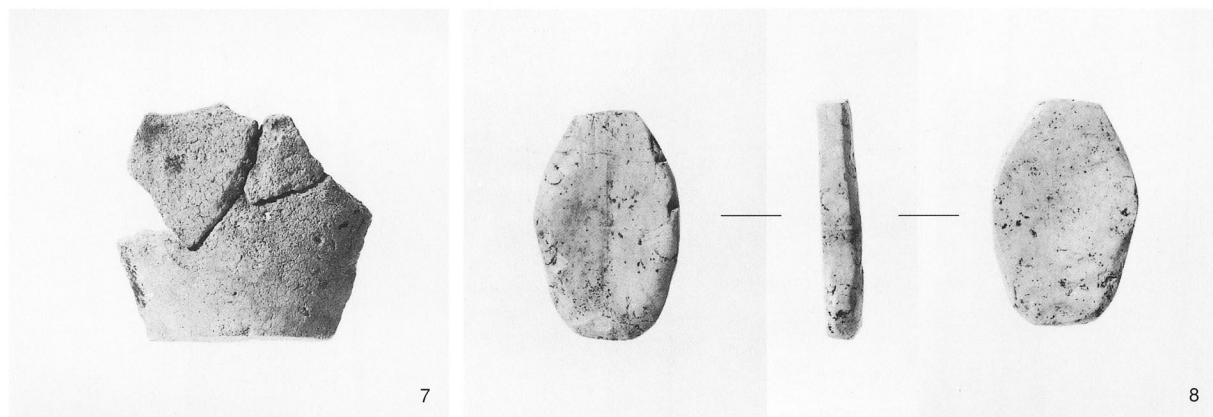
43号墳 周溝・墳丘肩部 出土遺物



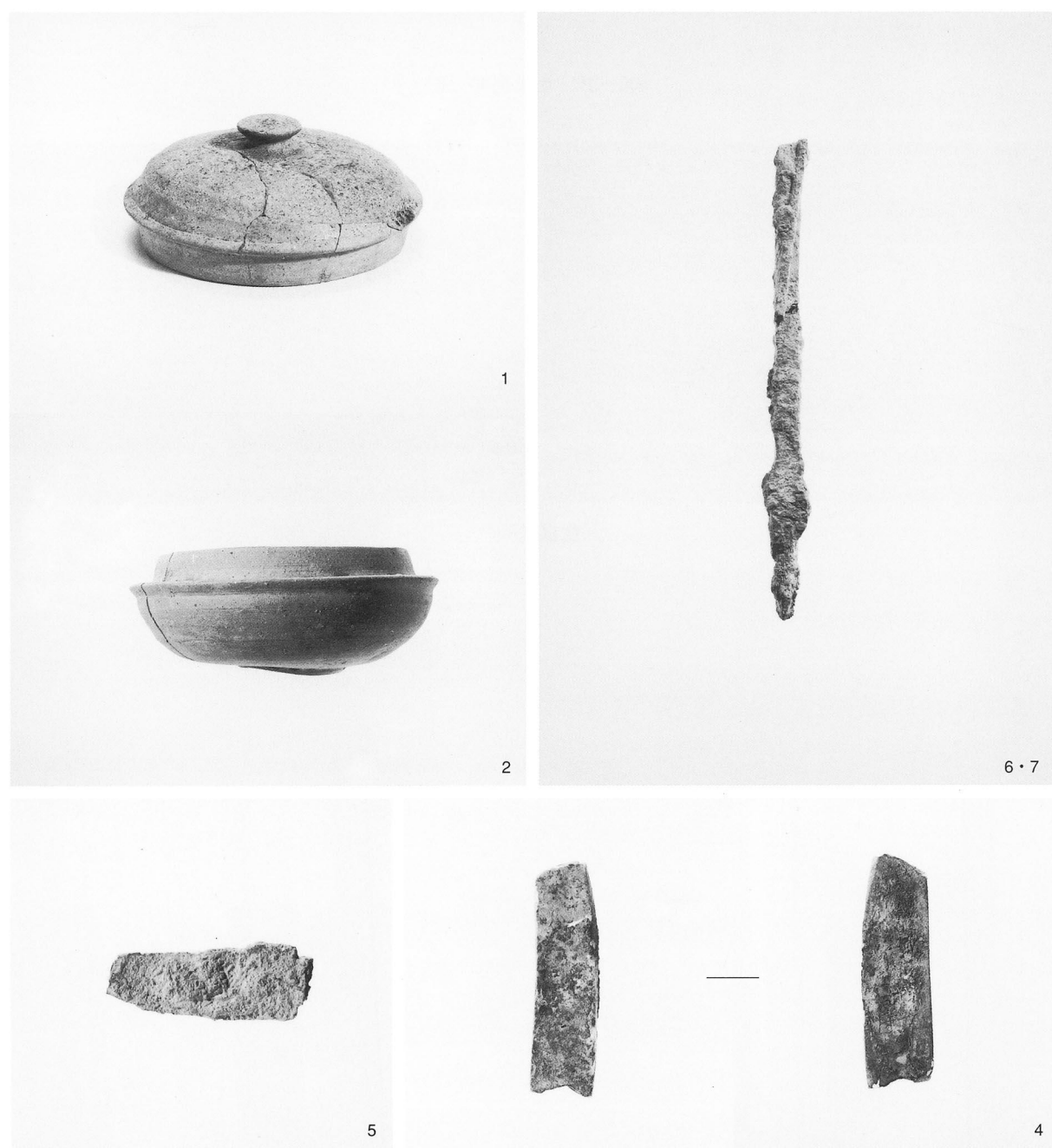
44号墳 主体部 出土遺物



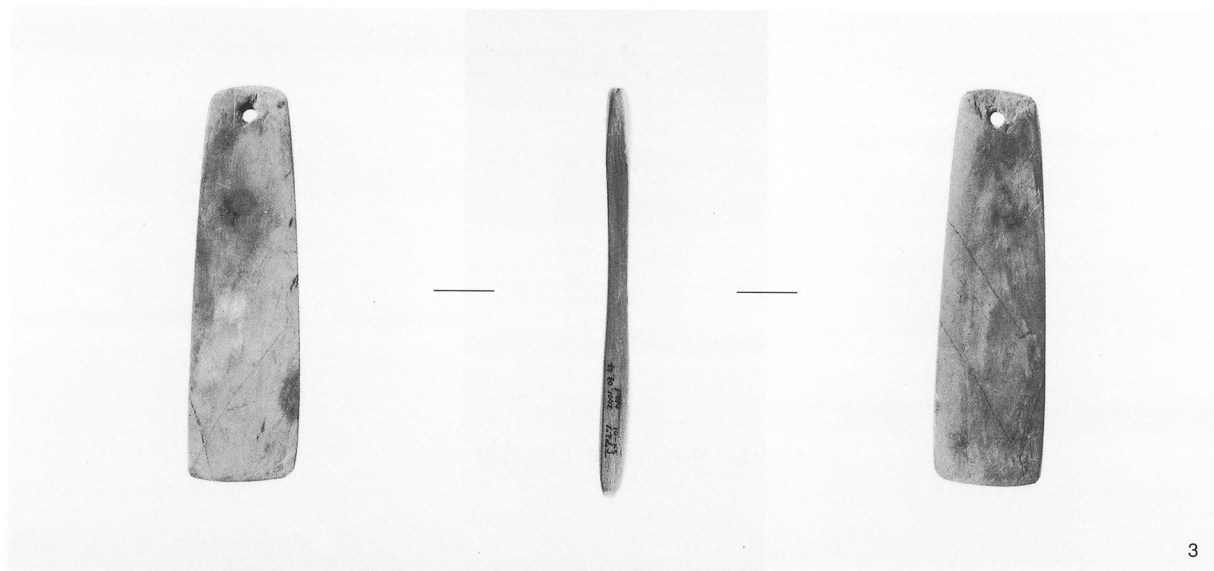
44号墳 墳丘・周溝 出土遺物 (1)



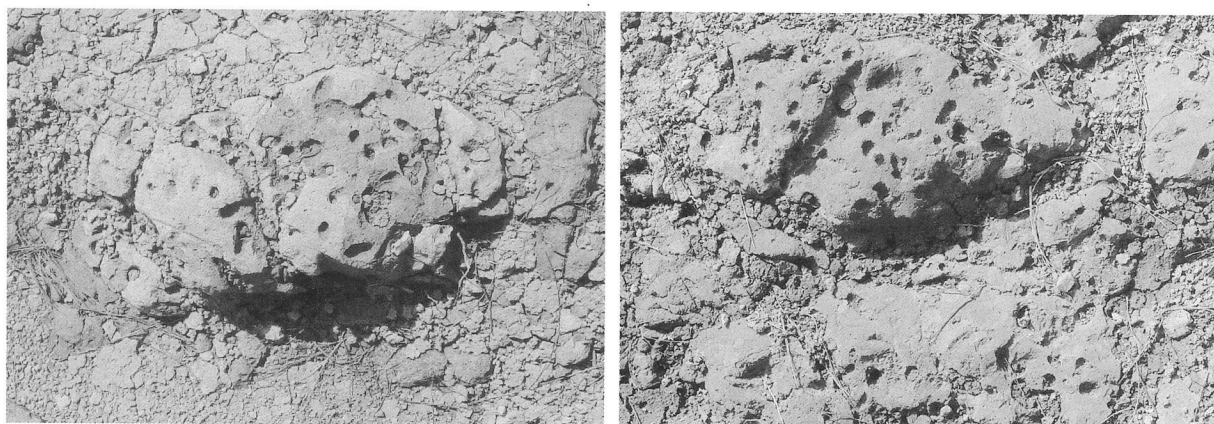
44号墳 墳丘・周溝 出土遺物 (2)



SX-01 出土遺物 (1)



SX-01 出土遺物 (2)



生痕化石

報 告 書 抄 録

ふりがな	しもあじのこふんぐん							
書名	下味野古墳群 I							
副書名	姫鳥線整備促進関連事業に係る下味野40～44号墳の発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	藤本 隆之 杉谷 美恵子							
編集機関	財団法人 鳥取市文化財団							
所在地	〒680-0015 鳥取県鳥取市上町88				TEL (0857) 23-2149			
発行年月日	西暦2002年 3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東緯 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しもあじのこふんぐん 下味野古墳群 (下味野40～ 44号墳)	とっとりし 鳥取市 しもあじの 下味野	31201		35°	134°	20001030	1,525m ²	姫鳥線 (中国横断道) 整備促進 関連事業に 伴う調査
				27'	11'	～		
				45～46"	42～45"	20010331		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
下味野古墳群	古墳	古墳時代 中期 ～ 後期	古墳 5基 (円墳 4基) (方形墳 1基) (埋葬施設 4基) (他)埋葬施設 1基	土師器 須恵器 鉄製品 (鉄剣、鉄斧、鉄鎌、刀子) 玉類(勾玉、ガラス小玉) 砥石 弥生土器 石製品 (扁平片刃石斧、磨石)	40号墳から72cmの 鉄剣出土 43号墳石棺内から 鉄鉾出土 地山の基盤岩には 生痕化石の可能性			

しもあじのこふんぐん
下味野古墳群 I

— 姫鳥線整備促進関連事業に係る下味野40～44号墳の発掘調査報告書 —

平成14年3月31日 印刷・発行

編集・発行 財団法人 鳥取市文化財団

印刷所 勝美印刷株式会社
